

斜陽

太宰治

青空文庫

朝、食堂でスープを一さじ、すつと吸ってお母さまが、

「あ」

と幽かすかな叫び声をお挙げになった。

「髪の毛？」

スープに何か、イヤなものでも入っていたのかしら、と思った。

「いいえ」

お母さまは、何事も無かったように、またひらりと一さじ、スープをお口に流し込み、すましてお顔を横に向け、お勝手の窓の、

満開の山桜に視線を送り、そうしてお顔を横に向けたまま、またひらりと一さじ、スープを小さなお唇のあいだに滑り込ませた。ヒラリ、という形容は、お母さまの場合、決して誇張では無い。婦人雑誌などに出ているお食事のいただき方などは、てんでまるで、違っていらつしやる。弟の直治なほじがいつか、お酒を飲みながら、姉の私に向つてこう言つた事がある。

「爵位しやくいがあるから、貴族だというわけにはいかないんだぜ。爵位が無くても、天爵というものを持つている立派な貴族のひとつもあるし、おれたちのように爵位だけは持つていても、貴族どころか、賤民せんみんにちかいのもいる。岩島なんてのは（と直治の学友の伯爵のお名前を挙げて）あんなのは、まったく、新宿の遊廓ゆうかくの

客引き番頭よりも、もつとげびてる感じじゃねえか。こないだも、柳井やない（と、やはり弟の学友で、子爵の御次男のかたのお名前を挙げて）の兄貴の結婚式に、あんちきしよう、タキシイドなんか着て、なんだってまた、タキシイドなんかを着て来る必要があるんだ、それはまあいいとして、テーブルスピーチの時に、あの野郎、ゴザイマスルという不可思議な言葉をつかったのには、げつとなつた。気取るといふ事は、上品という事と、ぜんぜん無関係なあさましい虚勢だ。高等御下宿おんと書いてある看板が本郷あたりによくあつたものだけでも、じつさい華族なんてももの大部分は、高等御乞食おんこじきとでもいったようなものなんだ。しんの貴族は、あんな岩島みたいな下手な気取りかたなんか、しやしないよ。おれ

たちの一族でも、ほんものの貴族は、まあ、ママくらいのもだろう。あれは、ほんものだよ。かなわねえところがある」

スープのいただきかたにしても、私たちなら、お皿さらの上にすこしうつむき、そうしてスプウンを横に持ってスープを掬すくい、スプウンを横にしたまま口元に運んでいただくのだけでも、お母さまは左手のお指を軽くテーブルの縁ふちにかけて、上体をかがめる事も無く、顔をしゃんと挙げて、お皿つぼめをろくに見もせずスプウンを横にしてさつと掬って、それから、燕つばめのように、とでも形容したいくらいに軽く鮮やかにスプウンをお口と直角になるように持ち運んで、スプウンの尖せんたん端から、スープをお唇のあいだに流し込むのである。そうして、無心そうにあちこち傍見わきみなどなさりな

がら、ひらりひらりと、まるで小さな翼のようにスプウンをあつかい、スープを一滴もおこぼしになる事も無いし、吸う音もお皿の音も、ちつともお立てにならぬのだ。それは所謂いわゆる正式礼法にかなつたいただき方では無いかも知れないけれども、私の目には、とても可愛かわいらしく、それこそほんものみたいに見える。また、事実、お飲物は、口に流し込むようにしていただいたほうが、不思議なくらいにおいしいものだ。けれども、私は直治の言うような高等御乞食なのだから、お母さまのようにあんなに軽く無雑作むざうさにスプウンをあやつる事が出来ず、仕方なく、あきらめて、お皿の上につむき、所謂正式礼法どおりの陰気ないただき方をしているのである。

スープに限らず、お母さまの食事のいただき方は、頗るすこぶ礼法に
はずれている。お肉が出ると、ナイフとフォークで、さつさと全部
小さく切りわけてしまつて、それからナイフを捨て、フォークを右
手に持ちかえ、その一きれ一きれをフォークに刺してゆつくり楽し
そうに召し上がつていらつしやる。また、骨つきのチキンなど、
私たちがお皿を鳴らさずに骨から肉を切りはなすのに苦心してい
る時、お母さまは、平気でひよいと指先で骨のところをつまんで
持ち上げ、お口で骨と肉をはなして澄ましていらつしやる。そん
な野蛮な仕草も、お母さまがなさると、可愛らしいばかりか、へ
んにエロチックにさえ見えるのだから、さすがにほんものは違つ
たものである。骨つきのチキンの場合だけでなく、お母さまは、

ランチのお菜さいのハムやソーセージなども、ひよいと指先でつまんで召し上る事さえ時たまある。

「おむすびが、どうしておいしいのだから、知っていますか。あれはね、人間の指で握りしめて作るからですよ」

とおっしゃった事もある。

本当に、手でたべたら、おいしいだろうな、と私も思う事があ
るけれど、私のような高等御食食が、下手に真似まねしてそれをやっ
たら、それこそほんものの乞食の凶になってしまいそうな気もす
るので我慢している。

弟の直治でさえ、ママにはかなわねえ、と言っているが、つく
づく私も、お母さまの真似は困難で、絶望みたいなものをさえ感

じる事がある。いつか、西片町のおうちの奥庭で、秋のはじめの月のいい夜であったが、私はお母さまと二人でお池の端のあずまやで、お月見をして、狐きつねの嫁入りと鼠ねずみの嫁入りとは、お嫁のお支度がどうちがうか、など笑いながら話合っているうちに、お母さまは、つとお立ちになって、あずまやの傍そばの萩はぎのしげみの奥へおはいりになり、それから、萩の白い花のあいだから、もつとあざやかに白いお顔をお出しになって、少し笑って、

「かず子や、お母さまがいま何をなさっているか、あててごらん」とおっしゃった。

「お花を折っていらつしやる」

と申し上げたら、小さい声を挙げてお笑いになり、

「おしっこよ」

とおつしやつた。

ちつともしやがんでいらつしやらないのには驚いたが、けれども、私などにはとても真似られない、しんから可愛らしい感じがあつた。

けさのスウプの事から、ずいぶん脱線しちゃつたけれど、こないだあ或る本で読んで、ルイ王朝の頃の貴婦人たちは、宮殿のお庭や、それから廊下の隅すみなどで、平気でおしっこをしていたという事を知り、その無心さが、本当に可愛らしく、私のお母さまなども、そのようなほんものの貴婦人の最後のひとりなのではなからうかと考えた。

さて、けさは、スープを一さじお吸いになって、あ、と小さい声をお挙げになつたので、髪の毛？ とおたずねすると、いいえ、とお答えになる。

「塩辛かつたかしら」

けさのスープは、こないだアメリカから配給になつた罐詰かんづめのグリーンピースを裏ごしして、私がポタージュみたいに作つたもので、もともとお料理には自信が無いので、お母さまに、いいえ、と言われても、なおも、はらはらしてそうたずねた。

「お上手に出来ました」

お母さまは、まじめにそう言い、スープをすまして、それからお海苔のりで包んだおむすびを手でつまんでおあがりになつた。

私は小さい時から、朝ごはんがおいしくなく、十時頃にならなければ、おなかですかないので、その時も、スープだけはどうかやりましたけれども、食べるのがたいぎで、おむすびをお皿に載せて、それにお箸^{はし}を突込み、ぐしゃぐしゃにこわして、それからその一かけらをお箸でつまみ上げ、お母さまがスープを召し上る時のスプーンみたいに、お箸をお口と直角にして、まるで小鳥に餌^{えさ}をやるような工合^{ぐあ}いにお口に押し込み、のろのろといただいているうちに、お母さまはもうお食事を全部すましてしまつて、そつとお立ちになり、朝日の当っている壁にお背中をもたせかけ、しばらく黙つて私のお食事の仕方を見ていらして、

「かず子は、まだ、駄目なのね。朝御飯が一番おいしくなるよう

にならなければ」

とおつしやつた。

「お母さまは？　おいしいの？」

「そりやもう。私は病人じゃないもの」

「かず子だつて、病人じゃないわ」

「だめ、だめ」

お母さまは、淋さびしそうに笑つて首を振つた。

私は五年前に、肺病という事になつて、寝込んだ事があつたけれども、あれは、わがまま病だつたという事を私は知っている。

けれども、お母さまのこないだの御病気は、あれこそ本当に心配な、哀かなしい御病気だつた。だのに、お母さまは、私の事ばかり心

配していらつしやる。

「あ」

と私が言った。

「なに？」

とこんどは、お母さまのほうでたずねる。

顔を見合せ、何か、すっかりわかり合ったものを感じて、うふふと私が笑うと、お母さまも、にっこりお笑いになった。

何か、たまらない恥ずかしい思いに襲われた時に、あの奇妙な、あ、という幽かな叫び声が出るものなのだ。私の胸に、いま出し抜けにふうつと、六年前の私の離婚の時の事が色あざやかに思い浮んで来て、たまらなくなり、思わず、あ、と言ってしまったの

だが、お母さまの場合は、どうなのだろう。まさかお母さまに、私のような恥ずかしい過去があるわけは無し、いや、それとも、何か。

「お母さまも、さつき、何か思い出しになったのでしょうか？
どんな事？」

「忘れたわ」

「私の事？」

「いいえ」

「直治の事？」

「そう」

と言いかけて、首をかしげ、

「かも知れないわ」

とおっしやつた。

弟の直治は大学の中途で召集され、南方の島へ行ったのだが、消息が絶えてしまつて、終戦になつても行先が不明で、お母さまは、もう直治には逢^あえないと覚悟している、とおっしやつているけれども、私は、そんな、「覚悟」なんかした事は一度もない、きつと逢える**とばかり思っている。**

「あきらめてしまつたつもりなんだけど、おいしいスウプをいただいて、直治を思つて、たまらなくなつた。もつと、直治に、よくしてやればよかつた」

直治は高等学校にはいった頃から、いやに文学にこつて、ほと

んど不良少年みたいな生活をはじめて、どれだけお母さまに御苦労をかけたか、わからないのだ。それだのにお母さまは、スウプを一さじ吸っては直治を思い、あ、とおっしやる。私はごはんを口に押し込み眼が熱くなった。

「大丈夫よ。直治は、大丈夫よ。直治みたいな悪漢は、なかなか死ぬものじゃないわよ。死ぬひとは、きまつて、おとなしくて、綺麗きれいで、やさしいものだわ。直治なんて、棒でたたいたつて、死にやしない」

お母さまは笑つて、

「それじゃ、かず子さんは早死にのほうかな」と私をからかう。

「あら、どうして？ 私なんか、悪漢のおデコさんですから、八十歳までは大丈夫よ」

「そうなの？ そんなら、お母さまは、九十歳までは大丈夫ね」
「ええ」

と言いかけて、少し困った。悪漢は長生きする。綺麗なひとは早く死ぬ。お母さまは、お綺麗だ。けれども、長生きしてもらいたい。私は頗るまごついた。

「意地わるね！」

と言ったら、したくちびる下唇がぶるぶる震えて来て、涙が眼からあふれて落ちた。

蛇へびの話をしようかしら。その四、五日前の午後に、近所の子供たちが、お庭の垣かきの竹藪たけやぶから、蛇の卵を十ばかり見つけて来たのである。

子供たちは、

「まむしの卵だ」

と言い張った。私はあの竹藪に蝮が十匹も生れては、うっかりお庭にも降りられないと思つたので、

「焼いちやおう」

と言うと、子供たちはおどりがつて喜び、私のあとからついて来る。

竹藪の近くに、木の葉や柴しばを積み上げて、それを燃やし、その

火の中に卵を一つずつ投げ入れた。卵は、なかなか燃えなかった。子供たちが、更に木の葉や小枝を焰ほのおの上にかぶせて火勢を強くしても、卵は燃えそうもなかった。

下の農家の娘さんが、垣根の外から、

「何をしていらつしやるのですか？」

と笑いながらたずねた。

「蝮の卵を燃やしているのです。蝮が出ると、こわいんですもの」

「大きさは、どれくらいですか？」

「うずらの卵くらいで、真白なんです」

「それじゃ、ただの蛇の卵ですわ。蝮の卵じゃないでしょう。生なま

の卵は、なかなか燃えませんよ」

娘さんは、さも可笑しおかそうに笑つて、去つた。

三十分ばかり火を燃やしていたのだけれども、どうしても卵は燃えないので、子供たちに卵を火の中から拾わせて、梅の木の下に埋めさせ、私は小石を集めて墓標を作つてやつた。

「さあ、みんな、拜むのよ」

私がしやがんで合掌すると、子供たちもおとなしく私のうしろにしやがんで合掌したようであつた。そうして子供たちとわかれ、私ひとり石段をゆつくりのぼつて来ると、石段の上の、藤ふじだ棚なの蔭かげにお母さまが立っていらして、

「可哀かわいそうな事をするひとね」

とおつしやつた。

「蝮かと思つたら、ただの蛇だったの。けれど、ちゃんと埋葬してやったから、大丈夫」

とは言つたものの、こりやお母さまに見られて、まずかつたかなと思つた。

お母さまは決して迷信家ではないけれども、十年前、お父上が西片町のお家で亡くなられてから、蛇をとても恐れていらつしやる。お父上の御臨終の直前に、お母さまが、お父上の枕まくらもと元に細い黒い紐ひもが落ちてゐるのを見て、何気なく拾おうとなさつたら、それが蛇だった。するすると逃げて、廊下に出てそれからどこへ行つたかわからなくなつたが、それを見たのは、お母さまと、和田の叔父さまとお二人きりで、お二人は顔を見合せ、けれども御

臨終のお座敷の騒ぎにならぬよう、こらえて黙っていらしたという。私たちも、その場に居合せていたのだが、その蛇の事は、だから、ちつとも知らなかった。

けれども、そのお父上の亡くなられた日の夕方、お庭の池のはたの、木という木に蛇がのぼっていた事は、私も実際に見て知っている。私は二十九のばあちゃんだから、十年前のお父上の御ごせい逝去きよの時は、もう十九にもなっていたのだ。もう子供では無かったのだから、十年経たつても、その時の記憶はいまでもはつきりしていて、間違いは無い筈はずだが、私がお供えの花を剪きりに、お庭のお池のほうに歩いて行って、池の岸のつつじのところ立ちどまって、ふと見ると、そのつつじの枝先に、小さい蛇がまきつい

ていた。すこしおどろいて、つぎの山吹の花枝を折ろうとすると、その枝にも、まきついていた。隣りの木もくせい犀にも、若わかかえで楓にも、えにしだにも、藤にも、桜にも、どの木にも、どの木にも、蛇がまきついていたのである。けれども私には、そんなにこわく思われなかった。蛇も、私と同様にお父上の逝去を悲しんで、穴から這はい出てお父上の霊を拜んでいるのであろうというような気がした。ただけであつた。そうして私は、そのお庭の蛇の事を、お母さまにそつとお知らせしたら、お母さまは落ちついて、ちよつと首を傾けて何か考えるような御様子をなさつたが、べつに何もおつしやりはしなかつた。

けれども、この二つの蛇の事件が、それ以来お母さまを、ひど

い蛇ぎらいにさせたのは事実であつた。蛇ぎらいというよりは、蛇をあがめ、おそれる、つまり畏怖いふの情をお持ちになつてしまつたようだ。

蛇の卵を焼いたのを、お母さまに見つけられ、お母さまはきつと何かひどく不吉なものをお感じになつたに違いないと思つたら、私も急に蛇の卵を焼いたのがたいへんなおそろしい事だつたような気がして来て、この事がお母さまに或いは悪い祟りたたをするのではあるまいかと、心配で心配で、あくる日も、またそのあくる日も忘れる事が出来ずにいたのに、けさは食堂で、美しい人は早く死ぬ、などめつそうも無い事をつい口走つて、あとで、どうにも言いつくろいが出来ず、泣いてしまったのだが、朝食のあと片づ

けをしながら、何だか自分の胸の奥に、お母さまのお命をちぢめる気味わるい小蛇が一匹はいり込んでいるようで、いやでいやで仕様が無かった。

そうして、その日、私はお庭で蛇を見た。その日は、とてもなごやかないいお天気だったので、私はお台所のお仕事をすませて、それからお庭の芝生の上に籐椅子とういすをはこび、そこで編物を仕様と
思つて、籐椅子を持ってお庭に降りたら、庭石の笹ささのところ
がいた。おお、いやだ。私はただそう思っただけで、それ以上深く考える事もせず、籐椅子を持って引返して縁側にあがり、縁側に椅子を置いてそれに腰かけて編物にとりかかった。午後になつて、私はお庭の隅の御堂の奥にしまつてある蔵書の中から、ロー

ランサンの画集を取り出して来ようと思つて、お庭へ降りたら、芝生の上を、蛇が、ゆつくりゆつくり這つてゐる。朝の蛇と同じだった。ほっそりした、上品な蛇だった。私は、女蛇だ、と思つた。彼女は、芝生を静かに横切つて野ばらの蔭まで行くと、立ちどまつて首を上げ、細い焰のような舌をふるわせた。そうして、あたりを眺めるながようなかっこう恰好をしたが、しばらくすると、首を垂れ、いかにも物憂げものうにうづくまつた。私はその時にも、ただ美しい蛇だ、という思ひばかりが強く、やがて御堂に行つて画集を持ち出し、かえりにさつきの蛇のいたところをそつと見たが、もういなかつた。

夕方ちかく、お母さまと支那間でお茶をいただきながら、お庭

のほうを見ていたら、石段の三段目の石のところに、けさの蛇がまたゆつくりとあらわれた。

お母さまもそれを見つ、

「あの蛇は？」

とおっしゃるなり立ち上って私のほうに走り寄り、私の手をとったまま立ちすくんでおしまいになった。そう言われて、私も、はつと思ひ当り、

「卵の母親？」

と口に出して言ってしまった。

「そう、そうよ」

お母さまのお声は、かすれていた。

私たちは手をとり合つて、息をつめ、黙つてその蛇を見護みまもつた。石の上に、物憂げにうづくまつていた蛇は、よろめくようにまた動きはじめ、そうして力弱そうに石段を横切り、かきつばたのほうに這はい入つて行つた。

「けさから、お庭を歩きまわっていたのよ」

と私が小声で申し上げたら、お母さまは、溜ためいき息をついてくたりと椅子に坐すわり込んでおしまいになつて、

「そうでしょう？ 卵を捜しているのですよ。可哀そうに」と沈んだ声でおっしゃつた。

私は仕方なく、ふふと笑つた。

夕日がお母さまのお顔に當つて、お母さまのお眼が青いくらい

に光って見えて、その幽かに怒りを帯びたようなお顔は、飛びつきたいほどに美しかった。そうして、私は、ああ、お母さまのお顔は、さっきのあの悲しい蛇に、どこか似ていらっしやる、と思った。そうして私の胸の中に住む蝮みたいにごろごろして醜い蛇が、この悲しみが深くて美しい美しい母蛇をいつか、食い殺してしまうのではなからうかと、なぜだか、なぜだか、そんな気がした。

私はお母さまの軟らかなきやしやお肩に手を置いて、理由のわからない身悶みもだえをした。

私たちが、東京の西片町のお家を捨て、伊豆いずのこの、ちよつと

支那ふうの山荘に引越して来たのは、日本が無条件降伏をしたと
しの、十二月のはじめであつた。お父上がお亡くなりになつてか
ら、私たちの家の経済は、お母さまの弟で、そうしていまではお
母さまのたった一人の肉親でいらつしやる和田の叔父さまが、全
部お世話して下さいたのだが、戦争が終わつて世の中が変り、
和田の叔父さまが、もう駄目だ、家を売るより他は無い、女中に
も皆ひまを出して、親子二人で、どこか田舎の小綺麗な家を買ひ、
気ままに暮したほうがいい、とお母さまにお言い渡しになつた様
子で、お母さまは、お金の事は子供よりも、もっと何もわからな
いお方だし、和田の叔父さまからそう言われて、それではどうか
よろしく、とお願ひしてしまつたようである。

十一月の末に叔父さまから速達が来て、駿豆鉄道すんずの沿線に河田ししやく子爵の別荘が売り物に出ている、家は高台で見晴しがよく、畑も百坪ばかりある、あのあたりは梅の名所で、冬暖かく夏涼しく、住めばきつと、お気に召すところと思う、先方と直接お逢いになつてお話をする必要もあると思われるから、明日、とにかく銀座の私の事務所までおいでを乞こう、という文面で、

「お母さま、おいでなさる？」

と私がたずねると、

「だって、お願いしていたのだもの」

と、とてもたまらなく淋しそうに笑つておっしゃつた。

翌あくる日、もとの運転手の松山さんにお伴ともをたのんで、お母さま

は、お昼すこし過ぎにおでかけになり、夜の八時頃、松山さんに送られてお帰りになった。

「きめましたよ」

かず子のお部屋へはいつて来て、かず子の机に手をつけてそのまま崩れるようにお坐りになり、そう一言ひとことおつしやつた。

「きめたって、何を？」

「全部」

「だって」

と私はおどろき、

「どんなお家だか、見もしないうちに、……」

お母さまは机の上に片かたひじ肘を立て、額に軽くお手を当て、小さ

い溜息をおつきになり、

「和田の叔父さまが、いい所だとおっしゃるのだもの。私は、このまま、眼をつぶってそのお家へ移って行っても、いいような気がする」

とおっしゃって顔を挙げて、かすかにお笑いになった。その顔は、少しやつれて、美しかった。

「そうね」

と私も、お母さまの和田の叔父さまに対する信頼心の美しさに負けて、合あいづち槌を打ち、

「それでは、かず子も眼をつぶるわ」

二人で声を立てて笑ったけれども、笑ったあとが、すごく淋し

くなくなった。

それから毎日、お家へ人夫が来て、引越しの荷ごしらえがはじまった。和田の叔父さまも、やって来られて、売り払うものは売り払うようにそれぞれ手配をして下さった。私は女中のお君と二人で、衣類の整理をしたり、がらくたを庭先で燃やしたりして、そがしい思いをしていたが、お母さまは、少しも整理のお手伝いも、お指図さしずもなさらず、毎日お部屋で、なんとなく、ぐずぐずしていらつしやるのである。

「どうなさったの？ 伊豆へ行きたくなくなったの？」

と思いつつ、少しきつくお訊たずねしても、

「いいえ」

とぼんやりしたお顔でお答えになるだけであつた。

十日ばかりして、整理が出来上つた。私は、夕方お君と二人で、紙くずや藁わらを庭先で燃やしていると、お母さまも、お部屋から出ていらして、縁側にお立ちになつて黙つて私たちの焚火たきびを見ていらした。灰色みたいな寒い西風が吹いて、煙が低く地を這はつていて、私は、ふとお母さまの顔を見上げ、お母さまのお顔色が、いままで見たこともなかつたくらいに悪いのにびっくりして、

「お母さま！ お顔色がお悪いわ」

と叫ぶと、お母さまは薄くお笑いになり、

「なんでもないの」

とおつしやつて、そつとまたお部屋におはいりになつた。

その夜、お蒲団ふとんはもう荷造りをすましてしまったので、お君は二階の洋間のソファに、お母さまと私は、お母さまのお部屋に、お隣りからお借りした一組のお蒲団をひいて、二人一緒にやすんだ。

お母さまは、おや？　と思つたくらいに老ふけた弱々しいお声で、「かず子がいるから、かず子がいってくれるから、私は伊豆へ行くのですよ。かず子がいってくれるから」

と意外な事をおっしゃった。

私は、どきんとして、

「かず子がいなかつたら？」

と思わずたずねた。

お母さまは、急にお泣きになって、

「死んだほうがよいのです。お父さまの亡くなったこの家で、お母さまも、死んでしまいたいんですよ」

と、とぎれとぎれにおっしゃって、いよいよはげしくお泣きになった。

お母さまは、今まで私に向つて一度だつてこんな弱音をおっしゃつた事が無かつたし、また、こんなに烈はげしくお泣きになつるところを私に見せた事も無かつた。お父上がお亡くなりになつた時も、また私がお嫁に行く時も、そして赤ちゃんをおなかにいれてお母さまの許もとへ歸つて来た時も、そして、赤ちゃんが病院で死んで生れた時も、それから私が病氣になつて寝込んでしまった

時も、また、直治が悪い事をした時も、お母さまは、決してこんなお弱い態度をお見せになりはしなかつた。お父上がお亡くなりになって十年間、お母さまは、お父上の在世中と少しも変らない、のんきな、優しいお母さまだった。そうして、私たちも、いい氣になつて甘えて育つて来たのだ。けれども、お母さまには、もうお金が無くなつてしまつた。みんな私たちのために、私と直治のために、みじんも惜しまずにお使いになつてしまつたのだ。そうしてもう、この永年住みなれたお家から出て行つて、伊豆の小さい山荘で私とたつた二人きりで、わびしい生活をはじめなければならなくなつた。もしお母さまが意地悪でケチケチして、私たちが叱しかつて、そうして、こつそりご自分だけのお金をふやす事を工

夫なざるようなお方であつたら、どんなに世の中が變つても、こんな、死にたくなるようなお気持ちにおなりになる事はなかつたらうに、ああ、お金が無くなるという事は、なんというおそろしい、みじめな、救いの無い地獄だろう、と生れてはじめて気がついた思いで、胸が一ぱいになり、あまり苦しくて泣きたくても泣けず、人生の嚴肅とは、こんな時の感じを言うのであろうか、身動き一つ出来ない気持ちで、仰あおむけ向むかに寝たまま、私は石のように凝じつとしていた。

翌る日、お母さまは、やはりお顔色が悪く、なお何やらぐずぐずして、少しでも永くこのお家にいらつしやりたい様子であつたが、和田の叔父さまが見えられて、もう荷物はほとんど発送して

しまったし、きよう伊豆に出発、とお言いつけになったので、お母さまは、しぶしぶコートを着て、おわかれの挨拶あいさつを申し上げるお君や、出入のひとたちに無言でお会釈なさつて、叔父さまと私と三人、西片町のお家を出た。

汽車は割に空すいていて、三人とも腰かけられた。汽車の中では、叔父さまは非常な上機嫌じょうきげんでうたいなど唸うなつていらつしやつたが、お母さまはお顔色が悪く、うつむいて、とても寒そうにしていた。三島で駿豆鉄道に乗りかえ、伊豆長岡で下車して、それからバスで十五分くらいで降りてから山のほうに向つて、ゆるやかな坂道をのぼつて行くと、小さい部落があつて、その部落のはずれに、支那ふうの、ちよつとこつた山荘があつた。

「お母さま、思ったよりもいい所ね」

と私は息をはずませて言った。

「そうね」

とお母さまも、山荘の玄関の前に立って、一瞬うれしそうな眼つきをなさった。

「だいいち、空気がいい。清浄な空気です」

と叔父さまは、ご自慢なさった。

「本当に」

とお母さまはほほえ微笑まれて、

「おいしい。ここの空気は、おいしい」

とおっしゃった。

そうして、三人で笑った。

玄関にはいつてみると、もう東京からのお荷物が着いていて、玄関からお部屋からお荷物で一ぱいになっていた。

「次には、お座敷からの眺めがよい」

叔父さまは浮かれて、私たちをお座敷に引っぱって行って坐らせた。

午後の三時頃で、冬の日が、お庭の芝生にやわらかく当たっていて、芝生から石段を降りつくしたあたりに小さいお池があり、梅の木がたくさんあって、お庭の下には蜜柑畑みかんばたけがひろがり、それから村道があつて、その向うは水田で、それからずっと向うに松林があつて、その松林の向うに、海が見える。海は、こうしてお

座敷に坐っていると、ちょうど私のお乳のさきに水平線がさわるくらいの高さに見えた。

「やわらかな景色ねえ」

とお母さまは、もの憂そうにおっしゃった。

「空気のせいかしら。陽ひの光が、まるで東京と違うじゃないの。光線が絹ごしされているみたい」

と私は、はしゃいで言った。

十畳間と六畳間と、それから支那式の応接間と、それからお玄関が三畳、お風呂場のところにも三畳がついていて、それから食堂とお勝手と、それからお二階に大きいベッドの附ついた来客用の洋間が一間、それだけの間数まかずだけれども、私たち二人、いや、直

治が帰って三人になつても、別に窮屈でないと思つた。

叔父さまは、この部落でたつた一軒だという宿屋へ、お食事を交渉に出かけ、やがてとどけられたお弁当を、お座敷にひろげて御持参のウイスキーをお飲みになり、この山荘の以前の持主でいらした河田子爵と支那で遊んだ頃の失敗談など語つて、大陽氣であつたが、お母さまは、お弁当にもほんのちよつとお箸をおつけになつただけで、やがて、あたりが薄暗くなつて来た頃、

「すこし、このまま寝かして」

と小さい声でおつしやつた。

私がお荷物の中からお蒲団を出して、寝かせてあげ、何だかひどく気がかりになつて来たので、お荷物から体温計を捜し出して、

お熱を計ってみたら、三十九度あった。

叔父さまもおどろいたご様子で、とにかく下の村まで、お医者
を捜しに出かけられた。

「お母さま！」

とお呼びしても、ただ、うとうとしていらつしやる。

私はお母さまの小さいお手を握りしめて、すすり泣いた。お母
さまが、お可哀想でお可哀想で、いいえ、私たち二人が可哀想で
可哀想で、いくら泣いても、とまらなかつた。泣きながら、ほん
とうにこのままお母さまと一緒に死にたいと思つた。もう私たち
は、何も要らない。私たちの人生は、西片町のお家を出た時に、
もう終つたのだと思つた。

二時間ほどして叔父さまが、村の先生を連れて来られた。村の先生は、もうだいぶおとし寄りのようで、そうしてせんだいひらはかま仙台平の袴を着け、白足袋をはいておられた。

ご診察が終つて、

「肺炎になるかも知れませんが、ございます。けれども、肺炎になりましても、御心配はございません」

と、何だかたより無い事をおっしゃつて、注射をして下さつて歸られた。

翌る日になつても、お母さまのお熱は、さがらなかつた。和田の叔父さまは、私に二千円お手渡しになつて、もし万一、入院などしなければならぬようになったら、東京へ電報を打つように、

と言ひ残して、ひとまずその日に帰京なされた。

私はお荷物の中から最小限の必要な炊事道具を取り出し、おかゆを作ってお母さまにすすめた。お母さまは、おやすみのまま、三さじおあがりになって、それから、首を振った。

お昼すこし前に、下の村の先生がまた見えられた。こんどはお袴は着けていなかったが、白足袋は、やはりはいておられた。

「入院したほうが、……」

と私が申し上げたら、

「いや、その必要は、ございませんでしょう。きようは一つ、強
いお注射をしてさし上げますから、お熱もさがる事でしょう」

と、相変らずたより無いようなお返事で、そうして、所謂いわゆるそ

の強い注射をしてお帰りになられた。

けれども、その強い注射が奇効を奏したのか、その日のお昼かぎに、お母さまのお顔が真赤まっかになって、そうしてお汗がひどく出て、お寝巻を着かえる時、お母さまは笑って、

「名医かも知れないわ」

とおっしゃった。

熱は七度にさがっていた。私はうれしく、この村にたった一軒の宿屋に走って行き、そこのおかみさんに頼んで、鶏卵を十ばかりわけてもらい、さっそく半熟にしてお母さまに差し上げた。お母さまは半熟を三つと、それからおかゆをお茶碗ちやわんに半分ほどい

ただいた。

あくる日、村の名医が、また白足袋をはいてお見えになり、私が昨日の強い注射の御礼を申し上げたら、効きくのは当然、というようなお顔で深くうなずき、ていねいにご診察なさって、そうして私のほうに向き直り、

「大奥さまは、もはや御病気ではございません。でございますから、これからは、何をおあがりになっても、何をなさってもよろしゅうございます」

と、やはり、へんな言いかたをなさるので、私は嘔くき出したいのを泳こらえるのに骨が折れた。

先生を玄関までお送りして、お座敷に引返して来て見ると、お母さまは、お床の上にお坐りになっていらして、

「本当に名医だわ。私は、もう、病氣じゃない」

と、とても楽しそうなお顔をして、うつとりとひとりごとのようにおっしやつた。

「お母さま、障子をあげまじょうか。雪が降っているのよ」

花びらのような大きい牡丹雪ぼたんゆきが、ふわりふわり降りはじめ

いたのだ。私は、障子をあげ、お母さまと並んで坐り、硝子戸越ガラスどしに伊豆の雪を眺めた。

「もう病氣じゃない」

と、お母さまは、またひとりごとのようにおっしやつて、

「こうして坐っていると、以前の事が、皆ゆめだったような気がする。私は本当は、引越し間際まぎわになって、伊豆へ来るのが、どう

しても、なんとしても、いやになってしまったの。西片町のあの
お家に、一日でも半日でも永くいたかったの。汽車に乗った時に
は、半分死んでいるような気持で、ここに着いた時も、はじめち
よつと楽しいような気分がしたけど、薄暗くなったら、もう東京
がこいしくて、胸がこげるようで、気が遠くなってしまったの。
普通の病気じゃないんです。神さまが私をいちどお殺しになって、
それから昨日までの私と違う私にして、よみがえらせて下さった
のだわ」

それから、きょうまで、私たち二人きりの山荘生活が、まあ、
どうやら事も無く、安穩あんのんにつづいて来たのだ。部落の人たちも
私たちに親切にしてくれた。ここへ引越して来たのは、去年の十

二月、それから、一月、二月、三月、四月のきょうまで、私たちはお食事のお支度の他は、たいていお縁側で編物したり、支那間で本を読んだり、お茶をいただいたり、ほとんど世の中と離れてしまったような生活をしていたのである。二月には梅が咲き、この部落全体が梅の花で埋まった。そうして三月になっても、風のないおだやかな日が多かったので、満開の梅は少しも衰えず、三月の末まで美しく咲きつづけた。朝も昼も、夕方も、夜も、梅の花は、溜息ためいきの出るほど美しかった。そうしてお縁側の硝子戸をあけると、いつでも花の匂いにおがお部屋にすつと流れて来た。三月の終りには、夕方になると、きつと風が出て、私が夕暮の食堂でお茶碗を並べていると、窓から梅の花びらが吹き込んで来て、お

茶碗の中にはいつて濡れた。四月になって、私とお母さまがお縁側で編物をしながら、二人の話題は、たいてい畑作りの計画であった。お母さまもお手伝いしたいとおっしゃる。ああ、こうして書いてみると、いかにも私たちには、いつかお母さまのおっしゃったように、いちど死んで、違う私たちになってよみがえったようでもあるが、しかし、イエスさまのような復活は、所詮、人間には出来ないのではなからうか。お母さまは、あんなふうにおっしゃったけれども、それでもやはり、スープを一さじ吸っては、直治を思い、あ、とお叫びになる。そうして私の過去の傷痕も、実は、ちつともなおつていはしないのである。

ああ、何も一つも包みかくさず、はつきり書きたい。この山荘

の安穩は、全部いつわりの、見せかけに過ぎないと、私はひそかに思う時さえあるのだ。これが私たち親子が神さまからいただいた短い休息の期間であつたとしても、もうすでにこの平和には、何か不吉な、暗い影が忍び寄つて来ているような気がしてならない。お母さまは、幸福をお装いになりながらも、日に日に衰え、そうして私の胸にはまむし蝮が宿り、お母さまを犠牲にしてまで太り、自分でおさえてもおさえても太り、ああ、これがただ季節のせいだけのものであつてくれたらよい、私にはこの頃、こんな生活が、とてもたまらなくなる事があるのだ。蛇の卵を焼くなどというはしたない事をしたのも、そのような私のいらいらした思いのあらわれの一つだったのに違いないのだ。そうしてただ、お母さまの

悲しみを深くさせ、衰弱させるばかりなのだ。

恋、と書いたら、あと、書けなくなつた。

二

蛇へびの卵の事があつてから、十日ほど経ち、不吉な事がつづいて起り、いよいよお母さまの悲しみを深くさせ、そのお命を薄くさせた。

私が、火事を起しかけたのだ。

私が火事を起す。私の生しょうがい涯がいにそんなおそろしい事があるろう

とは、幼い時から今まで、一度も夢にさえ考えた事が無かつたの

に。

お火を粗末にすれば火事が起る、というきわめて当然の事にも、
 気づかないほどの私はあの所謂「おひめさま」だったのだから。
 か。

夜中にお手洗いに起きて、お玄関の衝立の傍まで行くと、お
 風呂場のほうが明るい。何気なく覗いてみると、お風呂場の硝子
 戸が真赤で、パチパチという音が聞える。小走りに走って行つて
 お風呂場のくぐり戸をあけ、はだしで外に出てみたら、お風呂の
 かまどの傍に積み上げてあつた薪の山が、すごい火勢で燃えてい
 る。

庭つづきの下の農家に飛んで行き、力一ぱいに戸を叩いて、

「中井さん！　起きて下さい、火事です！」

と叫んだ。

中井さんは、もう、寝ていらっしやったらしかつたが、

「はい、直すぐ行きます」

と返事して、私が、おねがいます、早くおねがいます、と言っているうちに、浴衣ゆかたの寝巻のままでお家から飛び出て来られた。

二人で火の傍に駈かけ戻り、バケツでお池の水を汲くんでかけていると、お座敷の廊下のほうから、お母さまの、ああつ、という叫びが聞えた。私はバケツを投げ捨て、お庭から廊下の上つて、

「お母さま、心配しないで、大丈夫、休んでいらして」

と、倒れかかるお母さまを抱きとめ、お寢床に連れて行って寝かせ、また火のところへ飛んでかえつて、こんどはお風呂の水を汲んでは中井さんに手渡し、中井さんはそれを薪の山にかけたが火勢は強く、とてもそんな事では消えそうもなかった。

「火事だ。火事だ。お別荘が火事だ」

という声が下のほうから聞えて、たちまち四五人の村の人たちが、垣根かきねをこわして、飛び込んでいらした。そうして、垣根の下の、用水の水を、リレー式にバケツで運んで、二、三分のあいだに消しとめて下さった。もう少しで、お風呂場の屋根に燃え移ろうとするところであった。

よかった、と思ったとたんに、私はこの火事の原因に気づいて

ぎよつとした。本当に、私はその時はじめて、この火事騒ぎは、私が夕方、お風呂のかまどの燃え残りの薪を、かまどから引き出して消したつもりで、薪の山の傍に置いた事から起つたのだ、という事に気づいたのだ。そう気づいて、泣き出したくなって立ちつくしていたら、前のお家の西山さんのお嫁さんが垣根の外で、お風呂場が丸焼けだよ、かまどの火の不始末だよ、と声こわだか高に話すのが聞えた。

村長の藤田さん、二宮巡査、警防団長の大内さんなどが、やって来られて、藤田さんは、いつものお優しい笑顔で、

「おどろいたでしょう。どうしたのですか？」
とおたずねになる。

「私が、いけなかつたのです。消したつもりの薪を、……」

と言いかけて、自分があんまりみじめで、涙がわいて出て、それつきりうつむいて黙った。警察に連れて行かれて、罪人になるのかも知れない、とそのとき思った。はだしで、お寝巻のままの取乱した自分の姿が急にはずかしくなり、つくづく、落ちぶれたと思った。

「わかりました。お母さんは？」

と藤田さんは、いたわるような口調で、しずかにおっしゃる。「お座敷にやすませておりますの。ひどくおどろいていらして、

……」

「しかし、まあ」

とお若い二宮巡查も、

「家に火がつかなくて、よかった」

となぐさめるようにおっしゃる。

すると、そこへ下の農家の中井さんが、服装を改めて出直して来られて、

「なにね、薪がちよつと燃えただけなんです。ボヤ、とまでも行きますせん」

と息をはずませて言い、私のおろかな過失をかばって下さる。

「そうですか。よくわかりました」

と村長の藤田さんは二度も三度もうなずいて、それから二宮巡查と何か小声で相談をなさっていらしたが、

「では、帰りますから、どうぞ、お母さんによろしく」

とおっしゃって、そのまま、警防団長の大内さんやその他の方たちと一緒にお帰りになる。

二宮巡査だけ、お残りになって、そうして私のすぐ前まで歩み寄って来られて、呼吸だけのような低い声で、

「それではね、今夜の事は、べつに、とどけない事にしますから」とおっしゃった。

二宮巡査がお帰りになったら、下の農家の中井さんが、

「二宮さんは、どう言われました？」

と、実に心配そうな、緊張のお声でたずねる。

「とどけないって、おっしゃいました」

と私が答えると、垣根のほうにまだ近所のお方がいらして、私の返事を聞きとつた様子で、そうか、よかった、よかった、と言いながら、そろそろ引上げて行かれた。

中井さんも、おやすみなさい、を言ってお帰りになり、あとには私ひとり、ぼんやり焼けた薪の山の傍に立ち、涙ぐんで空を見上げたら、もうそれは夜明けちかい空の気配であつた。

風呂場で、手と足と顔を洗い、お母さまに逢^あうのが何だかおつかなかくつて、お風呂場の三畳間で髪を直したりしてぐずぐずして、それからお勝手に行き、夜のまったく明けはなれるまで、お勝手の食器の用も無い整理などしていた。

夜が明けて、お座敷のほうに、そつと足音をしのばせて行つて

見ると、お母さまは、もうちゃんとお着換えをすましておられて、
そうして支那間のお椅子いすに、疲れ切ったようにして腰かけていら
した。私を見て、につこりお笑いになったが、そのお顔は、びつ
くりするほど蒼あおかった。

私は笑わず、黙つて、お母さまのお椅子のうしろに立った。

しばらくしてお母さまが、

「なんでもない事だったのね。燃やすための薪だもの」
とおっしゃった。

私は急に楽しくなつて、ふふんと笑つた。機おりにかないて語る言かたごとば
は銀ぎんの彫刻物ほりものに金きんの林檎りんごを嵌はめたるが如ごとし、という聖書の箴言しんげん
を思い出し、こんな優しいお母さまを持つている自分の幸福を、

つくづく神さまに感謝した。ゆうべの事は、ゆうべの事。もうよくよすまい、と思つて、私は支那間の硝子戸越しに、朝の伊豆の海を眺め、いつまでもお母さまのうしろに立っていて、おしまいにはお母さまのしずかな呼吸と私の呼吸がぴったり合つてしまつた。

朝のお食事を軽くすましてから、私は、焼けた薪の山の整理にとりかかっていると、この村でたった一軒の宿屋のおかみさんであるお咲さんが、

「どうしたのよ？ どうしたのよ？ いま、私、はじめて聞いて、まあ、ゆうべは、いつたい、どうしたのよ？」

と言いながら庭の枝折戸から小走りに走つてやつて来られて、

そうしてその眼には、涙が光っていた。

「すみません」

と私は小声でわびた。

「すみませんも何も。それよりも、お嬢さん、警察のほうは？」

「いいんですって」

「まあよかった」

と、しんから嬉しそうな顔をして下さった。

私はお咲さんに、村の皆さんへどんな形で、お礼とお詫^わびをし
たらいいか、相談した。お咲さんは、やはりお金がいいでしょう、
と言い、それを持ってお詫^わびまわりをすべき家々を教えて下さつ
た。

「でも、お嬢さんがおひとりまわで廻るのがおいやだったら、私も一緒について行ってあげますよ」

「ひとりで行ったほうが、いいのでしょうか？」

「ひとりで行ける？ そりゃ、ひとりで行ったほうがいいの」

「ひとりで行くわ」

それからお咲さんは、焼跡の整理を少し手伝って下さった。

整理がすんでから、私はお母さまからお金をいただき、百円紙幣を一枚ずつ美濃紙みのがみに包んで、それぞれの包みに、おわび、と書いた。

まず一ばんに役場へ行った。村長の藤田さんはお留守だったの
で、受附うけつけの娘さんに紙包を差し出し、

「昨夜は、申しわけない事を致しました。これから、気をつけますから、どうぞおゆるし下さいまし。村長さんに、よろしく」

とお詫びを申し上げた。

それから、警防団長の大内さんのお家へ行き、大内さんが玄関に出て来られて、私を見て黙って悲しそうに微笑ほほえんでいらして、私は、どうしてだか、急に泣きたくなり、

「ゆうべは、ごめんなさい」

と言うのが、やっとで、いそいでおいとまして、道々、涙があふれて来て、顔がだめになったので、いったんお家へ帰って、洗面所で顔を洗い、お化粧をし直して、また出かけようとして玄関で靴くつをはいていると、お母さまが、出ていらして、

「まだ、どこかへ行くの？」

とおつしやる。

「ええ、これからよ」

私は顔を挙げないで答えた。

「ご苦労さまね」

しんみりおつしやった。

お母さまの愛情に力を得て、こんどは一度も泣かずに、全部をまわる事が出来た。

区長さんのお家に行ったら、区長さんはお留守で、息子さんのお嫁さんが出ていらしたが、私を見るなりかえって向うで涙ぐんでおしまいになり、また、巡査のところでは、二宮巡査が、よか

った、よかった、とおっしゃってくれるし、みんなお優しいお方たちばかりで、それからご近所のお家を廻って、やはり皆さまから、同情され、なぐさめられた。ただ、前のお家の西山さんのお嫁さん、といつても、もう四十くらいのお婆さんだが、そのひとにだけは、びしびししか叱られた。

「これからも気をつけて下さいよ。宮様だか何さままだか知らないけれども、私は前から、あんたたちのままごと遊びみたいな暮し方を、はらはらしながら見ていたんです。子供が二人で暮しているみたいなんだから、いままで火事を起さなかったのが不思議なくらいのものだ。本当にこれからは、気をつけて下さいよ。ゆうべだって、あんた、あれで風が強かったら、この村全部が燃えた

のですよ」

この西山さんのお嫁さんは、下の農家の中井さんなどは村長さんや二宮巡査の前に飛んで出て、ボヤとまでも行きません、と言つてかばつて下さつたのに、垣根の外で、風呂場が丸焼けだよ、かまどの火の不始末だよ、と大きい声で言つていらしたひとである。けれども、私は西山さんのお嫁さんのおこごとにも、眞実を感じた。本当にそのとおりだと思つた。少しも、西山さんのお嫁さんを恨む事は無い。お母さまは、燃やすための薪だもの、と冗談をおつしやつて私をなぐさめて下さつたが、しかし、あの時に風が強かったら、西山さんのお嫁さんのおつしやるとおり、この村全体が焼けたのかも知れない。そうなつたら私は、死んでおわ

びしたつておつつかない。私が死んだら、お母さまも生きては、いらつしやらないだろうし、また亡くなったお父上のお名前をけがしてしまう事にもなる。いまはもう、宮様も華族もあつたものではないけれども、しかし、どうせほろびるものなら、思い切つて華麗にほろびたい。火事を出してそのお詫びに死ぬなんて、そんななじめな死に方では、死んでも死に切れまい。とにかく、もつと、しつかりしなければならぬ。

私は翌日から、畑仕事に精を出した。下の農家の中井さんの娘さんが、時々お手伝いして下さいました。火事を出すなどという醜態を演じてからは、私のからだの血が何だか少し赤黒くなつたような気がして、その前には、私の胸に意地悪の蝮まむしが住み、こんどは

血の色まで少し変ったのだから、いよいよ野性の田舎娘になつて行くような気分で、お母さまとお縁側で編物などをしていても、へんに窮屈で息苦しく、かえつて畑へ出て、土を掘り起したりしているほうが気楽なくらいであつた。

筋肉労働、というのかしら。このような力仕事は、私にとつていまがはじめてではない。私は戦争の時に徴用されて、ヨイトマケまでさせられた。いま畑にはいて出ている地下足袋も、その時、軍のほうから配給になつたものである。地下足袋というものを、その時、それこそ生れてはじめてはいてみたのであるが、びつくりするほど、はき心地がよく、それをはいてお庭を歩いてみたら、鳥やけものが、はだしで地べたを歩いている気軽さが、自分にも

よくわかったような気がして、とても、胸がうずくほど、うれしかった。戦争中の、たのしい記憶は、たったそれ一つきり。思えば、戦争なんて、つまらないものだった。

去年は、何も無かった。

一去年は、何も無かった。

その前のとしも、何も無かった。

そんな面白い詩が、終戦直後の或る新聞あに載っていたが、本当に、いま思い出してみても、さまざまの事があつたような気がしながら、やはり、何も無かつたと同じ様な気もする。私は、戦争の追憶は語るのも、聞くのも、いやだ。人がたくさん死んだのに、それでも陳腐で退屈だ。けれども、私は、やはり自分勝手なので

あろうか。私が徴用されて地下足袋をはき、ヨイトマケをやらされた時の事だけは、そんなに陳腐だとも思えない。ずいぶんいやな思いもしたが、しかし、私はあのヨイトマケのおかげで、すっかりからだ丈夫になり、いまでも私は、いよいよ生活に困つたら、ヨイトマケをやって生きて行こうと思う事があるくらいなのだ。

戦局がそろそろ絶望になって来た頃、軍服みたいなものを着た男が、西片町のお家へやって来て、私に徴用の紙と、それから労働の日割を書いた紙を渡した。日割の紙を見ると、私はその翌日から一日置きに立川の奥の山へかよわなければならなくなつていたので、思わず私の眼から涙があふれた。

「代^{だいにん}人では、いけないのでしょうか」

涙がとまらず、すすり泣きになってしまった。

「軍から、あなたに徴用が来たのだから、必ず、本人でなければいけない」

とその男は、強く答えた。

私は行く決心をした。

その翌日は雨で、私たちは立川の山の麓^{ふもと}に整列させられ、まず
将校のお説教があつた。

「戦争には、必ず勝つ」

と冒頭して、

「戦争には必ず勝つが、しかし、皆さんが軍の命令通りに仕事し

なければ、作戦に支障を来^{きた}し、沖縄のような結果になる。必ず、言われただけの仕事は、やってほしい。それから、この山にも、スパイが這^{はい}入っているかも知れないから、お互いに注意すること。皆さんもこれからは、兵隊と同じに、陣地の中へ這入って仕事をするのであるから、陣地の様子は、絶対に、他言^{たごん}しないように、充分に注意してほしい」

と言った。

山には雨が煙り、男女とりまぜて五百ちかい隊員が、雨に濡^ぬれながら立ってその話を拝聴しているのだ。隊員の中には、国民学校の男生徒女生徒もまじっていて、みな寒そうな泣きべその顔をしていた。雨は私のレインコートをとおして、上衣^{うわぎ}にしみて来て、

やがて肌着はだぎまでぬらしたほどであった。

その日は一日、モッコかつきをして、帰りの電車の中で、涙が出て来て仕様が無かったが、その次の時には、ヨイトマケの綱引だった。そうして、私にはその仕事が一ばん面白かった。

二度、三度、山へ行くうちに、国民学校の男生徒たちが私の姿を、いやにじろじろ見るようになった。或る日、私がモッコかつきをしていると、男生徒が二三人、私とすれちがって、それから、そのうちの一人が、

「あいつが、スパイか」

と小声で言ったのを聞き、私はびっくりしてしまった。

「なぜ、あんな事を言うのかしら」

と私は、私と並んでモッコをかついで歩いている若い娘さんに
たずねた。

「外人みたいだから」

若い娘さんは、まじめに答えた。

「あなたも、あたしをスパイだと思っ
ていらっしやる？」

「いいえ」

こんどは少し笑って答えた。

「私、日本人ですわ」

と言つて、その自分の言葉が、われながら馬鹿らしいナンセン
スのように思われて、ひとりでくすくす笑つた。

或るお天気の良い日に、私は朝から男の人たちと一緒に丸太は

こびをしていると、監視当番の若い将校が顔をしかめて、私を指差し、

「おい、君。君は、こつちへ来給え^{きたま}」

と言つて、さつきと松林のほうへ歩いて行き、私が不安と恐怖で胸をどきどきさせながら、その後について行くと、林の奥に製材所から来たばかりの板が積んであつて、将校はその前まで行つて立ちどまり、くると私のほうに向き直つて、

「毎日、つらいでしょう。きようは一つ、この材木の見張番をしていて下さい」

と白い歯を出して笑つた。

「ここに、立っているのですか？」

「ここは、涼しくて静かだから、この板の上でお昼寝でもして
て下さい。もし、退屈だったら、これは、お読みかも知れないけ
ど」

と言つて、上衣のポケットから小さい文庫本を取り出し、てれ
たように、板の上にほうり、

「こんなものでも、読んでいて下さい」

文庫本には、「トロイカ」と記されていた。

私はその文庫本を取り上げ、

「ありがとうございます。うちにも、本のすきなのがいまして、
いま、南方に行つていますけど」

と申し上げたら、聞き違いしたらしく、

「ああ、そう。あなたの御主人なのです。南方じゃあ、たいへんだ」

と首を振ってしんみり言い、

「とにかく、きようはここで見張番という事にして、あなたのお弁当は、あとで自分が持つて来てあげますから、ゆっくり、休んでいらつしやい」

と言ひ捨て、急ぎ足で帰つて行かれた。

私は、材木に腰かけて、文庫本を読み、半分ほど読んだ頃ころ、あの将校が、こつこつと靴の音をさせてやって来て、

「お弁当を持つて来ました。おひとりで、つまらないでしょう」と言つて、お弁当を草原の上に置いて、また大急ぎで引返して

行かれた。

私は、お弁当をすましてから、こんどは、材木の上に這はい上つて、横になって本を読み、全部読み終えてから、うとうととお昼寝をはじめた。

眼がさめたのは、午後の三時すぎだった。私は、ふとあの若い将校を、前にどこかで見かけた事があるような気がして来て、考えてみたが、思い出せなかった。材木から降りて、髪を撫なでつけていたら、また、こつこつと靴の音が聞えて来て、

「やあ、きょうは御苦労さまでした。もう、お帰りになつてよろしい」

私は将校のほうに走り寄つて、そうして文庫本を差し出し、お

礼を言おうと思つたが、言葉が出ず、黙つて将校の顔を見上げ、二人の眼が合つた時、私の眼からぼろぼろ涙が出た。すると、その将校の眼にも、きらりと涙が光つた。

そのまま黙つておわかれしたが、その若い将校は、それつきりいちども、私たちの働いているところに顔を見せず、私は、あの日に、たつた一日遊ぶ事が出来ただけで、それからは、やはり一日置きに立川の山で、苦しい作業をした。お母さまは、私のからだを、しきりに心配して下さいましたが、私はかえつて丈夫になり、いまではヨイトマケ商売にもひそかに自信を持っているし、また、畑仕事にも、べつに苦痛を感じない女になつた。

戦争の事は、語るのも聞くのもいや、などと言いながら、つい

自分の「貴重な経験談」など語ってしまったが、しかし、私の戦争の追憶の中で、少しでも語りたと思うのは、ざっとこれくらいのもので、あとはもう、いつかのあの詩のように、

　　去年は、何も無かった。

　　一昨年は、何も無かった。

　　その前のとしても、何も無かった。

　　とでも言いたいくらいで、ただ、ばかばかしく、わが身に残っているものは、この地下足袋いっそく、というはかなさである。

　　地下足袋の事から、ついむだ話をはじめて脱線しちゃったけれど、私は、この、戦争の唯一の記念品とでもいうべき地下足袋を
はいて、毎日のように畑に出て、胸の奥のひそかな不安やしょうそ焦

躁^うをまぎらしているのだけれども、お母さまは、この頃、自立
つて日に日にお弱りになっていらっしやるように見える。

蛇の卵。

火事。

あの頃から、どうもお母さまは、めっきり御病人くさくおなり
になった。そうして私のほうでは、その反対に、だんだん粗野な
下品な女になつて行くような気もする。なんだかどうも私が、お
母さまからどんどん生気を吸いとつて太つて行くような心地がし
てならない。

火事の時だつて、お母さまは、燃やすための薪だもの、と御冗
談を言つて、それつきり火事のことにつに就いては一言もおつしやら

ず、かえって私をいたわるようにしていらしたが、しかし、内心お母さまの受けられたショックは、私の十倍も強かったのに違いない。あの火事があつてから、お母さまは、夜中に時たま呻うめかれる事があるし、また、風の強い夜などは、お手洗いにおいでになる振りをして、深夜いくどもお床から脱けて家中をお見廻みまわりになるのである。そうしてお顔色はいつも冴さえず、お歩きになるのさえやつとのように見える日もある。畑も手伝いたいと、前はおつしやっていたが、いちど私が、およしなさいと申し上げたのに、井戸から大きい手桶ておけで畑に水を五、六ぱいお運びになり、翌日、いきの出来ないくらいに肩がこる、とおつしやつて一日、寝たきりで、そんな事があつてからは流石さすがに畑仕事はあきらめた御様子

で、時たま畑へ出て来られても、私の働き振りを、ただ、じつと見ていらつしやるだけである。

「夏の花が好きなのは、夏に死ぬって言うけれども、本当かしら」

きょうもお母さまは、私の畑仕事をじつと見ていらして、ふいとそんな事をおつしやった。私は黙っておナスに水をやっていた。ああ、そういえば、もう初夏だ。

「私は、ねむの花が好きなんだけれども、ここのお庭には、一本も無いのね」

と、お母さまは、また、しずかにおつしやる。

「きょうちくとう爽竹桃がたくさんあるじゃないの」

私は、わざと、つつけんどんな口調で言った。

「あれは、きらいなの。夏の花は、たいていすきだけど、あれは、おきやんすぎて」

「私なら薔薇ばらがいいな。だけど、あれは四季咲きだから、薔薇の好きなひとは、春に死んで、夏に死んで、秋に死んで、冬に死んで、四度も死に直さなければいけないの？」

二人、笑った。

「すこし、休まない？」

とお母さまは、なおお笑いになりながら、

「きようは、ちよつとかず子さんと相談したい事があるの」

「なあに？ 死ぬお話なんかは、まっぴらよ」

私はお母さまの後について行つて、藤ふじ棚だなの下のベンチに並んで腰をおろした。藤の花はもう終つて、やわらかな午後の日ざしが、その葉をとおして私たちの膝ひざの上に落ち、私たちの膝をみどりいろに染めた。

「前から聞いていただきだきと思つていた事ですけどね、お互いに気分のいい時に話そうと思つて、きようまで機会を待つていたの。どうせ、いい話じゃあ無いのよ。でも、きようは何だか私もすらすら話せるような気がするもんだから、まあ、あなたも、我慢しておしまひまで聞いて下さいね。実はね、直治なわじは、生きています」

私は、からだを固くした。

「五、六日前に、和田の叔父さまからおたよりがあつてね、叔父さまの会社に以前つとめていらしたお方で、さいきん南方から帰還して、叔父さまのところに挨拶あいさつにいらして、その時、よもやまの話の末に、そのお方が偶然にも直治と同じ部隊で、そうして直治は無事で、もうすぐ帰還するだろうという事がわかつたの。でも、ね、一ついやな事があるの。そのお方の話では、直治はかなりひどい阿片アヘン中毒になつてゐるらしい、と……」

「また！」

私はにがいものを食べたみたいに、口をゆがめた。直治は、高等学校の頃に、或る小説家の真似まねをして、麻薬中毒にかかり、そのために、薬屋からおそろしい金額の借りを作つて、お母さまは、

その借りを薬屋に全部支払うのに二年もかかったのである。

「そう。また、はじめたらしいの。けれども、そのなおらない
うちは、帰還もゆるされないだろうから、きつとなおして来るだ
ろうと、そのお方も言っていたそうです。叔父さまのお手紙
では、なおして帰って来たとしても、そんな心掛けの者では、す
ぐどこかへ勤めさせるといふわけにはいかぬ、いまのこの混乱の
東京で働いては、まともの人間でさえ少し狂ったような気分にな
る、中毒のなおったばかりの半病人なら、すぐ発狂気味になって、
何を仕出かすか、わかったものでない、それで、直治が帰って来
たら、すぐこの伊豆の山荘に引取って、どこへも出さずに、当分
ここで静養させたほうがよい、それが一つ。それから、ねえ、か

ず子、叔父さまがねえ、もう一つお言いつけになつてゐるのだよ。叔父さまのお話では、もう私たちのお金が、なんにも無くなつてしまつたんだつて。貯金の封鎖だの、財産税だの、もう叔父さまも、これまでのように私たちにお金を送つてよこす事がめんどうになつたのだそうです。それでね、直治が歸つて来て、お母さまと、直治と、かず子と三人あそんで暮しては、叔父さまもその生活費を都合なざるのにたいへんな苦勞をしなければならぬから、いまのうちに、かず子のお嫁入りさきを捜すか、または、御奉公のお家を捜すか、どちらかになさい、という、まあ、お言いつけなの」

「御奉公つて、女中の事？」

「いいえ、叔父さまがね、ほら、あの、駒場の^{こまば}」

と或る宮様のお名前を挙げて、

「あの宮様なら、私たちとも血縁つづきだし、姫宮の家庭教師をかねて、御奉公にあがっても、かず子が、そんなに淋^{さび}しく窮屈な思いをせずにするだろう、とおっしゃっているのです」

「他に、つとめ口が無いものかしら」

「他の職業は、かず子には、とても無理だろう、とおっしゃって
いました」

「なぜ無理なの？　ね、なぜ無理なの？」

お母さまは、淋しそうに微笑^{ほほえ}んでいらっしやるだけで、何とも

お答えにならなかつた。

「いやだわ！ 私、そんな話」

自分でも、あらぬ事を口走った、と思った。が、とまらなかつた。

「私が、こんな地下足袋を、こんな地下足袋を」

と言ったら、涙が出て来て、思わずわつと泣き出した。顔を挙げて、涙を手の甲で払いのけながら、お母さまに向つて、いけない、いけない、と思いつぎと続いて出た。肉体とまるで無関係に、つぎつぎと続いて出た。

「いつだか、おつしやつたじゃないの。かず子がいるから、かず子がいてくれるから、お母さまは伊豆へ行くのですよ、とおつしやつたじゃないの。かず子がいないと、死んでしまおうとおつしや

ったじゃないの。だから、それだから、かず子は、どこへも行かずに、お母さまのお傍そばにいて、こうして地下足袋をはいて、お母さまに美味しいお野菜をあげたいと、そればかり考えているのに、直治が帰って来るとお聞きになったら、急に私を邪魔にして、宮様の女中に行けなんて、あんまりだわ、あんまりだわ」

自分でも、ひどい事を口走ると思いながら、言葉が別の生き物のように、どうしてもとまらないのだ。

「貧乏になって、お金が無くなったら、私たちの着物を売ったらいいじゃないの。このお家も、売ってしまったら、いいじゃないの。私には、何だって出来るわよ。この村の役場の女事務員にだつて何にだつてなれるわよ。役場で使つて下さらなかつたら、ヨ

イトマケにだつてなれるわよ。貧乏なんて、なんでもない。お母さまさえ、私を可愛かわいがつて下さったら、私は一生お母さまのお傍にしようとはばかり考えていたのに、お母さまは、私よりも直治のほうが可愛いのね。出て行くわ。私は出て行く。どうせ私は、直治とは昔から性格が合わないのだから、三人一緒に暮していたら、お互いに不幸よ。私はこれまで永いことお母さまと二人きりで暮したのだから、もう思い残すことは無い。これから直治がお母さまとお二人で水いららずで暮して、そうして直治がたとたと親孝行をするといい。私はもう、いやになった。これまでの生活が、いやになった。出て行きます。きょうこれから、すぐに出て行きます。私には、行くところがあるの」

私は立つた。

「かず子！」

お母さまはきびしく言い、そうしてかつて私に見せた事の無かつたほど、威厳に満ちたお顔つきで、すつとお立ちになり、私と向い合つて、そうして私よりも少しお背が高いくらいに見えた。

私は、ごめんなさい、とすぐに言いたいと思つたが、それが口にどうしても出ないで、かえつて別の言葉が出てしまった。

「だましたのよ。お母さまは、私をおだましになつたのよ。直治が来るまで、私を利用していらつしやつたのよ。私は、お母さまの女中さん。用がすんだから、こんどは宮様のところに行けつて」
わつと声が出て、私は立つたまま、思いきり泣いた。

「お前は、馬鹿ばかだねえ」

と低くおつしやつたお母さまのお声は、怒りに震えていた。

私は顔を挙げ、

「そうよ、馬鹿よ。馬鹿だから、だまされるのよ。馬鹿だから、邪魔にされるのよ。いないほうがいいのでしょうか？ 貧乏つて、どんな事？ お金つて、なんの事？ 私には、わからないわ。愛情を、お母さまの愛情を、それだけを私は信じて生きて来たのです」

とまた、ばかな、あらぬ事を口走つた。

お母さまは、ふつとお顔をそむけた。泣いておられるのだ。私は、ごめんなさい、と言ひ、お母さまに抱きつきたいと思つたが、

畑仕事で手がよごれているのが、かすかに気になり、へんに白々しくなつて、

「私さえ、いなかつたらいいのでしよう？　出て行きます。私には、行くところがあるの」

と言ひ捨て、そのまま小走りに走つて、お風呂場に行き、泣きじやくりながら、顔と手足を洗い、それからお部屋へ行つて、洋服に着換えているうちに、またわつと大きい声が出て泣き崩れ、思ひのたけもつともつと泣いてみたくなつて二階の洋間に駈かけ上り、ベッドにからだを投げて、毛布を頭からかぶり、瘦やせるほどひどく泣いて、そのうちに気が遠くなるみたいになつて、だんだん、或るひとが恋いしくて、恋いしくて、お顔を見て、お声を聞

きたくてたまらなくなり、両足の裏に熱いお灸きゆうを据え、じつとこらえているような、特殊な気持になつて行つた。

夕方ちかく、お母さまは、しずかに二階の洋間にはいつていらして、パチと電燈に灯ひをいれて、それから、ベッドのほうに近寄つて来られ、

「かず子」

と、とてもお優しくお呼びになつた。

「はい」

私は起きて、ベッドの上に坐すわり、両手で髪を搔かきあげ、お母さまのお顔を見て、ふふと笑つた。

お母さまも、幽かすかにお笑いになり、それから、お窓の下のソフ

アに、深くからだを沈め、

「私は、生れてはじめて、和田の叔父さまのお言いつけに、そむいた。……お母さまはね、いま、叔父さまに御返事のお手紙を書いたの。私の子供たちの事は、私におまかせ下さい、と書いたの。かず子、着物を売りましょうよ。二人の着物をどんどん売って、思い切りむだ使いして、ぜいたくな暮しをしましょうよ。私ともう、あなたに、畑仕事などさせたくない。高いお野菜を買ったつて、いいじゃないの。あんなに毎日の畑仕事は、あなたには無理です」

実は私も、毎日の畑仕事が、少しづつらくなりかけていたのだ。さつきあんなに、狂ったみたいに泣き騒いだのも、畑仕事の疲れ

と、悲しみがごつちやになって、何もかも、うらめしく、いやになつたからなのだ。

私はベッドの上で、うつむいて、黙っていた。

「かず子」

「はい」

「行くところがある、というのは、どこ？」

私は自分が、首すじまで赤くなつたのを意識した。

「細田さま？」

私は黙っていた。

お母さまは、深い溜息ためいきをおつきになり、

「昔の事を言ってもいい？」

「どうぞ」

と私は小声で言った。

「あなたが、山木さまのお家から出て、西片町のお家へ帰って来た時、お母さまは何もあなたをとがめるような事は言わなかったつもりだけど、でも、たった一ことだけ、（お母さまはあなたに裏切られました）って言ったわね。おぼえている？ そしたら、あなたは泣き出しちゃって、……私も裏切ったなんてひどい言葉を使ってわるかったと思っただけど、……」

けれども、私はあの時、お母さまにそう言われて、何だか有難くて、うれし泣きに泣いたのだ。

「お母さまがね、あの時、裏切られたって言ったのは、あなたが

山木さまのお家を出て来た事じゃなかったの。山木さまから、かず子は実は、細田と恋仲だったのです、と言われた時なの。そう言われた時には、本当に、私は顔色が変わる思いでした。だって、細田さまには、あのずっと前から、奥さまもお子さまもあって、どんなにこちらがお慕いしたって、どうにもならぬ事だし、……」

「恋仲だなんて、ひどい事を。山木さまのほうで、ただそう邪推なさっていただけなのよ」

「そうかしら。あなたは、まさか、あの細田さまを、まだ思いつづけているのじゃないでしょうね。行くところって、どこ？」

「細田さまのところなんかじゃないわ」

「そう？ そんなら、どこ？」

「お母さま、私ね、こないだ考えた事だけれども、人間が他の動物と、まるつきり違っている点は、何だろう、言葉も智慧ちえも、思考も、社会の秩序も、それぞれ程度の差はあっても、他の動物だつて皆持つているでしょう？ 信仰も持つているかも知れないわ。人間は、万物の霊長だなんて威張つているけど、ちつとも他の動物と本質的なちがいが無いみたいでしょう？ ところがね、お母さま、たった一つあつたの。おわかりにならないでしょう。他の生き物には絶対に無くて、人間にだけあるもの。それはね、ひめぐと、というものよ。いかが？」

お母さまは、ほんのりお顔を赤くなさつて、美しくお笑いになり、

「ああ、そのかず子のひめごとが、よい実を結んでくれたらいいけどねえ。お母さまは、毎朝、お父さまにかず子を幸福にして下さるようにお祈りしているのですよ」

私の胸にふうつと、お父上と那須野をドライブして、そうして途中で降りて、その時の秋の野のけしきが浮んで来た。萩、なでしこ、りんどう、女郎花などの秋の草花が咲いていた。野葡萄の実は、まだ青かった。

それから、お父上と琵琶湖でモーターボートに乗り、私が水に飛び込み、藻に棲む小魚が私の脚にあたり、湖の底に、私の脚の影がくつきりと写っていて、そうしてうごいている、そのさまが前後と何の聯関も無く、ふっと胸に浮んで、消えた。

私はベッドから滑り降りて、お母さまのお膝に抱きつき、はじめて、

「お母さま、さつきはごめんなさい」

と言う事が出来た。

思うと、その日あたりが、私たちの幸福の最後の残り火の光が輝いた頃で、それから、直治が南方から帰って来て、私たちの本当の地獄がはじまった。

三

どうしても、もう、とても、生きておられないような心細さ。

これが、あの、不安、とかいう感情なのであろうか、胸に苦しい浪が打ち寄せ、それはちようど、夕立がすんだのちの空を、あわただしく白雲がつぎつぎと走って走り過ぎて行くように、私の心臓をしめつけたり、ゆるめたり、私の脈は結滞して、呼吸が稀薄になり、眼のさきがもやもやと暗くなって、全身の力が、手の指の先からふつと抜けてしまう心地がして、編物をつづけてゆく事が出来なくなつた。

このごろは雨が陰気に降りつづいて、何をするにも、もの憂く、きようはお座敷の縁側に籐椅子を持ち出し、ことしの春にいちど編みかけてそのままにしていたセエタを、また編みつづけてみる気になつたのである。淡い牡丹色のぼやけたような毛糸で、

私はそれに、コバルトブルウの糸を足して、セエタにするつもりなのだ。そうして、この淡い牡丹色の毛糸は、いまからもう二十年の前、私がまだ初等科にかよっていた頃、お母さまがこれで私の頸巻くびまきを編んで下さった毛糸だった。その頸巻の端が頭巾ずきんになつていて、私はそれをかぶつて鏡を覗のぞいてみたら、小鬼のようであつた。それに、色が、他の学友の頸巻の色と、まるで違つているので、私は、いやでいやで仕様が無かつた。関西の多額納税の学友が、「いい頸巻してはるな」と、おとなびた口調でほめて下さつたが、私は、いよいよ恥はずかしくなつて、もうそれからは、いちどもこの頸巻をした事が無く、永い事うち棄すててあつたのだ。それを、ことしの春、死蔵品の復活とやらいう意味で、ときほぐ

して私のセエタにしようと思つてとりかかつてみたのだが、どうも、このぼやけたような色合いが気に入らず、また打ちすて、きようはあまりに所在ないまま、ふと取り出して、のろのろと編みつづけてみたのだ。けれども、編んでいるうちに、私は、この淡い牡丹色の毛糸と、灰色の雨空と、一つに溶け合つて、なんとも言えないくらい柔かくてマイルドな色調を作り出している事に気がついた。私は知らなかつたのだ。コスチウムは、空の色との調和を考えなければならぬものだという大事なことを知らなかつたのだ。調和つて、なんて美しくて素晴らしい事なんだろうと、いささか驚き、ぼうぜん 呆然とした形だつた。灰色の雨空と、淡い牡丹色の毛糸と、その二つを組合せると両方が同時にいきいきして来るか

ら不思議である。手に持っている毛糸が急にほつきり暖かく、つめたい雨空もビロウドみたいに柔かく感ぜられる。そうして、モネーの霧の中の寺院の絵を思い出させる。私はこの毛糸の色に依よつて、はじめて「グウ」というものを知らされたような気がした。よいこのみ。そうしてお母さまは、冬の雪空に、この淡い牡丹色が、どんなに美しく調和するかちゃんと識しつていらしてわざわざ選んで下さったのに、私は馬鹿でいやがって、けれども、それを子供の私に強制しようともなさらず、私のすきなようにさせて置かれたお母さま。私がこの色の美しさを、本当にわかるまで、二十年間も、この色に就ついて一言も説明なさらず、黙って、そしらぬ振りをして待っていらしたお母さま。しみじみ、いいお母さま

だと思ふと同時に、こんないいお母さまを、私と直治と二人でいじめて、困らせ弱らせ、いまに死なせてしまうのではなからうかと、ふうつとたまらない恐怖と心配の雲が胸に湧いて、あれこれ思いをめぐらせばめぐらすほど、前途にとてもおそろしい、悪い事ばかり予想せられ、もう、とても、生きておられないくらいに不安になり、指先の力も抜けて、編棒を膝に置き、大きい溜息をついて、顔を仰向け眼をつぶって、

「お母さま」

と思わず言つた。

お母さまは、お座敷の隅すみの机によりかかつて、ご本を讀んでいらしたのだが、

「はい？」

と、不審そうに返事をなされた。

私は、まごつき、それから、ことさらに大声で、

「とうとう薔薇ばらが咲きました。お母さま、ご存じだった？ 私は、いま気がついた。とうとう咲いたわ」

お座敷のお縁側のすぐ前の薔薇。それは、和田の叔父さまが、むかし、フランスだかイギリスだか、ちよつと忘れたけれど、とにかく遠いところからお持帰りになった薔薇で、二、三箇月前に、叔父さまが、この山荘の庭に移し植えて下さった薔薇である。けさそれが、やつと一つ咲いたのを、私はちゃんと知っていたのだけれども、てれ隠しに、たったいま気づいたみたいに大げさに騒

いで見せたのである。花は、濃い紫色で、りんとした傲りおごりと強さがあった。

「知っていました」

とお母さまはしずかにおっしゃって、

「あなたには、そんな事が、とても重大らしいのね」

「そうかも知れないわ。可哀かわいそう？」

「いいえ、あなたには、そういうところがあるって言っただけなの。お勝手のマッチ箱にルナルの絵を貼はつたり、お人形のハンカチーフを作ってみたり、そういう事が好きなのね。それに、お庭の薔薇のことだって、あなたの言うことを聞いていると、生きている人の事を言っているみたい」

「子供が無いからよ」

自分でも全く思いがけなかった言葉が、口から出た。言つてしまつて、はつとして、まの悪い思いで膝の編物をいじつていたら、

——二十九だからなあ。

そうおつしやる男の人の声が、電話で聞くようなくすぐつたいバスで、はつきり聞えたような気がして、私は恥ほおずかしさで、頬が焼けるみたいに熱くなつた。

お母さまは、何もおつしやらず、また、ご本をお読みになる。

お母さまは、こないだからガーゼのマスクをおかけになつていらして、そのせいか、このごろめつきり無口になつた。そのマスクは、直治の言いつけに従つて、おかけになつているのである。直

治は、十日ほど前に、南方の島から蒼黒あおぐろい顔になって還かえつて来たのだ。

何の前触れも無く、夏の夕暮、裏の木戸から庭へはいつて来て、「わあ、ひでえ。趣味のわるい家だ。来々軒らいらいけん。シユウマイあります、と貼りふだしろよ」

それが私とはじめて顔を合せた時の、直治の挨拶あいさつであつた。

その二、三日前からお母さまは、舌を病んで寝ていらした。舌の先が、外見はなんの変りも無いのに、うごかすと痛くてならぬとおっしゃって、お食事も、うすいおかゆだけで、お医者さまに見ていただいたら？　と言つても、首を振つて、

「笑われます」

と苦笑いしながら、おっしやる。ルゴールを塗ってあげたけれども、少しもききめが無いようで、私は妙にいらいらしていた。

そこへ、直治が帰還して来たのだ。

直治はお母さまの枕まくらもと元に坐つて、ただいま、と言つてお辞

儀をし、すぐに立ち上つて、小さい家の中をあちこちと見て廻り、私がその後について歩いて、

「どう？ お母さまは、変つた？」

「変つた、変つた。やつれてしまった。早く死にやいいんだ。こんな世の中に、ママなんて、とても生きて行けやしねえんだ。あまりみじめで、見ちやおれねえ」

「私は？」

「げびて来た。男が二三人もあるような顔をしていやがる。酒は？　今夜は飲むぜ」

私はこの部落でたった一軒の宿屋へ行つて、おかみさんのお咲さんに、弟が帰還したから、お酒を少しわけて下さい、とたのんでみたけれども、お咲さんは、お酒はあいにく、いま切らしていません、というので、帰つて直治にそう伝えたら、直治は、見た事も無い他人のような表情の顔になつて、ちえつ、交渉が下手だからそんなんだ、と言ひ、私から宿屋の在る場所を聞いて、庭下駄にわげたをつつかけて外に飛び出し、それつきり、いくら待つても家へ帰つて来なかつた。私は直治の好きだつた焼き林檎りんごと、それから、卵のお料理などこしらえて、食堂の電球も明るいのと取りかえ、

ずいぶん待って、そのうちに、お咲さんが、お勝手口からひよいと顔を出し、

「もし、もし。大丈夫でしょうか。焼酎しょうちゆうを召し上っているのですけど」

と、れいの鯉こいの眼のようなまんまるい眼を、さらに強く見はつて、一大事のように、低い声で言うのである。

「焼酎しょうちゆうって。あの、メチル？」

「いいえ、メチルじゃありませんけど」

「飲んで、病気になるのでしょう？」

「ええ、でも、……」

「飲ませてやって下さい」

お咲さんは、つばきを飲み込むようにしてうなずいて帰って行った。

私はお母さまのところに行つて、

「お咲さんのところで、飲んでいゝんですつて」

と申し上げたら、お母さまは、少しお口を曲げてお笑いになつて、

「そう。阿片アヘンのほうは、よしたのかしら。あなたは、ごはんをすませなさい。それから今夜は、三人でこの部屋におやすみ。直治のお蒲団ふとんを、まんなかにして」

私は泣きたいような気持になつた。

夜ふけて、直治は、荒い足音をさせて帰つて来た。私たちは、

お座敷に三人、一つの蚊帳かやにはいつて寝た。

「南方のお話を、お母さまに聞かせてあげたら？」

と私が寝ながら言うと、

「何も無い。何も無い。忘れてしまった。日本に着いて汽車に乗って、汽車の窓から、水田が、すばらしく綺麗きれいに見えた。それだけだ。電気を消せよ。眠られやしねえ」

私は電燈を消した。夏の月光が洪水こうずいのように蚊帳の中に満ちあふれた。

あくる朝、直治は寢床はらばに腹這ながいになって、煙草を吸いながら、遠く海のほうを眺ながめて、

「舌が痛いんですって？」

と、はじめてお母さまのお加減の悪いのに気がついたみたいなふうの口のきき方をした。

お母さまは、ただ幽かすかにお笑いになった。

「そいつあ、きつと、心理的なものなんだ。夜、口をあいておやすみになるんでしよう。だらしがない。マスクをなさい。ガーゼにリバノール液でもひたして、それをマスクの中に入れて置くといい」

私はそれを聞いて嘔き出し、

「それは、何療法っていうの？」

「美学療法っていうんだ」

「でも、お母さまは、マスクなんか、きつとおきらいよ」

お母さまは、マスクに限らず、眼帯でも、眼鏡でも、お顔にそんなものを附ける事は大きらいだった筈はずである。

「ねえ、お母さま。マスクをなさる？」

と私がおたずねしたら、

「致します」

とまじめに低くお答えになったので、私は、はつとした。直治の言う事なら、なんでも信じて従おうと思っていらっしゃるらしい。

私が朝食の後に、さつき直治が言ったとおりに、ガーゼにリバノール液をひたしなどして、マスクを作り、お母さまのところを持つて行ったら、お母さまは、黙って受け取り、おやすみになっ

たまままで、マスクの紐ひもを両方のお耳に素直におかけになり、そのさまが、本当にもう幼い童女のように、私には悲しく思われた。

お昼すぎに、直治は、東京のお友達や、文学のほうの師匠さんなどに逢わなければならぬと言つて背広に着換え、お母さまから、二千円もらつて東京へ出かけて行つてしまった。それつきり、もう十日ちかくなるのだけれども、直治は、帰つて来ないのだ。そうして、お母さまは、毎日マスクをなさつて、直治を待つていらつしやる。

「リバノールつて、いい薬なのね。このマスクをかけていると、舌の痛みが消えてしまうのですよ」

と、笑いながらおつしやつたけれども、私には、お母さまが嘘うそ

をついていらつしやるように思われてならないのだ。もう大丈夫、とおつしやつて、いまは起きていらつしやるけれども、食しよくよく慾よくよくはやつぱりあまり無い御様子だし、口数もめつきり少く、とても私は気がかりで、直治はまあ、東京で何をしているのだろう、あの小説家の上原さんなんかと一緒に東京中を遊びまわつて、東京の狂気の渦うずに巻き込まれているのにちがいない、と思えば思うほど、苦しくつらくなり、お母さまに、だしぬけに薔薇の事など報告して、そうして、子供が無いからよ、なんて自分にも思いがけなかったへんな事を口走つて、いよいよ、いけなくなるばかりで、

「あ」

と言つて立ち上り、さて、どこへも行くところが無く、身一つ

をもてあまして、ふらふら階段をのぼって行って、二階の洋間にはいつてみた。

ここは、こんど直治の部屋になる筈で、四、五日前に私が、お母さまと相談して、下の農家の中井さんにお手伝いをたのみ、直治の洋服箆筒だんすや机や本箱、また、蔵書やノートブックなど一ぱいつまった木の箱五つ六つ、とにかく昔、西片町のお家の直治のお部屋にあったものの全部を、ここに持ち運び、いまに直治が東京から帰って来たら、直治の好きな位置に、箆筒本箱などそれぞれ据すえる事にして、それまではただ雑然とここに置き放しにしていたほうがよさそうに思われたので、もう、足の踏み場も無いくらいに、部屋一ぱい散らかしたままで、私は、何気なく足もとの木の

箱から、直治のノートブックを一冊取りあげて見たら、そのノートブックの表紙には、

夕顔日誌

と書きしるされ、その中には、次のような事が一ぱい書き散らされていたのである。直治が、あの、麻薬中毒で苦しんでいた頃の手記のようであった。

焼け死ぬる思い。苦しくとも、苦しと一言、半句、叫び得ぬ、

古来、未曾有^{みぞう}、人の世はじまつて以来、前例も無き、底知れぬ地獄の気配を、ごまかしなさんな。

思想？ ウソだ。主義？ ウソだ。理想？ ウソだ。秩序？

ウソだ。誠実？ 真理？ 純粹？ みなウソだ。牛島の藤は、樹齡千年、熊野^{ゆや}の藤は、数百年と称^とえられ、その花穂の如きも、前者で最長九尺、後者で五尺余と聞いて、ただその花穂にのみ、心がおどる。

アレモ人ノ子。生キテイル。

論理は、所謂^{しよせん}、論理への愛である。生きている人間への愛では無い。

金と女。論理は、はにかみ、そそくさと歩み去る。

歴史、哲学、教育、宗教、法律、政治、経済、社会、そんな学問なんかより、ひとりの処女の微笑が尊いというフアウスト博士の勇敢なる実証。

学問とは、虚栄の別名である。人間が人間でなくなろうとする努力である。

ゲエテにだつて誓つて言える。僕は、どんなにでも巧く書けまうます。一いっぺん篇の構成あやまたず、適度の滑稽こっけい、読者の眼のうらを焼く悲哀、若もしくは、肅然、所いわゆるえり謂襟を正さしめ、完かんぺき璧のお小説、朗々音読すれば、これすなわち、スクリンの説明か、はずかしくつて、書けるかつていうんだ。どだいそんな、傑作意識が、

ケチくさいというんだ。小説を読んで襟を正すなんて、狂人の所作よさである。そんなら、いつそ、羽織袴はおはかまでせにやなるまい。よい作品ほど、取り澄ましていないように見えるのだがなあ。僕は友人の心からたのしそうな笑顔を見たいばかりに、一篇の小説、わざとしくじって、下手くそに書いて、尻餅しりもちついて頭かきかき逃げて行く。ああ、その時の、友人のうれしそうな顔ったら！

文いたらず、人いたらぬ風情ふぜい、おもちゃのラツパを吹いてお聞かせ申し、ここに日本一の馬鹿がいます、あなたはまだいいほうですよ、健在なれ！ と願う愛情は、これはいったい何でしょう。友人、したり顔にて、あれがあいつの悪い癖、惜しいものだ、と御述懐。愛されている事を、ご存じ無い。

不良でない人間があるだろうか。

味気ない思い。

金が欲しい。

さもなくば、

眠りながらの自然死！

薬屋に千円ちかき借金あり。きよう、質屋の番頭をこつそり家へ連れて来て、僕の部屋へとおして、何かこの部屋に目ぼしい質草ありや、あるなら持つて行け、火急に金が要る、と申せしに、番頭ろくに部屋の中を見もせず、およしなさい、あなたのお道具でもないのに、とぬかした。よろしい、それならば、僕がいまま

で、僕のお小遣い銭で買った品物だけ持つて行け、と威勢よく言
つて、かき集めたガラクタ、質草の資格あるしろもの一つも無し。

まず、片手の石膏像。せつこうぞうこれは、ヴィナスの右手。ダリヤの花

にも似た片手、まっしろい片手、それがただ台上に載っているの
だ。けれども、これをよく見ると、これはヴィナスが、その全裸
を、男に見られて、あなやの驚き、がんしゅうせんふう含羞旋風、裸身むざん、

薄くれない、残りくまなき、かツかツのほてり、からだをよじつ
てこの手つき、そのようなヴィナスの息もとまるほどの裸身のは
じらいが、指先に指紋も無く、てのひら掌に一本の手筋もない純白のこの
きやしやな右手に依よつて、こちらの胸も苦しくなるくらいに哀れ
に表情せられているのが、わかる筈だ。けれども、これは、所謂、

非実用のガラクタ。番頭、五十銭と値踏みせり。

その他、パリ近郊の大地図、直径一尺にちかきセルロイドの独^こ楽^ま、糸よりも細く字の書ける特製のペン先、いずれも掘出物のつもりで買った品物ばかりなのだが、番頭笑つて、もうおいとま致します、と言う。待て、と制止して、結局また、本を山ほど番頭に背負わせて、金五円也を受け取る。僕の本^{ほん}棚の本は、ほとんど廉価^{れんか}の文庫本のみにして、しかも古本屋から仕入れしものなるに依つて、質の値もおのずから、このように安いのである。

千円の借金を解決せんとして、五円也。世の中に於^おける、僕の実力、おおよそかくの如し。笑いごとではない。

デカダン？　しかし、こうでもしなけりや生きておれないんだよ。そんな事を言つて、僕を非難する人よりは、死ね！　と言つてくれる人のほうがありがたい。さつぱりする。けれども人は、めつたに、死ね！　とは言わないものだ。ケチくさく、用心深い偽善者どもよ。

正義？　所謂階級闘争の本質は、そんなところにありはせぬ。人道？　冗談じゃない。僕は知っているよ。自分たちの幸福のために、相手を倒す事だ。殺す事だ。死ね！　という宣告でなかったら、何だ。ごまかしちやいけねえ。

しかし、僕たちの階級にも、ろくな奴がない。白痴、幽霊、守銭奴しゆせんど、狂犬、ほら吹き、ゴザイマスル、雲の上から小便。

死ね！ という言葉を与えるのさえ、もつたいない。

戦争。日本の戦争は、ヤケクソだ。

ヤケクソに巻き込まれて死ぬのは、いや。いつそ、ひとりで死にたいわい。

人間は、嘘をつく時には、必ず、まじめな顔をしているものである。この頃の、指導者たちの、あの、まじめさ。ぷ！

人から尊敬されようと思わぬ人たちと遊びたい。

けれども、そんないい人たちは、僕と遊んでくれやしない。

僕が早熟を装って見せたら、人々は僕を、早熟だと噂うわさした。僕が、なまけものの振りをして見せたら、人々は僕を、なまけものだと噂した。僕が小説を書けない振りをしたら、人々は僕を、書けないのだと噂した。僕が嘘つきの振りをしたら、人々は僕を、嘘つきだと噂した。僕が金持ちの振りをしたら、人々は僕を、金持ちだと噂した。僕が冷淡を装って見せたら、人々は僕を、冷淡なやつだと噂した。けれども、僕が本当に苦しくて、思わず呻うめいた時、人々は僕を、苦しい振りを装っていると噂した。

どうも、くいちがう。

結局、自殺するよりほか仕様がないのじゃないか。

このように苦しんでも、ただ、自殺で終るだけなのだ、と思つたら、声を放つて泣いてしまった。

春の朝、二三輪の花の咲きほころびた梅の枝に朝日が当つて、その枝にハイデルベルヒの若い学生が、ほっそりと縊くびれて死んでいたという。

「ママ！ 僕を叱しかつて下さい！」

「どういぐあう工合あいに？」

「弱虫！ っつて」

「そう？　弱虫。……もう、いいでしょう？」

ママには無類のよさがある。ママを思うと、泣きたくなる。ママへおわびのためにも、死ぬんだ。

オユルシ下サイ。イマ、イチドダケ、オユルシ下サイ。

年々や

めしいのままに

鶴つるのひな

育ちゆくらし

あわれ　太るも

(が元旦たん試作)

モルヒネ アトロモール ナルコピン パントピン パビナア
ル パンオピン アトロピン

プライドとは何だ、プライドとは。

人間は、いや、男は、（おれはすぐれている）（おれにはいいところがあるんだ）などと思わずに、生きて行く事が出来ぬものか。

人をきらい、人にきらわれる。

ちえくらべ。

厳あほ肅うⅡ阿か呆ん感

とにかくね、生きているのだからね、インチキをやっているに
違いないのさ。

或る借錢申込みの手紙。

「御返事を。」

御返事を下さい。

そうして、それが必ず快報であるように。

僕はさまざまの屈辱を思い設けて、ひとりで呻いています。

芝居をしているわけではありません。絶対にそうではありません。

お願いいたします。

僕は恥ずかしさのために死にそうです。

誇張ではないのです。

毎日毎日、御返事を待って、夜も昼もがたがたふるえているのです。

僕に、砂を噛かませないで。

壁から忍び笑いの声が聞えて来て、深夜、床の中で輾てん転てんしているのです。

僕を恥ずかしい目に逢あわせないで。

姉さん！」

そこまで読んで私は、その夕顔日誌を閉じ、木の箱にかえして、それから窓のほうに歩いて行き、窓を一ぱいにひらいて、白い雨に煙っているお庭を見下しながら、あの頃の事を考えた。

もう、あれから、六年になる。直治の、この麻薬中毒が、私の離婚の原因になった、いいえ、そう言うてはいけない、私の離婚は、直治の麻薬中毒がなくなっても、べつな何かのきっかけで、いつかは行われてるように、そのように、私の生れた時から、さだまっていた事みたいな気もする。直治は、薬屋への支払いに困って、しばしば私にお金をねだった。私は山木へ嫁いだばかりで、お金などそんなに自由になるわけは無し、また、嫁ぎ先のお金を、

里の弟へこつそり融通してやるなど、たいへん工合いの悪い事のようにも思われたので、里から私に付き添つて来たばあやのお関さんと相談して、私の腕輪や、頸飾くびかざりや、ドレスを売った。弟は私に、お金を下さい、という手紙を寄こして、そうして、いまは苦しくて恥ずかしくて、姉上と顔を合せる事も、また電話で話する事さえ、とても出来ませんから、お金は、お関に言いつけて、京橋の×町×丁目のカヤノアパートに住んでいる、姉上も名前だけはご存じの筈の、小説家上原二郎さんのところにとどけさせるよう、上原さんは、悪徳のひとのように世の中から評判されているが、決してそんな人ではないから、安心してお金を上原さんのところへとどけてやって下さい、そうすると、上原さんがすぐに

僕に電話で知らせる事になっているのですから、必ずそのような
お願いします、僕はこんどの中毒を、ママにだけは気附かれたく
ないのです、ママの知らぬうちに、なんとかしてこの中毒をなお
してしまうつもりなのです、僕は、こんど姉上からお金をもらつ
たら、それでもって薬屋への借りを全部支払って、それから塩原
の別荘へでも行って、健康なからだになって帰って来るつもりな
のです、本当です、薬屋の借りを全部すましたら、もう僕は、そ
の日から麻薬を用いる事はぴつたりよすつもりです、神さまに誓
います、信じて下さい、ママには内緒に、お関をつかつてカヤノ
アパートの上原さんに、たのみます、というような事が、その手
紙に書かれていて、私はその指図さしずどおりに、お関さんにお金を持

たせて、こつそり上原さんのアパートにとどけさせたものだが、弟の手紙の誓いは、いつも嘘うそで、塩原の別荘にも行かず、薬品中毒はいよいよひどくなるばかりの様子で、お金をねだる手紙の文章も、悲鳴に近い苦しげな調子で、こんどこそ薬をやめると、顔をそむけたいくらいくらいの哀切な誓いをするので、また嘘かも知れぬと思ひながらも、ついまた、ブローチなどお関さんに売らせて、そのお金を上原さんのアパートにとどけさせるのだった。

「上原さんって、どんな方？」

「こがら小柄で顔色の悪い、ぶあいそな人でございます」

と、お関さんは答える。

「でも、アパートにいらつしやる事は、めつたにございませぬで

す。たいてい、奥さんと、六つ七つの女の子さんと、お二人がいらつしやるだけでございます。この奥さんは、そんなにお綺麗きれいでもございませぬけれども、お優しくて、よく出来たお方のようでございます。あの奥さんになら、安心してお金をあずける事が出来ます」

その頃の私は、いまの私に較くらべて、いいえ、較べものにも何もならぬくらい、まるで違った人みたいに、ぼんやりの、のんき者ではあったが、それでも流石さすがに、つぎつぎと続いてしかも次第に多額のお金をねだられて、たまらなく心配になり、一日、お能からの帰り、自動車を銀座でかえして、それからひとり歩いて京橋のカヤノアパートを訪ねた。

上原さんは、お部屋でひとり、新聞を読んでいらした。縞しまあわせの袴こんがすりに、紺こんがすりの羽織を召していらして、お年寄りのような、お若いような、いままで見た事もない奇獣のような、へんな第一印象を私は受取った。

「女房はいま、子供と、一緒に、配給物を取りに」
すこし鼻声で、とぎれとぎれにそうおっしゃる。私を、奥さんのお友達とも思いがちでしたらしかつた。私が、直治の姉だと言う事を申し上げたら、上原さんは、ふん、と笑った。私は、なぜだか、ひやりとした。

「出ましようか」

そう言つて、もう二重廻にじゆうまわしをひっかけ、下駄箱げたばこから新しい下

駄を取り出しておはきになり、さつさとアパートの廊下を先に立って歩かれた。

外は、初冬の夕暮。風が、つめたかった。隅^{すみだがわ}田川から吹いて来る川風のような感じであった。上原さんは、その川風にさからうように、すこし右肩をあげて築地のほうに黙って歩いて行かれる。私は小走りに走りながら、その後を追った。

東京劇場の裏手のビルの地下室にはいった。四、五組の客が、二十畳くらいの細長いお部屋で、それぞれ卓をはさんで、ひっそりお酒を飲んでいた。

上原さんは、コップでお酒をお飲みになった。そうして、私にも別なコップを取り寄せて下さって、お酒をすすめた。私は、そ

のコップで二杯飲んだけれども、なんともなかった。

上原さんは、お酒を飲み、煙草たばこを吸い、そうしていつまでも黙っていた。私も、黙っていた。私はこんなところへ来たのは、生まれてはじめての事であつたけれども、とても落ちつき、気分がよかつた。

「お酒でも飲むといいんだけど」

「え？」

「いいえ、弟さん。アルコールのほうに転換するといいいんですよ。僕も昔、麻薬中毒になつた事があつてね、あれは人が薄気味わることがつてね、アルコールだつて同じ様なものなんだが、アルコールのほうは、人は案外ゆるすんだ。弟さんを、酒飲みにしちやいま

しよう。いいでしょう？」

「私、いちど、お酒飲みを見た事がありますわ。新年に、私が出掛けようとした時、うちの運転手の知合いの者が、自動車の助手席で、鬼のような真赤な顔まっかをして、ぐうぐう大いびきで眠っていましたの。私がおどろいて叫んだら、運転手が、これはお酒飲みで、仕様が無いんです、と言つて、自動車からおろして肩にかついでどこかへ連れて行きましたの。骨が無いみたいにくったりして、何だかそれでも、ぶつぶつ言っていて、私あの時、はじめてお酒飲みつてもものを見たのですけど、面白かったわ」

「僕だって、酒飲みです」

「あら、だって、違うんでしょう？」

「あなただつて、酒飲みです」

「そんな事は、ありませんわ。私は、お酒飲みを見た事があるんですもの。まるで、違いますわ」

上原さんは、はじめて楽しそうにお笑いになつて、

「それでは、弟さんも、酒飲みにはなれないかも知れませんが、とにかく、酒を飲む人になつたほうがいい。帰りましょう。おそくなるよ、困るんでしよう？」

「いいえ、かまわないんですの」

「いや、実は、こつちが窮屈でいけねえんだ。ねえさん！ 会計！」

「うんと高いのでしょうか。少しなら、私、持っているんですけ

ど」

「そう。そんなら、会計は、あなただ」

「足りないかも知れせんわ」

私は、バッグの中を見て、お金がいくらあるかを上原さんに教えた。

「それだけあれば、もう二、三軒飲める。馬鹿にしてやがる」

上原さんは顔をしかめておっしゃって、それから笑った。

「どこかへ、また、飲みにおいでになりますか？」

と、おたずねしたら、まじめに首を振って、

「いや、もうたくさん。タキシードを拾ってあげますから、お帰
なさい」

私たちは、地下室の暗い階段をのぼって行つた。一步さききのぼって行く上原さんが、階段の中なかごろ頃で、くるりところら向きになり、素早く私にキスをした。私は唇を固く閉じたまま、それを受けた。

べつに何も、上原さんをすきでなかつたのに、それでも、その時から私に、あの「ひめごと」が出来てしまったのだ。かたかたかたと、上原さんは走って階段を上って行つて、私は不思議な透明な気分で、ゆっくり上つて、外へ出たら、川風が頬ほおにとても気持よかつた。

上原さんに、タキシードを拾っていただいて、私たちは黙つてわかれた。

車にゆられながら、私は世間が急に海のようにひろくなったよ
うな気持がした。

「私には、恋人があるの」

或る日、私は、夫からおこごとをいただいて淋しくなつて、ふ
つとそう言つた。

「知っています。細田でしょう？ どうしても、思い切る事が出
来ないのでですか？」

私は黙っていた。

その問題が、何か気まずい事の起る度たびごと毎に、私たち夫婦の間
に持ち出されるようになった。もうこれは、だめなんだ、と私は
思った。ドレスの生地きじを間違つて裁断した時みたいに、もうその

生地は縫い合わせる事も出来ず、全部捨てて、また別の新しい生地
の裁断にとりかからなければならぬ。

「まさか、その、おなかの子は」

と或る夜、夫に言われた時には、私はあまりおそろしくて、が
たがた震えた。いま思うと、私も夫も、若かったのだ。私は、恋
も知らなかった。愛、さえ、わからなかった。私は、細田さまの
おかきになる絵に夢中になって、あんなお方の奥さまになったら、
どんなに、まあ、美しい日常生活を営むことが出来るでしょう、
あんなよい趣味のお方と結婚するのでなければ、結婚なんて無意
味だわ、と私は誰にでも言いふらしていたので、そのために、み
んなに誤解されて、それでも私は、恋も愛もわからず、平気で細

田さまを好きだという事を公言し、取消そうともしなかったので、へんにもつれて、その頃、私のおなかで眠っていた小さい赤ちゃんまで、夫の疑惑の的になったりして、誰ひとり離婚などあらわに言い出したお方もいなかったのに、いつのまにやら周囲が白々しくなっていて、私は付き添いのお関さんと一緒に里のお母さまのところへ帰って、それから、赤ちゃんが死んで生れて、私は病気になって寝込んで、もう、山木との間は、それっきりになっ
てしまったのだ。

直治は、私が離婚になったという事に、何か責任みたいなものを感じたのか、僕は死ぬよ、と言って、わあわあ声を挙げて、顔が腐ってしまったくらいに泣いた。私は弟に、薬屋の借りがいくら

になつてゐるのかたずねてみたら、それはおそろしいほどの金額であつた。しかも、それは弟が実際の金額を言えなくて、嘘をついていたのがあとでわかつた。あとで判明した実際の総額は、その時に弟が私に教えた金額の約三倍ちかくあつたのである。

「私、上原さんに逢つたわ。いいお方ね。これから、上原さんと一緒にお酒を飲んで遊んだらどう？ お酒つて、とても安いものじゃないの。お酒のお金くらいだったら、私いつでもあなたにあげるわ。薬屋の払いの事も、心配しないで。どうか、なるわよ」

私が上原さんと逢つて、そうして上原さんをいいお方だと言つたのが、弟を何だかひどく喜ばせたようで、弟は、その夜、私からお金をもらつて早速、上原さんのところに遊びに行つた。

中毒は、それこそ、精神の病気なのかも知れない。私が上原さんをほめて、そうして弟から上原さんの著書を借りて読んで、偉いお方ねえ、などと言うと、弟は、姉さんなんかにはわかるもんか、と言つて、それでも、とてもうれしそうに、じゃあこれを読んでごらん、とまた別の上原さんの著書を私に読ませ、そのうちに私も上原さんの小説を本気に読むようになって、二人であれこれ上原さんの噂うわさなどして、弟は毎晩のように上原さんのところに大威張りで遊びに行き、だんだん上原さんの御計画どおりにアルコールのほうへ転換していったようであつた。薬屋の支払いに就いて、私がお母さまにこつそり相談したら、お母さまは、片手で顔を覆おおいなさつて、しばらくじつとしていらつしやつたが、や

がてお顔を挙げて淋しそうにお笑いになり、考えたって仕様が無いわね、何年かかるかわからないけど、毎月すこしずつでもかえして行きましようよ、とおっしゃった。

あれから、もう、六年になる。

夕顔。ああ、弟も苦しいのだろう。しかも、途がみちふさがって、何をどうすればいいのか、いまだに何もわかっていないのだろう。ただ、毎日、死ぬ気でお酒を飲んでいっているのだろう。

いっそ思い切つて、本職の不良になつてしまつたらどうだろう。そうすると、弟もかえつて楽になるのではあるまいか。

不良でない人間があるだろうか、とあのノートブックに書かれていたけれども、そう言われてみると、私だつて不良、叔父さま

も不良、お母さまだつて、不良みたいに思われて来る。不良とは、優しさの事ではないかしら。

四

お手紙、書こうか、どうしようか、ずいぶん迷っていました。けれども、けさ、鳩はとのごとく素直すなおに、蛇へびのごとく慧さとかれ、というイエスの言葉をふと思ひ出し、奇妙に元気が出て、お手紙を差し上げる事にしました。直治なおじの姉でございます。お忘れかしら。お忘れだつたら、思ひ出して下さい。

直治が、こないだまたお邪魔にあがつて、ずいぶんごやつかい

を、おかけしたようで、相すみません。(でも、本当は、直治の事は、それは直治の勝手で、私が差し出しておわびをするなど、ナセンスミみたいな気もするのです。)きょうは、直治の事でなく、私の事で、お願いがあるのです。京橋のアパートで罹災りさいなさって、それから今の御住所にお移りになった事を直治から聞きました、よっぽど東京の郊外のそのお宅にお伺いしようかと思つたのですが、お母さまがこないだからまた少しお加減が悪く、お母さまをほつといて上京する事は、どうしても出来ませぬので、それで、お手紙で申し上げる事に致しました。

あなたに、御相談してみたい事があるのです。

私のこの相談は、これまでの「女大学」の立場から見ると、非

常にずるくて、けがらわしくて、悪質の犯罪でさえあるかも知れませんが、けれども私は、いいえ、私たちは、いまのままでは、とても生きて行けそうもありませんので、弟の直治がこの世でいばん尊敬しているらしいあなたに、私のいつわらぬ気持ちを聞いていただき、お指図をお願いするつもりなのです。

私には、いまの生活が、たまらないのです。すき、きらいどころではなく、とても、このままでは私たち親子三人、生きて行けそうもないのです。

昨日も、くるしくて、からだも熱っぽく、息ぐるしくて、自分をもてあましていましたら、お昼すこしすぎ、雨の中を下の農家の娘さんが、お米を背負って持って来ました。そうして私のほう

から、約束どおりの衣類を差し上げました。娘さんは、食堂で私と向い合って腰かけてお茶を飲みながら、じつに、リアルな口調で、

「あなた、ものを売って、これから先、どのくらい生活して行けるの？」

と言いました。

「半歳はんとしか、一年くらい」

と私は答えました。そうして、右手で半分ばかり顔をかくして、
「眠いの。眠くて、仕方がないの」

と言いました。

「疲れているのよ。眠くなる神経衰弱でしょう」

「そうでしようね」

涙が出そうで、ふと私の胸の中に、リアリズムという言葉と、ロマンチズムという言葉が浮んで来ました。私に、リアリズムは、ありません。こんな具合いで、生きて行けるのかしら、と思つたら、全身に寒気さむけを感じました。お母さまは、半分御病人のようで、寝たり起きたりですし、弟は、ご存じのように心の大病人で、こちらにいる時は、焼酎しょうちゆうを飲み、この近所の宿屋と料理屋とをかねた家へ御精勤で、三日にいちどは、私たちの衣類を売つたお金を持って東京方面へ御出張です。でも、くるしいのは、こんな事ではありません。私はただ、私自身の生命が、こんな日常生活の中で、芭蕉ばしょうの葉が散らないで腐って行くように、立ち

つくしたままおのずから腐って行くのをありありと予感せられるのが、おそろしいのです。とても、たまらないのです。だから私は、「女大学」にそむいても、いまの生活からのがれ出たいのです。

それで、私、あなたに、相談いたします。

私は、いま、お母さまや弟に、はつきり宣言したいのです。私
が前から、或るお方に恋をしていて、私は将来、そのお方の愛人
として暮らすつもりだという事を、はつきり言ってしまったたいの
です。そのお方は、あなたもたしかご存じの筈です。そのお方の
お名前のイニシャルは、M・Cでございます。私は前から、何か
苦しい事が起ると、そのM・Cのところに飛んで行きたくて、こ

がれ死にをするような思いをして来たのです。

M・Cには、あなたと同じ様に、奥さまもお子さまもございます。また、私より、もつと綺麗で若い、女のお友達もあるようです。けれども私は、M・Cのところへ行くより他に、私の生きる途が無い気持なのです。M・Cの奥さまとは、私はまだ逢った事がありませんけれども、とても優しくてよいお方のようにございます。私は、その奥さまの事を考えると、自分をおそろしい女だと思います。けれども、私のいまの生活は、それ以上におそろしいもののような気がして、M・Cにたよる事を止せないのです。鳩のごとく素直に、蛇のごとく慧く、私は、私の恋をしとげたいと思います。でも、きつと、お母さまも、弟も、また世間の人た

ちも、誰ひとり私に賛成して下さらないでしょう。あなたは、いかがです。私は結局、ひとりであらう、ひとりで行動するより他は無いのだ、と思うと、涙が出て来ます。生れて初めての、ことなのです。この、むずかしいことを、周囲のみんなから祝福されてしとげる法はないものかしら、とひどくややこしい代数の因数分解か何かの答えを考えるように、思いをこらして、どこかに一箇所、ぱらぱらと綺麗に解きほぐれる糸口があるような気がして来て、急に陽気になったりなんかしているのです。

けれども、かんじんのM・Cのほうで、私をどう思っているのか。しやるのか。それを考えると、しよげてしまいます。謂わば、私は、押しかけ、………なんというのかしら、押しかけ女房といっ

てもいけないし、押しかけ愛人、とでもいおうかしら、そんなものなのですから、M・Cのほうでどうしても、いやだといったら、それつきり。だから、あなたにお願いします。どうか、あのお方に、あなたからきいてみて下さい。六年前の或る日、私の胸にかす幽かな淡い虹にじがかかって、それは恋でも愛でもなかったけれども、年月の経つほど、その虹はあざやかに色彩の濃さを増して来て、私はいままで一度も、それを見失った事はございませんでした。夕立の晴れた空にかかる虹は、やがてはかなく消えてしまいますけど、ひとの胸にかかった虹は、消えないようでございます。どうぞ、あのお方に、きいてみて下さい。あのお方は、ほんとに、私を、どう思っているのやらしやっただけでしょう。それこそ、雨後の

空の虹みたいに、思っていていらつしやつたのでしょうか。そうして、とつくに消えてしまったものど？

それなら、私も、私の虹を消してしまわなければなりません。けれども、私の生命をさきに消さなければ、私の胸の虹は消えそうもございません。

御返事を、祈っています。

上原二郎様（私のチエホフ。マイ、チエホフ。M・C）

私は、このごろ、少しずつ、太って行きます。動物的な女になつてゆくというよりは、ひとりしくなつたのだと思つています。この夏は、ロレンスの小説を、一つだけ読みました。

御返事が無いので、もういちどお手紙を差し上げます。こないだ差し上げた手紙は、とても、ずるい、蛇のような奸策かんさくに満ち満ちていたのを、いちいち見破っておしまいになったのでしよう。本当に、私はあの手紙の一行々々に狡智こうちの限りを尽してみたのです。結局、私はあなたに、私の生活をたすけていたただきたい、お金がほしいという意図だけ、それだけの手紙だと思いいになった事でしょう。そうして、私もそれを否定いたしませぬけれども、しかし、ただ私が自身のパトロンが欲しいのなら、失礼ながら、特にあなたを選んでお願い申しませぬ。他にたくさん、私を可愛かわいがって下さる老人のお金持などあるような気がします。げんにこ

ないだも、妙な縁談みたいなのがあったのです。そのお方のお名前は、あなたもご存じかも知れませんが、六十すぎた独身のおじいさんで、芸術院とかの会員だとか何だとか、そういう大師匠のひとが、私をもらいにこの山荘にやって来ました。この師匠さんは、私どもの西片町のお家の近所に住んでいましたので、私たちも隣組のよしみで、時たま逢う事がありました。いつか、あれは秋の夕暮だったと覚えていますが、私とお母さまと二人で、自動車でその師匠さんのお家の前を通り過ぎた時、そのお方がおひとりでぼんやりお宅の門の傍そばに立っていらして、お母さまが自動車の窓からちよつと師匠さんにお会釈なさったら、その師匠さんの気むずかしそうな蒼あおくろ黒いお顔が、ぱつと紅葉よりも赤くなり

ました。

「こいかしら」

私は、はしやいで言いました。

「お母さまを、すきなね」

けれども、お母さまは落ちついて、

「いいえ、偉いお方」

とひとりごとのように、おつしやいました。芸術家を尊敬するのは、私どもの家の家風のように、おつしやいます。芸術家を尊敬する

その師匠さんが、先年奥さまをなくなさったとかで、和田の叔父さまと謡曲のお天狗仲間てんぐの或る宮家のお方を介し、お母さまに申し入れをなさって、お母さまは、かず子から思ったとおりの御

返事を師匠さんに直接さしあげたら？ とおっしゃるし、私は深く考えるまでもなく、いやなので、私にはいま結婚の意志がございません、という事を何でもスラスラと書けました。

「お断りしてもいいのでしょうか？」

「そりやもう。……私も、無理な話だと思っていたわ」

その頃、師匠さんは軽井沢の別荘のほうにいらしたので、そのお別荘へお断りの御返事をさし上げたら、それから、二日目に、その手紙と行きちがい、師匠さんご自身、伊豆の温泉へ仕事に來た途中でちよつと立ち寄らせていただきましたとおっしゃって、私の返事の事は何もご存じでなく、出し抜けに、この山荘にお見えになったのです。芸術家というものは、おいくつになっても、

こんな子供みたいな気ままな事をなさるものらしいのね。

お母さまは、お加減がわるいので、私が御相手に出て、支那間でお茶を差し上げ、

「あの、お断りの手紙、いまごろ軽井沢のほうに着いている事と存じます。私、よく考えましたのですけど」

と申し上げました。

「そうですか」

とせかせかした調子でおっしゃって、汗をお拭きになり、

「でも、それは、もう一度、よくお考えになってみて下さい。私は、あなたを、何と言ったらいいか、謂いわば精神的には幸福を与える事が出来ないかも知れないが、その代り、物質的にはどんな

にでも幸福にしてあげる事が出来る。これだけは、はつきり言えます。まあ、ざつくばらんの話ですが」

「お言葉の、その、幸福というのが、私にはよくわかりません。生意気を申し上げるようですけど、ごめんなさい。チエホフの妻への手紙に、子供を生んでおくれ、私たちの子供を生んでおくれ、って書いてございましたわね。ニイチエだかのエッセイの中にも、子供を生ませたいと思う女、という言葉がございましたわ。私、子供がほしいのです。幸福なんて、そんなものは、どうだつていいのです。お金もほしいけど、子供を育てて行けるだけのお金があつたら、それでたくさんですわ」

師匠さんは、へんな笑い方をなさつて、

「あなたは、珍らしい方ですね。誰にでも、思ったとおりを言う方だ。あなたのような方と一緒にいると、私の仕事にも新しい靈感が舞い下りて来るかも知れない」

と、おとしに似合わず、ちよつと気障きざみたいな事を言いました。こんな偉い芸術家のお仕事を、もし本当に私の力で若返らせる事が出来たら、それも生き甲斐がのある事に違いない、とも思いましたが、けれども、私は、その師匠さんに抱かれる自分の姿を、どうしても考えることが出来なかつたのです。

「私に、恋のところが無くてもいいのでしょうか？」

と私は少し笑っておたずねしたら、師匠さんはまじめに、

「女のかたは、それでいいんです。女のひとは、ぼんやりしてい

て、いいんですよ」

とおつしやいます。

「でも、私みたいな女は、やつぱり、恋のところが無くては、結婚を考えられないのです。私、もう、大人おとななんですもの。来年は、もう、三十」

と言つて、思わず口を覆おおいたおいような氣持がしました。

三十。女には、二十九までは乙女おとめの匂においが残っている。しかし、三十の女のからだには、もう、どこにも、乙女の匂においが無い、というむかし読んだフランスの小説の中の言葉がふつと思ひ出されて、やりきれない淋しさに襲われ、外を見ると、真昼の光を浴びて海が、ガラスの破片のようにどぎつく光っていました。あの小

説を読んだ時には、そりやそうだろうと軽く肯定して澄ましていた。三十歳までで、女の生活は、おしまいになると平気でそう思っていたあの頃がなつかしい。腕輪、頸飾くびかざりり、ドレス、帯、ひとつひとつ私のからだの周囲から消えて無くなって行くに従って、私のからだの乙女の匂いも次第に淡くうすれて行つたのでしよう。まずしい、中年の女。おお、いやだ。でも、中年の女の生活にも、女の生活が、やっぱり、あるんですのね。このごろ、それがわかつて来ました。英人の女教師が、イギリスにお帰りの時、十九の私にこうおっしゃつたのを覚えています。

「あなたは、恋をなさつては、いけません。あなたは、恋をしたら、不幸になります。恋を、なさるなら、もつと、大きくなつて

からになさい。三十になってからになさい」

けれども、そう言われても私は、きよとんとしていました。三十になってからの事など、その頃の私には、想像も何も出来ないことでした。

「このお別荘を、お売りになるとかいう噂うわさを聞きましたが」

師匠さんは、意地わるそうな表情で、ふいとそうおつしやいました。

私は笑いました。

「ごめんなさい。桜の園を思い出したのです。あなたが、お買いになって下さるのでしよう？」

師匠さんは、さすがに敏感にお察しになったようで、怒ったよ

うに口をゆがめて黙しました。

或る宮様のお住居すまいとして、新円五十万円でこの家を、どうこうという話があつたのも事実ですが、それは立ち消えになり、その噂でも師匠さんは聞き込んだのでしよう。でも、桜の園のロパーヒンみたいに私どもに思われているのではたまらないと、すつかりお機嫌きげんを悪くした様子で、あと、世間話を少ししてお帰りになつてしまいました。

私がいま、あなたに求めているものは、ロパーヒンではございません。それは、はつきり言えるんです。ただ、中年の女の押しかけを、引受けて下さい。

私をはじめて、あなたとお逢いしたのは、もう六年くらい昔の

事でした。あの時には、私はあなたという人に就いて何も知りませんでした。ただ、弟の師匠さん、それもいくぶん悪い師匠さん、そう思っていただけでした。そうして、一緒にコップでお酒を飲んで、それから、あなたは、ちよつと軽いイタズラをなさつたでしょう。けれども、私は平氣でした。ただ、へんに身軽になつたくらいの氣分でいました。あなたを、すきでもきらいでも、なんでもなかつたのです。そのうちに、弟のお機嫌をとるために、あなたの著書を弟から借りて読み、面白かったり面白くなかつたり、あまり熱心な読者ではなかつたのですが、六年間、いつの頃からか、あなたの事が霧のように私の胸に滲み込んでいたのです。あの夜、地下室の階段で、私たちのした事も、急にいきいきとあざ

やかに思い出されて来て、なんだかあれば、私の運命を決定するほどの重大なことだったような気がして、あなたがしたわしく、これが、恋かも知れぬと思つたら、とても心細くたよりなく、ひとりでめそめそ泣きました。あなたは、他の男のひとと、まるで全然ちがっています。私は、「かもめ」のニーナのように、作家に恋しているわけではありません。私は、小説家などにあこがれてはいないので。文学少女、などとお思ひになつたら、こちらもまごつきます。私は、あなたの赤ちゃんがほしいのです。

もつとずつと前に、あなたがまだおひとりの時、そうして私もまだ山木へ行かない時に、お逢いして、二人が結婚していたら、私もいまみたいに苦しまずにすんだのかも知れませんが、私をも

うあなたとの結婚は出来ないものとあきらめています。あなたの奥さまを押しつけるなど、それはあさましい暴力みたいで、私はいやなんです。私は、おメカケ、（この言葉、言いたくなくて、たまらないのですけど、でも、愛人、と言つてみたところで、俗に言えば、おメカケに違いないのですから、はつきり、言うわ）それだつて、かまわないんです。でも、世間普通のお妾めかけの生活つて、むずかしいものらしいのね。人の話では、お妾は普通、用が無くなると、捨てられるものですつて。六十ちかくなると、どんな男のかたでも、みんな、本妻の所へお戻りになるんですつて。ですから、お妾にだけはなるものじゃないつて、西片町のじいやと乳母うばが話合っているのを、聞いた事があるんです。でも、それ

は、世間普通のお妾のことで、私たちの場合は、ちがうような気がします。あなたにとって、一番、大事なのは、やはり、あなたのお仕事だと思います。そうして、あなたが、私をおすきだったら、二人が仲よくする事が、お仕事のためにもいいでしょう。すると、あなたの奥さまも、私たちの事を納得して下さいます。へんな、こじつけの理窟りくつみたいだけど、でも、私の考えは、どこも間違っていないと思うわ。

問題は、あなたの御返事だけです。私を、すきなのか、きらいなのか、それとも、なんともないのか、その御返事、とてもおそろしいのだけでも、でも、伺わなければなりません。こないだの手紙にも、私、押しかけ愛人、と書き、また、この手紙にも、

中年の女の押しかけ、などと書きましたが、いまよく考えてみましたら、あなたからの御返事が無ければ、私、押しかけようにも、何も、手がかりが無く、ひとりではんやり瘦せて行くだけでしょう。やはりあなたの何かお言葉が無ければ、ダメだったんです。

いまふつと思つた事でございますが、あなたは、小説ではずいぶん恋の冒険みたいな事をお書きになり、世間からもひどい悪漢のように噂をされていながら、本当は、常識家なんでしょう。私には、常識という事が、わからないんです。すきな事が出来さえすれば、それはいい生活だと思えます。私は、あなたの赤ちゃんを生みたいのです。他のひとの赤ちゃんは、どんな事があつても、生みたくないんです。それで、私は、あなたに相談をしているの

です。おわかりになりましたら、御返事を下さい。あなたのお気持を、はつきり、お知らせ下さい。

雨があがって、風が吹き出しました。いま午後三時です。これから、一級酒（六合）の配給を貰いもらに行きます。ラム酒の瓶びんを二本、袋にに入れて、胸のポケットに、この手紙をいれて、もう十分ばかりしたら、下の村に出かけます。このお酒は、弟に飲ませません。かず子が飲みます。毎晩、コップで一ぱいずついただきます。お酒は、本当は、コップで飲むものですわね。

こちらに、いらつしやいませんか？

M・C様

きょうも雨降りになりました。目に見えないような霧きりさめ雨が降っているのです。毎日々々、外出もしないで御返事をお待ちしているのに、とうとうきょうまでおたよりがございませんでした。いったいあなたは、何をお考えになっているのでしょうか。こないだの手紙で、あの大師匠さんの事など書いたのが、いけなかつたのかしら。こんな縁談なんかを書いて、競争心をかき立てようとしていやがる、とでもお思いになったのでしょうか。でも、あの縁談は、もうあれつきりだったのです。さつきも、お母さまと、その話をして笑いました。お母さまは、こないだ舌の先が痛いとおっしゃって、直治にすすめられて、美学療法をして、その療法

に依^よつて、舌の痛みもとれて、この頃はちよつとお元気なのです。さつき私がお縁側に立つて、渦^{うず}を巻きつつ吹かれて行く霧雨を眺めながら、あなたのお気持の事を考えていましたら、

「ミルクを沸^{わか}したから、いらつしやい」

とお母さまが食堂のほうからお呼びになりました。

「寒いから、うんと熱くしてみたの」

私たちは、食堂で湯気の立っている熱いミルクをいただきながら、先日の師匠さんの事を話合いました。

「あの方と、私とは、どだい何も似合いませんでしょう？」

お母さまは平気で、

「似合わない」

とおつしやいました。

「私、こんなにわがままだし、それに芸術家というものをきらいじゃないし、おまけに、あの方にはたくさん収入があるらしいし、あんな方と結婚したら、そりやいいと思うわ。だけど、ダメなの」

お母さまは、お笑いになつて、

「かず子は、いけない子ね。そんなに、ダメでいながら、こないだあの方と、ゆつくり何かとたのしそうにお話をしていたでしょう。あなたの気持が、わからない」

「あら、だって、面白かつたんですもの。もつと、いろいろ話をしてみたかったわ。私、たしなみが無いのね」

「いいえ、べったりしているのよ。かず子べったり」

お母さまは、きようは、とてもお元気。

そうして、きのうはじめてアツプにした私の髪をごらんになつて、

「アツプはね、髪の毛の少いひとがするといいのよ。あなたのアツプは立派すぎて、金の小さい冠でも載せてみたいくらい。失敗ね」

「かず子がつかり。だって、お母さまはいつだったか、かず子は頸すじが白くて綺麗だから、なるべく頸すじを隠さないように、つておつしやつたじやないの」

「そんな事だけは、覚えているのね」

「少しでもほめられた事は、一生わすれません。覚えていたほうが、たのしいもの」

「こないだ、あの方からも、何かとほめられたのでしよう」

「そうよ。それで、べつたりになつちやつたの。私と一緒にいると靈感が、ああ、たまらない。私、芸術家はきらいじゃないんですけど、あんな、人格者みたいにもったいぶってるひとは、とても、ダメなの」

「直治の師匠さんは、どんなひとなの？」

私は、ひやりとしました。

「よくわからないけど、どうせ直治の師匠さんですもの、札つきの不良らしいわ」

「札つき？」

と、お母さまは、楽しそうな眼つきをなさつて眩つぶやき、

「面白い言葉ね。札つきなら、かえつて安全でいいじゃないの。鈴を首にさげている子猫こねこみたいで可愛らしいくらい。札のついていない不良が、こわいんです」

「そうかしら」

うれしくて、うれしくて、すうつとからだは煙になつて空に吸われて行くような気持でした。おわかりになりますか？ なぜ、私
が、うれしかったか。おわかりにならなかつたら、……殴るわよ。
いちど、本当に、こちらへ遊びにいらつしやいませんか？ 私か
ら直治に、あなたをお連れして来るように、つて言いつけるのも、

何だか不自然で、へんですから、あなたご自身の酔興から、ふつとここへ立寄ったという形にして、直治の案内でおいでになってもいいけれども、でも、なるべくならおひとりで、そうして直治が東京に出張した留守においでになって下さい。直治がいると、あなたを直治にとられてしまつて、きつとあなたたちは、お咲さんのところへ焼しやうちゆう耐ちゆうなんかを飲みに出かけて行つて、それつきりになるにきまつていますから。私の家では、先祖代々、芸術家を好きだつたようです。光琳こうりんという画家も、むかし私どもの京都のお家に永く滞在して、襖ふすまに綺麗な絵をかいて下さつたのです。だから、お母さまも、あなたの御来訪を、きつと喜んで下さると思います。あなたは、たぶん、二階の洋間におやすみという事に

なるでしょう。お忘れなく電燈を消して置いて下さい。私は小さい蠟燭ろうそくを片手に持って、暗い階段をのぼって行って、それは、だめ？ 早すぎるわね。

私、不良が好きなの。それも、札つきの不良が、すきななの。そうして私も、札つきの不良になりたいの。そうするよりほかに、私の生きかたが、無いような気がするの。あなたは、日本で一ばんの、札つきの不良でしょう。そうして、このごろはまた、たくさんさんのひとが、あなたを、きたならしい、けがらわしい、と言って、ひどく憎んで攻撃しているとか、弟から聞いて、いよいよあなたを好きになりました。あなたの事ですから、きつといろいろのアミをお持ちでしょうけれども、いまにだんだん私ひとりをする

きにおなりでしょう。なぜだか、私には、そう思われて仕方が無いんです。そうして、あなたは私と一緒に暮して、毎日、たのしくお仕事が出来るでしょう。小さい時から私は、よく人から、「あなたと一緒にいると苦勞を忘れる」と言われて来ました。私はいままで、人からきらわれた経験が無いんです。みんなが私を、いい子だと言って下さいました。だから、あなたも、私をおきらいの筈は、^{はず}けつしてないと思うのです。

逢^あえばいいのです。もう、いまは御返事も何も要りません。お逢いしようございます。私のほうから、東京のあなたのお宅へお伺いすれば一ばん簡単におめにかかれるのでしようけれど、お母さまが、何せ半病人のようで、私は附^つきっきりの看護婦兼お女中

さんなので、どうしてもそれが出来ません。おねがい
ございます。どうか、こちらへいらして下さい。ひとめお逢い
したいのです。そうして、すべては、お逢いすれば、わかること。私
の口の両側に出来た幽かすかな皺しわを見て下さい。世紀の悲しみの皺を
見て下さい。私のどんな言葉より、私の顔が、私の胸の思いをは
つきりあなたにお知らせする筈でございます。

さいしよに差し上げた手紙に、私の胸にかかっている虹の事を
書きましたが、その虹は螢ほたるの光みたい、またはお星さまの光み
たい、そんなお上品な美しいものではないのです。そんな淡い
遠い思いだったら、私はこんなに苦しまず、次第にあなたを忘れ
て行く事が出来たでしょう。私の胸の虹は、炎の橋です。胸が焼

きこげるほどの思いなのです。麻薬中毒者が、麻薬が切れて薬を
求める時の気持だって、これほどつらくはないでしょう。間違っ
てはいない、よこしまではないと思いなながらも、ふっと、私、た
いへんな、大馬鹿の事をしようとしているのではないかしら、と
思つて、ぞつとする事もあるんです。発狂しているのではないか
しらと反省する、そんな気持も、たくさんあるんです。でも、私
だって、冷静に計画している事もあるんです。本当に、こちらへ
いちどいらして下さい。いつ、いらして下さいでも大丈夫。私は
どこへも行かずに、いつもお待ちしています。私を信じて下さい。
もう一度お逢いして、その時、いやならハッキリ言つて下さい。
私のこの胸の炎は、あなたが点火したのですから、あなたが消し

て行って下さい。私ひとりの力では、とても消す事が出来ないのです。とにかく逢ったら、逢ったら、私が助かります。万葉や源氏物語の頃ころだったら、私の申し上げているようなこと、何でもない事でしたのに。私の望み。あなたの愛あい 妾しやうになつて、あなたの子供の母になる事。

このような手紙を、もし嘲ちやう笑しやうするひとがあつたら、そのひとは女の生きて行く努力を嘲笑するひとです。女のいのちを嘲笑するひとです。私は港の息づまるようなよど 澱んだ空氣に堪え切れなくて、港の外は嵐あらしであつても、帆をあげたいのです。憩いこえる帆は、例外なく汚い。私を嘲笑する人たちは、きつとみな、憩いこえる帆です。何も出来やしないんです。

困った女。しかし、この問題で一ばん苦しんでいるのは私なのです。この問題に就いて、何も、ちつとも苦しんでいない傍観者が、帆を醜くだらりと休ませながら、この問題を批判するのは、ナンセンスです。私を、いい加減に何々思想なんて言ってもらいたくないんです。私は無思想です。私は思想や哲学なんてもので行動した事は、いちどだつてないんです。

世間でよいと言われ、尊敬されているひとたちは、みな嘘つきで、にせものなのを、私は知っているんです。私は、世間を信用していないんです。札つきの不良だけが、私の味方なんです。札つきの不良。私は、その十字架にだけは、かかって死んでもいいと思っています。万人に非難せられても、それでも、私は言いか

えしてやれるんです。お前たちは、札のついていないもつと危険な不良じゃないか、と。

おわかりになりましたか？

こいに理由はございません。すこし理窟みたいな事を言いました。弟の口真似くちまねに過ぎなかつたような気がします。おいでをお待ちしているだけなのです。もう一度おめにかかりたいのです。それだけなのです。

待つ。ああ、人間の生活には、喜んだり怒ったり悲しんだり憎んだり、いろいろの感情があるけれども、けれどもそれは人間の生活のほんの一パーセントを占めているだけの感情で、あとの九十九パーセントは、ただ待つて暮らしているのではないでしょう

か。幸福の足音が、廊下に聞えるのを今か今かと胸のつぶれる思いで待つて、からつぽ。ああ、人間の生活つて、あんまりみじめ。生れて来ないほうがよかったとみんなが考えているこの現実。そうして毎日、朝から晩まで、はかなく何かを待つている。みじめすぎます。生れて来てよかつたと、ああ、いのちを、人間を、世の中を、よろこんでみとうございます。

はばむ道德を、押しつけられませんか？

M・C（マイ、チェホフのイニシャルではないんです。私は、作家にこいしているのではございません。マイ、チャイルド）

五

私は、ことしの夏、或る男のひとに、三つの手紙を差し上げたが、ご返事は無かった。どう考えても、私には、それより他に生ほかき方が無いと思われて、三つの手紙に、私のその胸のうちを書きしたため、岬みさきの尖せん端たんから怒濤どとうめがけて飛び下りる気持で、投とう函かんしたのに、いくら待っても、ご返事が無かった。弟の直治に、それとなくそのひとの御様子を聞いても、そのひとは何の変るところもなく、毎晩お酒を飲み歩き、いよいよ不道德の作品ばかり書いて、世間のおとなたちに、ひんしゆくせられ、憎まれているらしく、直治に出版業をはじめよ、などとすすめて、直治は大おお乗り気きで、あのひとの他にも二、三、小説家のかたに顧問になつ

てもらい、資本を出してくれるひともあるとかどうとか、直治の話を聞いていると、私の恋しているひとの身のまわりの雰囲気ふんいきに、私の匂においがみじんも滲しみ込んでいないらしく、私は恥はずかしいという思いよりも、この世の中というものが、私の考えている世の中とは、まるでちがった別な奇妙な生き物みたいな気がして来て、自分ひとりだけ置き去りにされ、呼んでも叫んでも、何の手て応こたえの無いたそがれの秋の曠野こうやに立たされているような、これまで味わった事のない悽せい愴そうの思いに襲おわれた。これが、失恋というものであろうか。曠野にこうして、ただ立ちつくしているうちに、日がとつぷり暮れて、夜露にこごえて死ぬより他は無ないのだろうかと思えば、涙の出ない慟どう哭こくで、両肩と胸はげが烈はげしく浪打なみうち、息

も出来ない気持になるのだ。

もうこの上は、何としても私が上京して、上原さんにお目にかろう、私の帆は既に挙げられて、港の外に出てしまったのだもの、立ちつくしているわけにゆかない、行くところまで行かなければならない、とひそかに上京の心支度をはじめたとたんにお母さまの御様子が、おかしくなったのである。

一夜、ひどいお咳せきが出て、お熱を計ってみたら、三十九度あつた。

「きょう、寒かったからでしょう。あすになれば、なおります」

とお母さまは、咳せき込みながら小声でおっしゃったが、私には、どうも、ただのお咳ではないように思われて、あすはとにかく下

の村のお医者に来てもらおうと心にきめた。

翌^{あく}朝、お熱は三十七度にさがり、お咳もあまり出なくなつていたが、それでも私は、村の先生のところへ行つて、お母さまが、この頃にわかにお弱りになつたこと、ゆうべからまた熱が出て、お咳も、ただの風邪のお咳と違ふような気がすること等を^{など}申し上げて、御診察をお願いした。

先生は、ではのちほど伺いましょう、これは到来物でございませうが、とおっしゃつて応接間の隅^{すみ}の戸棚^{とだな}から梨^{なし}を三つ取り出して私に下さつた。そうして、お昼すこし過ぎ、^{しろがすり}白^{しろがすり} 緋^{しろがすり} に夏羽織をお召しになつて診察にいらした。れいの如く、ていねいに永い事、聴診や打診をなさつて、それから私のほうに真正面に向き直り、

「御心配はございません。おくすりを、お飲みになれば、なおります」

とおっしゃる。

私は妙に可笑しく、笑いをこらえて、

「お注射は、いかがでしょうか」

とおたずねすると、まじめに、

「その必要は、ございませんでしょう。おかげでございますから、しずかにしていらっしゃると、間もなくおかげが抜けますでしょう」

とおっしゃった。

けれども、お母さまのお熱は、それから一週間経つても下らな

かった。咳はおさまったけれども、お熱のほうは、朝は七度七分くらいで、夕方になると九度になった。お医者には、あの翌日から、おなかをこわしたとかで休んでいらして、私がおくすりを頂きに行つて、お母さまのご容態の思わしくない事を看護婦さんに告げて、先生に伝えていただいても、普通のお風邪で心配はありません、という御返事で、水薬と散薬をくださる。

直治は相変らずの東京出張で、もう十日あまり帰らない。私ひとり、心細さのあまり和田の叔父さまへ、お母さまの御様子の變つた事を葉書にしたためて知らせてやつた。

発熱してかれこれ十日目に、村の先生が、やっと腹工はらぐあ合いがよろしくなりましたと言つて、診察しにいらした。

先生は、お母さまのお胸を注意深そうな表情で打診なさりながら、

「わかりました、わかりました」

とお叫びになり、それから、また私のほうに真正面に向き直られて、

「お熱の原因が、わかりましてございます。左肺に浸潤を起しています。でも、ご心配は要りません。お熱は、当分つづくでしょうけれども、おしずかにしていらっしゃったら、ご心配はございません」

とおっしゃる。

そうかしら？　と思ひながらも、おぼ溺れる者の藁わらにすがる気持も

あつて、村の先生のその診断に、私は少しほつとしたところもあつた。

お医者がお帰りになつてから、

「よかつたわね、お母さま。ほんの少しの浸潤なんて、たいいていのひとにあるものよ。お氣持を丈夫にお持ちになつていさえしたら、わけなくなおつてしまいますわ。ことしの夏の季候不順がいけなかつたのよ。夏はきらい。かず子は、夏の花も、きらい」

お母さまはお眼をつぶりながらお笑いになり、

「夏の花の好きなひとは、夏に死ぬつていうから、私もことしの夏あたり死ぬのかと思つていたら、直治が帰つて来たので、秋まで生きてしまつた」

あんな直治でも、やはりお母さまの生きるたのみの柱になつて
いるのか、と思つたら、つらかつた。

「それでも、もう夏がすぎてしまつたのですから、お母さまの危
険期も峠を越したつてわけなのね。お母さま、お庭の萩はぎが咲いて
いますわ。それから、女郎花おみなえし、われもこう、桔梗きぎよう、かるかや、
芒すすき。お庭がすっかり秋のお庭になりましたわ。十月になつたら、
きつとお熱も下るでしょう」

私は、それを祈つていた。早くこの九月の、蒸暑い、謂いわば残
暑の季節が過ぎるといい。そうして、菊が咲いて、うららかな小
春日びより和がつづくようになると、きつとお母さまのお熱も下つてお
丈夫になり、私もあのひとと逢あえるようになって、私の計画も大

輪の菊の花のように見事に咲き誇る事が出来るかも知れないのだ。ああ、早く十月になつて、そうしてお母さまのお熱が下るとよい。和田の叔父さまにお葉書を差し上げてから、一週間ばかりして、和田の叔父さまのお取とりはから計いで、以前侍医などしていらした三宅みやけさまの老先生が看護婦さんを連れて東京から御診察にいらして下さつた。

老先生は私どもの亡くなつたお父上とも御交際のあつた方なので、お母さまは、たいへんお喜びの御様子だつた。それに、先生は昔からお行儀が悪く、言葉遣づかいもぞんざいで、それがまたお母さまのお気に召しているらしく、その日は御診察など、そつちのけで何かとお二人で打ち解けた世間話に興じていらつしやつた。

私がお勝手に、プリンをこしらえて、それをお座敷に持って行つたら、もうその間に御診察もおすみの様子で、老先生は聴診器をだらしなく頸飾くびかざりみたいに肩にひっかけたまま、お座敷の廊下の籐椅子とういすに腰をかけ、

「僕などもね、屋台には行って、うどんの立食いでさ。うまいも、まずいもありやしません」

と、のんきそうに世間話をつづけていらつしやる。お母さまも、何気ない表情で天てんじょう井を見ながら、そのお話を聞いていらつしやる。なんでも無かつたんだ、と私は、ほつとした。

「いかがでございました？ この村の先生は、胸の左のほうに浸潤があるとかおつしやっていましたけど？」

と私も急に元気が出て、三宅さまにおたずねしたら、老先生は、事もなげに、

「なに、大丈夫だ」

と軽くおっしゃる。

「まあ、よかったわね、お母さま」

と私は心から微笑して、お母さまに呼びかけ、

「大丈夫なんですって」

その時、三宅さまは籐椅子から、つと立ち上って支那間のほうへいらっしやった。何か私に用事がありげに見えたので、私はそつとその後を追った。

老先生は支那間の壁掛の蔭かげに行つて立ちどまつて、

「バリバリ音が聞えているぞ」

とおっしやった。

「浸潤では、ございませんの？」

「違う」

「気管支カタルでは？」

私は、もはや涙ぐんでおたずねした。

「違う」

結核^{デーベ}！ 私はそれだと思いたくなくなかった。肺炎や浸潤や気管支カタルだったら、必ず私の力でなおしてあげる。けれども、結核だったら、ああ、もうだめかも知れない。私は足もとが、崩れて行くような思いをした。

「音、とても悪いの？ バリバリ聞えてるの？」

心細さに、私はすすり泣きになった。

「右も左も全部だ」

「だって、お母さまは、まだお元気なのよ。ごはんだって、おいしいおいしいとおっしゃって、……」

「仕方がない」

「うそだわ。ね、そんな事ないんでしょう？ バタやお卵や、牛乳をたくさん召し上ったら、なおるんでしょう？ おからだに抵抗力さえついたら、熱だって下るんでしょう？」

「うん、なんでも、たくさん食べる事だ」

「ね？ そうでしょう？ トマトも毎日、五つくらいは召し上っ

ているのよ」

「うん、トマトはいい」

「じゃあ、大丈夫ね？　なおるわね？」

「しかし、こんどの病気は命取りになるかも知れない。そのつもりでいたほうがいい」

人の力で、どうしても出来ない事が、この世の中にたくさんあるのだという絶望の壁の存在を、生れてはじめて知ったような気がした。

「二年？　三年？」

私は震えながら小声でたずねた。

「わからない。とにかくもう、手のつけようが無い」

そうして、三宅さまは、その日は伊豆いずの長岡温泉に宿を予約していらつしやるとかで、看護婦さんと一緒にお帰りになった。門の外までお見送りして、それから、夢中で引返してお座敷のお母さまの枕まくらもとに坐りすわ、何事も無かつたように笑いかけると、お母さまは、

「先生は、なんとおつしやっていたの？」
とおたずねになった。

「熱さえ下ればいいんですって」

「胸のほうは？」

「たいした事もないらしいわ。ほら、いつかのご病気の時みたいなものよ、きつと。いまに涼しくなったら、どんどんお丈夫になり

ますわ」

私は自分の嘘を信じようと思った。命取りなどというおそろしい言葉は、忘れようと思った。私には、このお母さまが、亡くなるという事は、それは私の肉体も共に消失してしまうような感じ、とても事実として考えられないことだった。これからは何も忘れて、このお母さまに、たくさんたくさんご馳走ちそうをこしらえて差し上げよう。おさかな。スープ。罐詰かんづめ。レバ。肉汁。トマト。卵。牛乳。おすまし。お豆腐があればいいのに。お豆腐のお味噌みそ汁しる。白い御飯。お餅もち。おいしいそうなものは何でも、私の持物を皆売って、そうしてお母さまにご馳走してあげよう。

私は立って、支那間へ行った。そうして、支那間の寝椅子ねいすをお

座敷の縁側ちかくに移して、お母さまのお顔が見えるように腰かけた。やすんでいらつしやるお母さまのお顔は、ちつとも病人らしくなかつた。眼は美しく澄んでいるし、お顔色も生き生きしていらつしやる。毎朝、規則正しく起床なさつて洗面所へいらして、それからお風呂場の三畳でご自分で髪を結つて、身じまいをきちんとなさつて、それからお床に帰つて、お床にお坐りのままお食事をすまし、それからお床に寝たり起きたり、午前中はずっと新聞やご本を読んでいらして、熱の出るのは午後だけである。

「ああ、お母さまは、お元気なのだ。きつと、大丈夫なのだ」
と私は、心の中で三宅さまのご診断を強く打ち消した。

十月になつて、そうして菊の花の咲く頃になれば、など考えて

いるうちに私は、うとうとと、うたた寝をはじめた。現実には、私はいちども見た事の無い風景なのに、それでも夢では時々その風景を見て、ああ、またここへ来たと思うなじみの森の中の湖のほとりに私は出た。私は、和服の青年と足音も無く一緒に歩いていた。風景全体が、みどり色の霧のかかっているような感じであった。そうして、湖の底に白いきやしやな橋が沈んでいた。

「ああ、橋が沈んでいる。きようは、どこへも行けない。ここのホテルでやすみましょう。たしか、空いた部屋あがあつた筈はずだ」

湖のほとりに、石のホテルがあつた。そのホテルの石は、みどり色の霧でしっとり濡ぬれていた。石の門の上に、金文字きんもじでほそく、

HOTEL SWITZERLANDと彫り込まれていた。SWIと読んでいる

うちに、不意に、お母さまの事を思い出した。お母さまは、どうなさるのだろう。お母さまも、このホテルへいらつしやるのかしら？ と不審になった。そうして、青年と一緒に石の門をくぐり、前庭へはいった。霧の庭に、アジサイに似た赤い大きい花が燃えるように咲いていた。子供の頃、お蒲団ふとんの模様に、真赤まっかなアジサイの花が散らされてあるのを見て、へんに悲しかったが、やっぱり赤いアジサイの花って本当にあるものなんだと思った。

「寒くない？」

「ええ、少し。霧でお耳が濡れて、お耳の裏が冷たい」

と言つて笑いながら、

「お母さまは、どうなさるのかしら」

とたずねた。

すると、青年は、とても悲しく慈愛深く微笑ほほえんで、

「あのお方は、お墓の下です」

と答えた。

「あ」

と私は小さく叫んだ。そうだったのだ。お母さまは、もういら

つしやらなかったのだ。お母さまのお葬とむらいも、とつくに済まして

いたのじゃないか。ああ、お母さまは、もうお亡くなりになった

のだと意識したら、言い知れぬ凄さびしさに身震いして、眼がさめた。

ヴェランダは、すでに黄たそがれ昏たそがれだった。雨が降っていた。みどり

色のさびしさは、夢のまま、あたり一面にただよっていた。

「お母さま」

と私は呼んだ。

静かなお声で、

「何してるの？」

というご返事があつた。

私はうれしさに飛び上つて、お座敷へ行き、

「いまね、私、眠っていたのよ」

「そう。何をしているのかしら、と思つていたの。永いおひる寝ね」

と面白そうにお笑いになった。

私はお母さまのこうして優雅に息づいて生きていらつしやる事

が、あまりうれしくて、ありがたくて、涙ぐんでしまった。

「御夕飯のお献立は？ ご希望がございました？」

私は、少しはしゃいだ口調でそう言った。

「いいの。なんにも要らない。きょうは、九度五分にあがったのにわかに私は、ペしやんこにしよげた。そうして、途方にくれて薄暗い部屋の中をぼんやり見廻し、ふと、死にたくなつた。」

「どうしたんでしよう。九度五分なんて」

「なんでもないの。ただ、熱の出る前が、いやなのよ。頭がちよつと痛くなつて、寒気がして、それから熱が出るの」

外は、もう、暗くなつていて、雨はやんだようだが、風が吹き出していた。灯をつけて、食堂へ行こうとすると、お母さまが、

「まぶしいから、つけないで」

とおっしやった。

「暗いところで、じつと寝ていらっしやるの、おいやでしよう」

と立ったまま、おたずねすると、

「眼をつぶって寝ているのだから、同じことよ。ちつとも、さびしくない。かえって、まぶしいのが、いやなの。これから、ずっと、お座敷の灯はつけないでね」

とおっしやった。

私には、それもまた不吉な感じで、黙ってお座敷の灯を消して、隣りの間へ行き、隣りの間のスタンドに灯をつけ、たまらなく侘わびしくなって、いそいで食堂へ行き、罐詰さけの鮭さけを冷たいごはんに

のせて食べたなら、ぽろぽろと涙が出た。

風は夜になっていよいよ強く吹き、九時頃から雨もまじり、本当の嵐あらしになった。二、三日前に巻き上げた縁先の簾すだれが、ばたんばたん音をたてて、私はお座敷の隣りの間で、ローザルクセンブルグの「経済学入門」を奇妙な興奮を覚えながら読んでいた。これは私が、こないだお二階の直治の部屋から持って来たものだが、その時、これと一緒に、レニン選集、それからカウツキイの「社会革命」なども無断で拝借して来て、隣りの間の私の机の上ののせて置いたら、お母さまが、朝お顔を洗いにいらした帰りに、私の机の傍そばを通り、ふとその三冊の本に目をとどめ、いちいちお手にとって、眺ながめて、それから小さい溜息ためいきをついて、そつとまた

机の上に置き、淋しいお顔で私のほうをちらと見た。けれども、その眼つきは、深い悲しみに満ちていながら、決して拒否や嫌悪けんおのそれではなかった。お母さまのお読みになる本は、ユーゴー、デウマ父子、ミュツセ、ドオデエなどであるが、私はそのような甘美な物語の本にだつて、革命のにおいがあるのを知っている。お母さまのように、天性の教養、という言葉もへんだが、そんなものをお持ちのお方は、案外なんでもなく、当然の事として革命を迎える事が出来るのかも知れない。私だつて、こうして、ローザルクセンブルグの本など読んで、自分がキザつたらしく思われる事もないではないが、けれどもまた、やはり私は私なりに深い興味を覚えるのだ。ここに書かれてあるのは、経済学という事に

なっているのだが、経済学として読むと、まことにつまらない。実に単純でわかり切った事ばかりだ。いや、或いは^{ある}、私には経済学というものがまったく理解できないのかも知れない。とにかく、私には、すこしも面白くない。人間というものは、ケチなもので、そうして、永遠にケチなものだという前提が無いと全く成り立たない学問で、ケチでない人にとっては、分配の問題でも何でも、まるで興味の無い事だ。それでも私はこの本を読み、べつなところで、奇妙な興奮を覚えるのだ。それは、この本の著者が、何の躊躇^{ちゆうちよ}も無く、片端から旧来の思想を破壊して行くがむしやらかな勇氣である。どのようなように道徳に反しても、恋するひとのところに涼しくさっさと走り寄る人妻の姿さえ思い浮ぶ。破壊思想。破

壊は、哀れで悲しくて、そうして美しいものだ。破壊して、建て直して、完成しようという夢。そうして、いったん破壊すれば、永遠に完成の日が来ないかも知れぬのに、それでも、したう恋ゆえに、破壊しなければならぬのだ。革命を起さなければならぬのだ。ローザはマルキシズムに、悲しくひたむきの恋をしている。

あれは、十二年前の冬だった。

「あなたは、更さらしな級日記の少女なのね。もう、何を言っても仕方が無い」

そう言つて、私から離れて行つたお友達。あのお友達に、あの時、私はレニンの本を読まないで返したのだ。

「読んだ？」

「ごめんね。読まなかったの」

ニコライ堂の見える橋の上だった。

「なぜ？ どうして？」

そのお友達は、私よりさらに一寸くらい背せいが高く、語学がとでもよく出来て、赤いベレー帽がよく似合って、お顔もジヨコンダみたいだという評判の、美しいひとだった。

「表紙の色が、いやだったの」

「へんなひと。そうじゃないんでしょう？ 本当は、私をこわくなったのでしょうか？」

「こわかないわ。私、表紙の色が、たまらなかったの」

「そう」

と淋しそうに言い、それから、私を更級日記だと言い、そうして、何を言っても仕方がない、ときめてしまった。

私たちは、しばらく黙って、冬の川を見下みおろしていた。

「ご無事で。もし、これが永遠の別れなら、永遠に、ご無事で。

バイロン」

と言い、それから、そのバイロンの詩句を原文で口早しやうに誦して、私のからだを軽く抱いた。

私は恥ずかしく、

「ごめんなさいね」

と小声でわびて、お茶の水駅のほうに歩いて、振り向いてみると、そのお友達は、やはり橋の上に立ったまま、動かないで、じ

つと私を見つめていた。

それつきり、そのお友達と逢わない。同じ外人教師の家へかよつていたのだけれども、学校がちがつていたのである。

あれから十二年たったけれども、私はやっぱり更級日記から一歩も進んでいなかった。いつたいまあ、私はそのあいだ、何をしていたのだろう。革命を、あこがれた事も無かつたし、恋さえ、知らなかつた。いままで世間のおとなたちは、この革命と恋の二つを、最も愚かしく、いまわしいものとして私たちに教え、戦争の前も、戦争中も、私たちはそのとおりに思い込んでいたのだが、敗戦後、私たちは世間のおとなを信頼しなくなつて、何でもあのひとたちの言う事の反対のほうに本当の生きる道があるような気

がして来て、革命も恋も、実はこの世で最もよくて、おいしい事で、あまりいい事だから、おとなのひとたちは意地わるく私たちに青い葡萄ぶどうだと嘘うそついて教えていたのに違いないと思うようになったのだ。私は確信したい。人間は恋と革命のために生れて来たのだ。

すつと襖ふすまがあいて、お母さまが笑いながら顔をお出しになつて、「まだ起きていらつしやる。眠くないの？」

とおつしやつた。

机の上の時計を見たら、十二時だった。

「ええ、ちつとも眠くないの。社会主義のご本を読んでいたら、興奮しちゃいましたわ」

「そう。お酒ないの？ そんな時には、お酒を飲んでやすむと、よく眠れるんですけどね」

とからかうような口調でおっしゃったが、その態度には、どこやらデカダンと紙一重のなまめかしさがあつた。

やがて十月になつたが、からりとした秋晴れの空にはならず、つゆどき梅雨時のような、じめじめして蒸し暑い日が続いた。そうして、お母さまのお熱は、やはり毎日夕方になると、三十八度と九度のあいだを上下した。

そうして或る朝、おそろしいものを私は見た。お母さまのお手が、むくんでいるのだ。朝ごはんが一ばんおいしいと言つていら

したお母さまも、このごろは、お床に坐つて、ほんの少し、おかゆを軽く一碗、おかずも匂いの強いものは駄目で、その日は、松茸のお清汁をさし上げたのに、やつぱり、松茸の香さえおいやになつていらつしやる様子で、お椀をお口元まで持つて行つて、それきりまたそつとお膳の上におかえしになつて、その時、私は、お母さまの手を見て、びつくりした。右の手がふくらんで、まあなくなつていたのだ。

「お母さま！ 手、なんともないの？」

お顔さえ少し蒼く、むくんでいるように見えた。

「なんでもないの。これくらい、なんでもないの」

「いつから、腫れたの？」

お母さまは、まぶしそうなお顔をなさって、黙っていらした。

私は、声を挙げて泣きたくなつた。こんな手は、お母さまの手じやない。よそのおばさんの手だ。私のお母さまのお手は、もつとほそくて小さいお手だ。私のよく知っている手。優しい手。可愛い手。あの手は、永遠に、消えてしまったのだろうか。左の手は、まだそんなに腫れていなかったけれども、とにかく傷いたましく、見ている事が出来なくて、私は眼をそらし、床の間の花籠はなかごをにらんでいた。

涙が出そうで、たまらなくなつて、つと立って食堂へ行ったら、直治がひとりで、半熟卵をたべていた。たまに伊豆のこの家にいる事があつても、夜はきまつてお咲さんのところへ行つて、しょうち焼

酎^{ゆう}を飲み、朝は不機嫌な顔で、ごはんは食べずに半熟の卵を四つか五つ食べるだけで、それからまた二階へ行つて、寝たり起きたりなのである。

「お母さまの手が腫れて」

と直治に話しかけ、うつむいた。言葉をつづける事が出来ず、私は、うつむいたまま、肩で泣いた。

直治は黙っていた。

私は顔を挙げて、

「もう、だめなの。あなた、気が附^つかなかった？ あんなに腫れたら、もう、駄目なの」

と、テーブルの端を掴^{つか}んで言った。

直治も、暗い顔になって、

「近いぞ、そりや。ちえつ、つまらねえ事になりやがった」

「私、もう一度、なおしたいの。どうかして、なおしたいの」

と右手で左手をしばりながら言ったら、突然、直治が、めそめそと泣き出して、

「なんにも、いい事が無えじやねえか。僕たちには、なんにもいい事が無えじやねえか」

と言いながら、滅茶苦茶にこぶしで眼をこすった。

その日、直治は、和田の叔父さまにお母さまの容態を報告し、

今後の事の指図さしずを受けに上京し、私はお母さまのお傍そばにいない間、朝から晩まで、ほとんど泣いていた。朝霧の中を牛乳をとりに行

く時も、鏡に向つて髪を撫なでつけながらも、口紅を塗りながらも、いつも私は泣いていた。お母さまと過した仕合せの日の、あの事この事が、絵のように浮んで来て、いくらでも泣けて仕様が無かつた。夕方、暗くなつてから、支那間のヴェランダへ出て、永いことすすり泣いた。秋の空に星が光つていて、足許あしもとに、よその猫ねこがうづくまつて、動かなかつた。

翌日、手の腫れは、昨日よりも、また一そうひどくなつていた。お食事は、何も召し上らなかつた。お蜜柑みかんのジュースも、口が荒れて、しみて、飲めないとおっしゃつた。

「お母さま、また、直治のあのマスクを、なさつたら？」

と笑いながら言うつもりであつたが、言っているうちに、つら

くなつて、わつと声を挙げて泣いてしまった。

「毎日いそがしくて、疲れるでしょう。看護婦さんを、やとつて

ちようだい
頂戴」

と静かにおつしやつたが、ご自分のおからだよりも、かず子の身を心配していらつしやる事がよくわかつて、なおの事かなしく、立って、走つて、お風呂場の三畳に行つて、思いのたけ泣いた。

お昼すこし過ぎ、直治が三宅さまの老先生と、それから看護婦さん二人を、お連れして来た。

いつも冗談ばかりおつしやる老先生も、その時は、お怒りになつていらつしやるような素振りで、どしどし病室へはいつて来られて、すぐにご診察を、おはじめになった。そうして、誰に言う

ともなく、

「お弱りになりましたね」

と一こと低くおっしゃって、カンフルを注射して下さい。

「先生のお宿は？」

とお母さまは、うわ言のようにおっしゃる。

「また長岡です。予約してありますから、ご心配無用。このご病人は、ひとの事など心配なさらず、もつとわがままに、召し上りたいものは何でも、たくさん召し上げるようにしなければいけませんね。栄養をとったら、よくなります。明日また、まいります。看護婦をひとり置いて行きますから、使ってみて下さい」

と老先生は、病床のお母さまに向って大きな声で言い、それか

ら直治に眼くばせして立ち上った。

直治ひとり、先生とお供の看護婦さんを送って行って、やがて帰って来た直治の顔を見ると、それは泣きたいのを^{こら}泳えている顔だった。

私たちは、そつと病室から出て、食堂へ行つた。

「だめなの？　そうでしょう？」

「つまらねえ」

と直治は口をゆがめて笑つて、

「衰弱が、ばかに急激にやつて来たらしいんだ。今、^{こん}明^{みょう}日^{うち}も、

わからねえと言つていやがった」

と言つているうちに直治の眼から涙があふれて出た。

「ほうぼうへ、電報を打たなくてもいいかしら」

私はかえつて、しんと落ちついて言った。

「それは、叔父さんにも相談したが、叔父さんは、いまはそんな人集めの出来る時代では無いと言っていた。来ていただいても、こんな狭い家では、かえつて失礼だし、この近くには、ろくな宿もないし、長岡の温泉にだつて、二部屋も三部屋も予約は出来ない、つまり、僕たちはもう貧乏で、そんなお偉えらがたを呼び寄せ、力が無えつてわけなんだ。叔父さんは、すぐあとで来る筈だが、でも、あいつは、昔からケチで、頼みにも何もなりやしねえ。ゆうべだつてもう、ママの病気はそちのけで、僕にさんざんのお説教だ。ケチなやつからお説教されて、眼がさめたなんて者は、

古今東西にわたって一人もあつた例ためしが無えんだ。姉と弟でも、ママとあいつとではまるで、雲泥うんでいのちがいなんだからなあ、いやになるよ」

「でも、私はとにかく、あなたは、これから叔父さまにたよらなければ、……」

「まつぴらだ。いつそ乞食こじきになつたほうがいい。姉さんこそ、これから、叔父さんによろしくおすがり申し上げるさ」

「私には、……」

涙が出た。

「私には、行くところがあるの」

「縁談？ きまつてるの？」

「いいえ」

「自活か？ はたらく婦人。よせ、よせ」

「自活でもないの。私ね、革命家になるの」

「へえ？」

直治は、へんな顔をして私を見た。

その時、三宅先生の連れていらした附添いの看護婦さんが、私を呼びに来た。

「奥さまが、何かご用のようでございます」

いそいで病室に行つて、お蒲団ふとんの傍に坐り、

「何？」

と顔を寄せてたずねた。

けれども、お母さまは、何か言いたげにして、黙っていらつしやる。

「お水？」

とたずねた。

幽かに首を振る。お水でも無いらしかった。

しばらくして、小さいお声で、

「夢を見たの」

とおっしゃった。

「そう？　どんな夢？」

「蛇へびの夢」

私は、ぎよつとした。

「お縁側の沓脱石くつぬぎいしの上に、赤い縞しまのある女の蛇が、いるでしょう。見てごらん」

私はからだの寒くなるような気持で、つと立ってお縁側に出て、ガラス戸越しに、見ると、沓脱石の上に蛇が、秋の陽ひを浴びて長くのびていた。私は、くらくらと目まいした。

私はお前を知っている。お前はあの時から見ると、すこし大きくなって老ふけているけど、でも、私のために卵を焼かれたあの女蛇なのね。お前の復讐ふくしゅうは、もう私よく思い知ったから、あちらへお行き。さっさと、向うへ行ってお呉くれ。

と心の中で念じて、その蛇を見つめていたが、いつかな蛇は、動こうとしなかった。私はなぜだか、看護婦さんに、その蛇を見

られたくなかった。トンと強く足踏みして、

「いませんわ、お母さま。夢なんて、あてになりませんわよ」

とわざと必要以上の大声で言つて、ちらと沓脱石のほうを見ると、蛇は、やつと、からだを動かし、だらだらと石から垂れ落ちて行つた。

もうだめだ。だめなのだ、その蛇を見て、あきらめが、はじめて私の心の底に湧わいて出た。お父上のお亡くなりになる時にも、枕もとに黒い小さい蛇がいたというし、またあの時に、お庭の木という木に蛇がからみついていたのを、私は見た。

お母さまはお床の上に起き直るお元気もなくなったようで、いつもうつらうつらしていらして、もうおからだをすっかり附添い

の看護婦さんにまかせて、そうして、お食事は、もうほとんど喉のどをとおらない様子であつた。蛇を見てから、私は、悲しみの底を突き抜けた心の平安、とでも言つたらいいのかしら、そのような幸福感にも似た心のゆとりが出て来て、もうこの上は、出来るだけ、ただお母さまのお傍にいようと思つた。

そうしてその翌あくる日から、お母さまの枕元にびつたり寄り添つて坐つて編物などをした。私は、編物でもお針でも、人よりずつと早いけれども、しかし、下手だつた。それで、いつもお母さまは、その下手なところを、いちいち手を取つて教えて下さつたものである。その日も私は、別に編みたい気持も無かつたのだが、お母さまの傍にべつたりくつついていても不自然でないように、

恰好かっこうをつけるために、毛糸の箱を持ち出して余念無げに編物をはじめたのだ。

お母さまは私の手もとをじっと見つめて、

「あなたの靴くつした下をあむんでしよう？ それなら、もう、八つふやさなければ、はくとき窮屈よ」

とおっしゃった。

私は子供の頃、いくら教えて頂いても、どうもうまく編めなかったが、その時のようにまごつき、そうして、恥ずかしく、なつかしく、ああもう、こうしてお母さまに教えていただく事も、これでおしまいと思うと、つい涙で編目が見えなくなった。

お母さまは、こうして寝ていらつしやると、ちつともお苦しそ

うでなかった。お食事は、もう、けさから全然とおらず、ガーゼにお茶をひたして時々お口をしめしてあげるだけなのだが、しかし意識は、はつきりしていて、時々私におだやかに話しかける。

「新聞に陛下のお写真が出ていたようだけど、もういちど見せて」
私は新聞のその箇所をお母さまの顔の上にかざしてあげた。

「お老けになった」

「いいえ、これは写真がわるいのよ。こないだのお写真なんか、とてもお若くて、はしゃいでいらしたわ。かえってこんな時代を、お喜びになっただけじゃないかしら」

「なぜ？」

「だって、陛下もこんど解放されたんですもの」

お母さまは、淋しそうにお笑いになった。それから、しばらくして、

「泣きたくても、もう、涙が出なくなつたのよ」とおっしゃった。

私は、お母さまはいま幸福なのではないかしら、とふと思った。幸福感というものは、悲哀の川の底に沈んで、幽かに光っている砂金のようなものではなからうか。悲しみの限りを通り過ぎて、不思議な薄明りの気持、あれが幸福感というものならば、陛下も、お母さまも、それから私も、たしかにいま、幸福なのである。静かな、秋の午前。日ざしの柔らかな、秋の庭。私は、編物をやめて、胸の高さに光っている海を眺め、

「お母さま。私いままで、ずいぶん世間知らずだったのね」

と言い、それから、もっと言いたい事があつたけれども、お座敷の隅で静脈注射の支度などしている看護婦さんに聞かれるのがすみ恥ずかしくて、言うのをやめた。

「いままでって、……」

とお母さまは、薄くお笑いになつて聞きとがめて、

「それでは、いまは世間を知っているの？」

私は、なぜだか顔が真赤になつた。

「世間は、わからない」

とお母さまは顔を向うむきにして、ひとりごとのように小さい声でおっしゃる。

「私には、わからない。わかっているひとなんか、無いんじゃないの？　いつまで経たつても、みんな子供です。なんにも、わかつてやしないのです」

けれども、私は生きて行かなければならないのだ。子供かも知れないけれども、しかし、甘えてばかりもおられなくなつた。私はこれから世間と争つて行かなければならないのだ。ああ、お母さまのように、人と争わず、憎まがずうらまず、美しく悲しく生しく涯がいを終る事の出来る人は、もうお母さまが最後で、これからの世の中には存在し得ないのではなからうか。死んで行くひとは美しい。生きるといふ事。生き残るといふ事。それは、たいへん醜くて、血の匂いのする、きたならしい事のような気もする。私は、

みごもって、穴を掘る蛇の姿を畳の上に思い描いてみた。けれども、私には、あきらめ切れないものがあるのだ。あさましくてもよい、私は生き残って、思う事をしとげるために世間と争って行こう。お母さまのいよいよ亡くなるという事がきまると、私の口マンチシズムや感傷が次第に消えて、何か自分が油断のならぬ悪がしこい生きものに変って行くような気分になった。

その日のお昼すぎ、私がお母さまの傍で、お口をうるおしてあげていると、門の前に自動車がとまった。和田の叔父さまが、叔母さまと一緒に東京から自動車で馳せ^はつけて来て下さったのだ。叔父さまが、病室にはいつていらして、お母さまの枕^{まくらもと}元に黙ってお坐りになったら、お母さまは、ハンケチでご自分のお顔の

下半分をかくし、叔父さまのお顔を見つめたまま、お泣きになった。けれども、泣き顔になっただけで、涙は出なかった。お人形のような感じだった。

「直治は、どこ？」

と、しばらくしてお母さまは、私のほうを見ておっしゃった。

私は二階へ行つて、洋間のソファに寝そべつて新刊の雑誌を読んでいる直治に、

「お母さまが、お呼びですよ」

というと、

「わあ、また愁歎場しゆうたんばか。汝等なんじらは、よく我慢してあそこに頑張

つておれるね。神経が太いんだね。薄情なんだね。我等は、何と

も苦しくて、げこころねっ実に心は熱すれどもにくたい肉体よわく、とてもママの傍に
いる気力は無い」

などと言いながらうわぎ上衣を着て、私と一緒に二階から降りて来た。
二人ならんでお母さまの枕もとに坐ると、お母さまは、急にお
蒲団の下から手をお出しになって、そうして、黙って直治のほう
を指差し、それから私を指差し、それから叔父さまのほうへお顔
をお向けになって、両方の掌をひたとお合せになった。

叔父さまは、大きくうなずいて、

「ああ、わかりましたよ。わかりましたよ」

とおっしゃった。

お母さまは、ご安心なさったように、眼を軽くつぶって、手を

お蒲団の中へそつとおいれになった。

私も泣き、直治もうつむいて鳴咽おえつした。

そこへ、三宅さまの老先生が、長岡からいらして、取り敢あえず注射した。お母さまも、叔父さまに逢えて、もう、心残りが無いとお思いになったか、

「先生、早く、樂にして下さいな」
とおっしゃった。

老先生と叔父さまは、顔を見合せて、黙って、そうしてお二人の眼に涙がきらと光った。

私は立って食堂へ行き、叔父さまのお好きなキツネうどんをこしらえて、先生と直治と叔母さまと四人分、支那間へ持って行き、

それから叔父さまのお土産の丸ノ内ホテルのサンドウィッチを、お母さまにお見せして、お母さまの枕元に置くと、

「忙しいでしょう」

とお母さまは、小声でおっしゃった。

支那間で皆さんがしばらく雑談をして、叔父さま叔母さまは、どうしても今夜、東京へ帰らなければならぬ用事があるとかで、私に見舞いのお金包を手渡し、三宅さまも看護婦さんと一緒にお帰りになる事になり、附添いの看護婦さんに、いろいろ手当の仕方をお願いつけ、とにかくまだ意識はしっかりしているし、心臓のほうもそんなにまいっていないから、注射だけでも、もう四、五日は大丈夫だろうという事で、その日いったん皆さんが自動車で

東京へ引き上げたのである。

皆さんをお送りして、お座敷へ行くと、お母さまが、私にだけ笑う親しげな笑いかたをなさって、

「忙しかつたでしょう」

と、また、囁くささやような小さいお声でおっしゃった。そのお顔は、活き活きとして、むしろ輝いているように見えた。叔父さまにお逢い出来てうれしかったのだろう、と私は思った。

「いいえ」

私もすこし浮き浮きした気分になって、にっこり笑った。

そうして、これが、お母さまとの最後のお話であった。

それから、三時間ばかりして、お母さまは亡くなったのだ。秋

のしずかな黄昏たそがれ、看護婦さんに脈をとられて、直治と私と、たった二人の肉親に見守られて、日本で最後の貴婦人だった美しいお母さまが。

お死顔は、殆んどほと、変らなかつた。お父上の時は、さつと、お顔の色が変つたけれども、お母さまのお顔の色は、ちつとも變らずに、呼吸だけが絶えた。その呼吸の絶えたのも、いつと、はつきりわからぬ位であつた。お顔のむくみも、前日あたりからとれていて、頬が蟬ほおろうのようにすべすべして、薄い唇くちびるが幽かにゆがんで微笑ほほえみを含んでいるようにも見えて、生きているお母さまより、なまめかしかつた。私は、ピエタのマリヤに似ていると思つた。

六

戦鬪、開始。

いつまでも、悲しみに沈んでもおられなかった。私には、是非とも、戦いとらなければならぬものがあつた。新しい倫理。いいえ、そう言つても偽善めく。恋。それだけだ。ローザが新しい経済学にたよらなければ生きておられなかつたように、私はいま、恋一つにすぎらなければ、生きて行けないのだ。イエスが、この世の宗教家、道徳家、学者、権威者の偽善をあばき、神の真の愛情というものを少しも躡ちゆうちよ躡ちよするとところなくありのままに人々に告げあらわさんがために、その十二弟子でしをも諸方に派遣なさる

うとするに當つて、弟子たちに教え聞かせたお言葉は、私のこの場合にも全然、無関係でないように思われた。

「帯おびのなかに金きん・銀ぎんまたは銭ぜにを持つもな。旅たびの囊ふくろも、二枚にまいの下衣したぎも、鞋くつも、杖つえも持つもな。視みよ、我われなんじらを遣つかわすは、羊ひつじを豺おおかみ狼のなのなかに入いるが如ごとし。この故ゆえに蛇へびのごとく慧さとく、鵠はとのごとく素直すなおなれ。人々ひとびとに心こころせよ、それは汝なんじらを衆議所しゅうぎしょに付わたし、会堂かいどうにて鞭むちうたん。また汝なんじら等らわが故ゆえによりて、司つかさたち王おうたちの前まえに曳ひかれん。かれら汝なんじらを付わたさば、如何いかになにを言いわんと思おもい煩わづらうな、言いうべき事ことは、その時ときさずけられるべし。これ言いうものは汝なんじら等らにあらず、其その中うちにありて言いいたまう汝なんじらの父ちちの靈れいなり。又またなんじら我が名なのために凡すべての人ひとに憎にくまれん。されど終おわりまで耐たえ忍しのぶもの

は救すくわるべし。この町まちにて、責せめらるる時ときは、かの町まちに逃のがれよ。
 誠まことに汝なんじらに告つぐ、なんじらイスラエルの町まち々まちを巡めぐり尽つくさぬうち
 に人ひとの子こは来きたるべし。

身みを殺ころして靈たましい魂いをころし得えぬ者ものどもを懼おそるな、身みと靈たましい魂いと
 をゲヘナにて滅ほろし得うる者ものをおそれよ。われ地ちに平和へいわを投とうぜんため
 に来きたれりと思おもうな、平和へいわにあらず、反かえつて劍つるぎを投とうぜんため
 それ我わが来きたれるは人ひとをその父ちちより、娘むすめをその母ははより、嫁よめをその姑し
 ゆうとめより分わかたん為ためなり。人ひとの仇あだは、その家いえの者ものなるべし。我われよ
 りも父ちちまたは母ははを愛あいする者ものは、我われに相ふさ応わしからず。我われよりも息むすこ子こ
 または娘むすめを愛あいする者ものは、我われに相ふさ応わしからず。又またおのが十じ字ゆう架じかを
 とりて我われに従したがわぬ者ものは、我われに相ふさ応わしからず。生いのち命うを得もる者ものは、こ

れを失い、我がために生命を失う者は、これを得べし」

戦鬪、開始。

もし、私が恋ゆえに、イエスのこの教えをそっくりそのまま必ず守ることを誓ったら、イエスさまはお叱りになるかしら。なぜ、「恋」がわるくて、「愛」がいいのか、私にはわからない。同じもののような気がしてならない。何だかわからぬ愛のために、恋のために、その悲しさのために、身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者、ああ、私は自分こそ、それだと言ひ張りたいのだ。

叔父さまたちのお世話で、お母さまの密葬を伊豆で行い、本葬は東京ですまして、それからまた直治と私は、伊豆の山荘で、お互い顔を合せても口をきかぬような、理由のわからぬ気まずい生

活をして、直治は出版業の資本金と称して、お母さまの宝石類を全部持ち出し、東京で飲み疲れると、伊豆の山荘へ大病人のような真蒼まっさおな顔をしてふらふら帰って来て、寝て、或る時、若いダンサアふうのひとを連れて来て、さすがに直治も少し間が悪そうにしているので、

「きょう、私、東京へ行つてもいい？ お友だちのところへ、久し振りで遊びに行つてみたいの。二晩か、三晩、泊つて来ますから、あなた留守番してね。お炊事は、あのかたに、たのむといいわ」

直治の弱味にすかさず付け込み、謂いわば蛇のごとく慧く、私はバッグにお化粧品やパンなど詰め込んで、きわめて自然に、あの

ひとと逢いに上京する事が出来た。

東京郊外、省線荻窪おぎくぼ駅の北口に下車すると、そこから二十分くらいで、あのひとの大戦後の新しいお住居すまいに行き着けるらしいという事は、直治から前にそれとなく聞いていたのである。

こがらしの強く吹いている日だった。荻窪駅に降りた頃ころには、もうあたりが薄暗く、私は往来のひとをつかまえては、あのひとのところ番地を告げて、その方角を教えてもらって、一時間ちかく暗い郊外の路地をうろついて、あまり心細くて、涙が出て、そのうちに砂利道じやりみちの石につまずいて下駄の鼻緒がぷつんと切れて、どうしようかと立ちすくんで、ふと右手の二軒長屋のうちの一軒の家の表札が、夜目にも白くぼんやり浮んで、それに上原と書か

れているような気がして、片足は足袋はだしのまま、その家の玄
関に走り寄って、なおよく表札を見ると、たしかに上原二郎とし
たためられていたが、家の中は暗かった。

どうしようか、とまた瞬時立ちすくみ、それから、身を投げる
気持で、玄関の格子戸こうしどに倒れかかるようにひたと寄り添い、

「ごめん下さいまし」

と言ひ、両手の指先で格子を撫なでながら、

「上原さん」

と小声で囁ささやいてみた。

返事は、有った。しかし、それは、女のひとの声であつた。

玄関の戸が内からあいて、細おもての古風な匂いのする、私よ

り三つ四つ年上のような女のひとが、玄関の暗闇くらやみの中でちらと笑い、

「どちらさまでしようか」

とたずねるその言葉の調子には、なんの悪意も警戒も無かった。
「いいえ、あのう」

けれども私は、自分の名を言いそびれてしまった。このひとにだけは、私の恋も、奇妙にうしろめたく思われた。おどおどと、ほとんど卑屈に、

「先生は？ いらっしやいません？」

「はあ」

と答えて、気の毒そうに私の顔を見て、

「でも、行く先は、たいてい、……」

「遠くへ？」

「いいえ」

と、可笑しおかそうに片手をお口くちに当てられて、

「荻窪おぎくぼですの。駅えきの前の、白石しろいしというおでんやさんへおいでになれば、たいてい、行く先がおわかりかと思ひます」

私は飛び立つ思ひで、

「あ、そうですか」

「あら、おはきものが」

すすめられて私は、玄関の内へはいり、式台すわに坐らせてもらい、奥さまから、軽便鼻緒けいべんびしよとでもいうのかしら、鼻緒の切れた時に手

軽に繕うことの出来る革の仕掛紐しかけひもをいただいで、下駄を直して、そのあいだに奥さまは、蠟燭ろうそくをともして玄関に持つて来て下さったりしながら、

「あいにく、電球が二つとも切れてしまいました、このごろの電球は馬鹿高い上に切れ易やすくていけませんわね、主人がいると買ってもらえるんですけど、ゆうべも、おとといの晩も帰つてまいりませんので、私どもは、これで三晩、無一文の早寝ですよ」
などと、しんからのんきそうに笑つておっしゃる。奥さまのうしろには、十二、三歳の眼の大きな、めつたに人になつかないような感じのほつそりした女のお子さんが立っている。

敵。私はそう思わないけれども、しかし、この奥さまとお子さ

んは、いつかは私を敵と思つて憎む事があるに違いないのだ。それを考えたたら、私の恋も、一時にさめ果てたような気持になつて、下駄の鼻緒をすげかえ、立つてはたはたと手を打ち合せて両手のよごれを払い落しながら、わびしさが猛然と身のまわりに押し寄せて来る気配に堪えかね、お座敷に駈かけ上つて、まっくら闇の中で奥さまのお手を掴つかんで泣こうかしらと、ぐらぐら烈はげしく動揺したけれども、ふと、その後の自分のしらじらしい何とも形のつかぬ味気無い姿を考え、いやになり、

「ありがとうございます」

と、ばか町ていねい嚙ねいなお辞儀をして、外へ出て、こがらしに吹かれ、戦闘、開始、恋する、すき、こがれる、本当に恋する、本当にす

き、本当にこがれる、恋いしいのだから仕様が無い、すきな
から仕様が無い、こがれているのだから仕様が無い、あの奥さま
はたしかに珍らしくいいお方、あのお嬢さんもお綺麗きれいだ、けれど
も私は、神の審判の台に立たされたって、少しも自分をやましい
とは思わぬ、人間は、恋と革命のために生れて来たのだ、神も罰
し給たまう筈はずが無い、私はみじんも悪くない、本当にすきな
大威張り、あのひとに一目お逢いするまで、二晩でも三晩でも野
宿しても、必ず。

駅前駅前の白石というおでんやは、すぐに見つかった。けれども、
あのひとはいらつしやらない。

「阿佐ヶ谷ですよ、きつと。阿佐ヶ谷駅の北口をまっすぐにいら

して、そうですね、一丁半かな？ 金物屋さんがありますからね、そこから右へは行って、半丁かな？ 柳やという小料理屋がありますからね、先生、このごろは柳やのおステさんと大あつあつで、いりびたりだ、かなわねえ」

駅へ行き、切符を買い、東京行き和省線に乗り、阿佐ヶ谷で降りて、北口、約一丁半、金物屋さんのところから右へ曲つて半丁、柳やは、ひっそりしていた。

「たつたいまお帰りになりましたが、大勢さんで、これから西にしお荻ぎのチドリのおばさんのところへ行つて夜明しで飲むんだ、とかおつしやつていましたよ」

私よりも年が若くて、落ちついて、上品で、親切そうな、これ

があ、おステさんとかいうあのひとと大あつあつの人なのかしら。

「チドリ？ 西荻のどのへん？」

心細くて、涙が出そうになった。自分がいま、気が狂っているのではないかしら、とふと思った。

「よく存じませんのですけどね、何でも西荻の駅を降りて、南口の、左にはいったところだとか、とにかく、交番でお聞きになったら、わかるんじゃないでしょうか。何せ、一軒ではおさまらないひとで、チドリに行く前にまたどこかにひっかかっているかも知れませんかですよ」

「チドリへ行ってみます。さようなら」

また、逆もどり。阿佐ヶ谷から省線で立川行きに乗り、荻窪、西荻窪、駅の南口で降りて、こがらしに吹かれてうろつき、交番を見つけて、チドリの方角をたずねて、それから、教えられたとおりの夜道を走るようにして行って、チドリの青い燈籠とうろうを見つけて、ためらわず格子戸をあけた。

土間があつて、それからすぐ六畳間くらいの部屋があつて、たばこの煙で濛々もうもうとして、十人ばかりの人間が、部屋の大きな卓をかこんで、わあつわあつとひどく騒がしいお酒盛りをしていた。私より若いくらいのお嬢さんも三人まじつて、たばこを吸い、お酒を飲んでいた。

私は土間に立って、見渡し、見つけた。そうして、夢見るよう

な気持ちになった。ちがうのだ。六年。まるつきり、もう、違つたひとになつてゐるのだ。

これが、あの、私の虹にじ、M・C、私の生き甲斐がいの、あのひとであらうか。六年。蓬ほうはつ髪は昔のままだけれども哀れに赤茶けて薄くなつており、顔は黄色くむくんで、眼のふちが赤くただれて、前歯が抜け落ち、絶えず口をもぐもぐさせて、一匹の老猿が背中を丸くして部屋の片隅かたすみに坐つてゐる感じであつた。

お嬢さんのひとりが私を見とがめ、目で上原さんに私の来ている事を知らせた。あのひとは坐つたまま細長い首をのばして私のほうを見て、何の表情も無く、顎あごであがれという合図をした。一座は、私に何の関心も無さそうに、わいわいの大騒ぎをつづけ、

それでも少しずつ席を詰めて、上原さんのすぐ右隣りに私の席をつくつてくれた。

私は黙って坐つた。上原さんは、私のコップにお酒をなみなみといっぱい注いでくれて、それからご自分のコップにもお酒を注ぎ足して、

「乾杯」

としやがれた声で低く言った。

二つのコップが、力弱く触れ合つて、カチと悲しい音がした。

ギロチン、ギロチン、シウルシウルシユ、と誰かが言つて、それに応じてまたひとり、ギロチン、ギロチン、ギロチン、シウルシウルシユ、と言ひ、カチンと音高くコップを打ち合せてぐいと飲む。ギ

ロチン、ギロチン、シユルシユルシユ、ギロチン、ギロチン、シユルシユルシユ、とあちこちから、その出鱈目でたらめみたいな歌が起つて、さかんにコップを打ち合せて乾杯をしている。そんなふざけ切つたりズムでもつてはずみをつけて、無理にお酒を喉のどに流し込んでいる様子であつた。

「じゃ、失敬」

と言つて、よろめきながら帰るひとがあるかと思うと、また、新客がのつそりはいつて来て、上原さんにちよつと会釈しただけで、一座に割り込む。

「上原さん、あそこのね、上原さん、あそこのね、あああ、というところですがね、あれは、どんな工合ぐあいに言つたらいいんです

か？ あ、あ、あ、ですか？ ああ、あ、あ、ですか？」

と乗り出してたずねているひとは、たしかに私もその舞台顔に見覚えのある新劇俳優の藤田である。

「ああ、あ、だ。ああ、あ、チドリの酒は、安くねえ、といったような塩梅あんばいだね」

と上原さん。

「お金の事ばかり」

とお嬢さん。

「二羽すずめの雀は一銭、とは、ありや高いんですか？ 安いですか？」

と若い紳士。

「一厘も残りなく償わずば、という言葉もあるし、あるもの或者には五タラント、或者には二タラント、或者には一タラントなんて、ひどくややこしいたとえはなし譬話もあるし、キリストも勘定はなかなかこまかいんだ」

と別の紳士。

「それに、あいつあ酒飲みだったよ。妙にバイブルには酒の譬話が多いと思つていたら、果せるかなだ、視みよ、酒を好む人、と非難されたとバイブルに録しるされてある。酒を飲む人でなくて、酒を好む人というんだから、相当な飲み手だったに違いねえのさ。ま
ず、一升飲みかね」

ともうひとりの紳士。

「よせ、よせ。ああ、あ、なんじ汝らは道德におびえて、イエスをダシに使わんとす。チエちゃん、飲もう。ギロチン、ギロチン、シユルシユルシユ」

と上原さん、一ばん若くて美しいお嬢さんと、カチンと強くコップを打ち合せて、ぐつと飲んで、お酒が口角からしたり落ちて、顎が濡ぬれて、それをやけくそみたいに乱暴に掌で拭ぬぐつて、それから大きいくしやみを五つも六つも続けてなされた。

私はそつと立って、お隣りの部屋へ行き、病身らしく蒼あおしろ白く瘦やせたおかみさんに、お手洗いをたずね、また帰りにその部屋をとおると、さっきの一ばんきれいで若いチエちゃんとかいうお嬢さんが、私を待っていたような恰かっこう好で立っていて、

「おながが、おすきになりませんか？」

と親しそうに笑いながら、尋ねた。

「ええ、でも、私、パンを持ってまいりましたから」

「何もございませんけど」

と病身らしいおかみさんは、だるそうに横坐りに坐つて長火鉢に寄りかかったままで言う。

「この部屋で、お食事をなさいます。あんな呑^のんべえさんたちの相手をしていたら、一晩中なにも食べられやしません。お坐りなさい、ここへ。チエ子さんも一緒に」

「おうい、キヌちゃん、お酒が無い」

とお隣りで紳士が叫ぶ。

「はい、はい」

と返辞して、そのキヌちゃんという三十歳前後の粋いきな縞しまの着物を着た女中さんが、お銚子ちょうしをお盆に十本ばかり載せて、お勝手からあらわれる。

「ちよつと」

とおかみさんは呼びとめて、

「ここへも二本」

と笑いながら言い、

「それからね、キヌちゃん、すまないけど、裏のスズヤさんへ行つて、うどんを二つ大いそぎでね」

私とチエちゃんは長火鉢の傍そばにならんで坐つて、手をあぶつて

いた。

「お蒲団ふとんをおあてなさい。寒くなりましたね。お飲みになりませんか」

おかみさんは、ご自分のお茶のお茶碗ちやわんにお銚子のお酒をついで、それから別の二つのお茶碗にもお酒を注いだ。

そうして私たち三人は黙って飲んだ。

「みなさん、お強いよね」

とおかみさんは、なぜだか、しんみりした口調で言った。
がらがらと表の戸のあく音が聞えて、

「先生、持ってまいりました」

という若い男の声がして、

「何せ、うちの社長ったら、がっちりしていますからね、二万円と言つてねばつたのですが、やっと一万円」

「小切手か？」

と上原さんのしやがれた声。

「いいえ、現金なのですが。すみません」

「まあ、いいや、受取りを書こう」

ギロチン、ギロチン、シウルシウルシユ、の乾杯の歌が、そのあいだも一座に於おいて絶える事無くつづいている。

「直なおさんは？」

と、おかみさんは真ま面じ目めな顔をしてチエちゃんに尋ねる。私は、どきりとした。

「知らないわ。直さんの番人じゃあるまいし」

と、チエちゃんは、うろたえて、顔を可憐かれんに赤くなさった。

「この頃、何か上原さんと、まずい事でもあったんじゃないの？
いつも、必ず、一緒だったのに」

とおかみさんは、落ちついて言う。

「ダンスのほうが、すきになったんですって。ダンサーの恋人でも出来たんでしょうよ」

「直さんたら、まあ、お酒の上にまた女だから、始末が悪いね」

「先生のお仕込みですもの」

「でも、直さんのほうが、たちが悪いよ。あんなお坊ぼっちゃんくず
れは、……」

「あの」

私は微笑ほほえんで口をはさんだ。黙っているのは、かえってこのお二人に失礼なことになりそうだと思ったのだ。

「私、直治の姉なんですの」

おかみさんは驚いたらしく、私の顔を見直したが、チエちゃん
は平気で、

「お顔がよく似ていらつしやいますもの。あの土間の暗いところ
にお立ちになっていたのを見て、私、はっと思ったわ。直さんか
と」

「左様でございますか」

とおかみさんは語調を改めて、

「こんなむさくるしいところへ、よくまあ。それで？ あのと、上原さんとは、前から？」

「ええ、六年前にお逢いして、……」

言い^{よど}澱み、うつむき、涙が出そうになった。

「お待ちどおさま」

女中さんが、おうどんを持って来た。

「召し上れ。熱いうちに」

とおかみさんはすすめる。

「いただきます」

おうどんの湯気に顔をつつ込み、するするとおうどんを^{すす}啜って、私は、いまこそ生きている事の^わ侘びしさの、極限を味わっている

ような気がした。

ギロチン、ギロチン、シウルシウルシユ、ギロチン、ギロチン、シウルシウルシユ、と低く口ずさみながら、上原さんが私たちの部屋にはいつて来て、私の傍にどかりとあぐらをかき、無言でおかみさんに大きい封筒を手渡した。

「これだけで、あとをごまかしちゃだめですよ」

おかみさんは、封筒の中を見もせず、それを長火鉢の引出しに仕舞い込んで笑いながら言う。

「持つて来るよ。あとの支払いは、来年だ」

「あんな事を」

一万円。それだけあれば、電球がいくつ買えるだろう。私だっ

て、それだけあれば、一年らくに暮せるのだ。

ああ、何かこの人たちは、間違っている。しかし、この人たちも、私の恋の場合と同じ様に、こうでもしなければ、生きて行かないのかも知れない。人はこの世の中に生れて来た以上は、どうしても生き切らなければいけないものならば、この人たちのこの生き切るための姿も、憎むべきではないかも知れぬ。生きている事。生きている事。ああ、それは、何というやりきれない息もたえだえの大事業であらうか。

「とにかくね」

と隣室の紳士がおっしゃる。

「これから東京で生活して行くにはだね、コンチワア、という軽

薄きわまる^{あいさつ}挨拶が平気で出来るようでなければ、とても駄目^{だめ}だね。いまのわれらに、重厚だの、誠実だの、そんな美德を要求するのは、首くくりの足を引っぱるようなものだ。重厚？ 誠実？ ペツ、プツだ。生きて行けやしねえじゃないか。もしもだね、コンチワアを軽く言えなかったら、あとは、道が三つしか無いんだ、一つは帰農だ、一つは自殺、もう一つは女のヒモさ」

「その一つも出来やしねえ^{かわいそう}可哀想な野郎には、せめて最後の唯一の手段」

と別な紳士が、

「上原二郎にたかつて、痛飲」

ギロチン、ギロチン、シウルシウルシユ、ギロチン、ギロチン、

シウルシウルシユ。

「泊るところが、ねえんだろ」

と、上原さんは、低い声でひとりごとのおっしやった。

「私？」

私は自身に鎌かまくび首をもたげた蛇へびを意識した。敵意。それにちか
い感情で、私は自分のからだを固くしたのである。

「ざこ寝が出来るか。寒いぜ」

上原さんは、私の怒りに頓とんちやく着つぶやなく眩くらく。

「無理でしょう」

とおかみさんは、口をはさみ、

「お可哀そうよ」

ちえつ、と上原さんは舌打ちして、

「そんなら、こんなところへ来なければいいんだ」

私は黙っていた。このひとは、たしかに、私のあの手紙を読んだ。そうして、誰よりも私を愛している、と、私はそのひとの言葉の雰^{ふん}囲^{いき}気から素早く察した。

「仕様がねえな。福井さんのとこへでも、たのんでみようかな。チエちゃん、連れて行ってくれないか。いや、女だけだと、途中が危険か。やっかいだな。かあさん、このひとはきものを、こつそりお勝手のほうに廻^{まわ}して置いてくれ。僕が送りとどけて来るから」

外は深夜の気配だった。風はいくぶんおさまり、空にいつぱい

星が光っていた。私たちは、ならんで歩きながら、

「私、ざこ寝でも何でも、出来ますのに」

上原さんは、眠そうな声で、

「うん」

とだけ言った。

「二人つきりに、なりたかったのでしよう。そうでしょう」

私がそう言つて笑つたら、上原さんは、

「これだから、いやさ」

と口をまげて、にが笑いなさつた。私は自分がとても可愛がられてゐる事を、身にしみて意識した。

「ずいぶん、お酒を召し上りますのね。毎晩ですか？」

「そう、毎日。朝からだ」

「おいしいの？ お酒が」

「まずいよ」

そう言う上原さんの声に、私はなぜだか、ぞっとした。

「お仕事は？」

「駄目です。何を書いても、ばかばかしくって、そうして、ただもう、悲しくって仕様が無いんだ。いのちの黄昏^{たそがれ}。芸術の黄昏。人類の黄昏。それも、キザだね」

「ユトリロ」

私は、ほとんど無意識にそれを言った。

「ああ、ユトリロ。まだ生きていやがるらしいね。アルコールの

亡者^{もうじゃ}。死骸^{しがい}だね。最近十年間のあいつの絵は、へんに俗っぽくて、みな駄目」

「ユトリロだけじゃないんでしよう？ 他の^{ほか}マイスターたちも全

部、……」

「そう、衰弱。しかし、新しい芽も、芽のまままで衰弱しているのです。霜。フロスト。世界中に時ならぬ霜が降りたみたいなので」

上原さんは私の肩を軽く抱いて、私のからだは上原さんの二重廻しの袖^{そで}で包まれたような形になったが、私は拒否せず、かえってぴったり寄りそってゆっくり歩いた。

路傍の樹木の枝。葉の一枚も附^ついていない枝、ほそく鋭く夜空

を突き刺していて、

「木の枝つて、美しいものですわねえ」

と思わずひとりごとのように言ったら、

「うん、花と真黒い枝の調和が」

と少しうろたえたようにしておっしゃった。

「いいえ、私、花も葉も芽も、何もついていない、こんな枝がすき。これでも、ちゃんと生きているのでしよう。枯枝とちがいますわ」

「自然だけは、衰弱せずか」

そう言つて、また烈はげしくしゃみをいくつもいくつも続けてな

さつた。

「お風邪じゃございませんの？」

「いや、いや、さにあらず。実はね、これは僕の奇癖でね、お酒の酔いが飽和点に達すると、たちまちこんな工合ぐあいのくしやみが出るんです。酔いのバロメーターみたいなものだね」

「恋は？」

「え？」

「どなたかございますの？ 飽和点くらいにすすんでいるお方が」

「なんだ、ひやかしちやいけない。女は、みな同じさ。ややこしくていけないえ。ギロチン、ギロチン、シユルシユルシユ、実は、ひとり、いや、半人くらいある」

「私の手紙、ごらんになつて？」

「見た」

「ご返事は？」

「僕は貴族は、きらいなんだ。どうしても、どこかに、鼻持ちぢらない傲^{ごうまん}慢なところがある。あなたの弟の直さんも、貴族としては、大出来の男なんだが、時々、ふつと、とても付き合い切れぬ小生意気なところを見せる。僕は田舎の百姓の息子でね、こんな小川の傍をとおると必ず、子供のころ、故郷の小川で鮒^{ふな}を釣った事や、めだかを掬^{すく}った事を思い出してたまらない気持になる」

暗闇^{くらやみ}の底で幽^{かす}かに音立てて流れている小川に、沿^{みち}った路を私

たちは歩いていた。

「けれども、君たち貴族は、そんな僕たちの感傷を絶対に理解で

きないばかりか、軽蔑けいべつしている。」

「ツルゲーネフは？」

「あいつは貴族だ。だからいやなんだ」

「でも、獵人日記、……」

「うん、あれだけは、ちよつとうまいね」

「あれは、農村生活の感傷、……」

「あの野郎は田舎貴族、というところで妥協しようか」

「私もいまでは田舎者ですわ。畑を作っていますのよ。田舎の貧乏人」

「今でも、僕をすきなのかい」

乱暴な口調であつた。

「僕の赤ちゃんが欲しいのかい」

私は答えなかった。

岩が落ちて来るような勢いでそのひとの顔が近づき、しやにむに遮二無二私はキスされた。せいよく性慾のにおいのするキスだった。私はそれを受けながら、涙を流した。屈辱の、くやし涙に似ているにがい涙であった。涙はいくらでも眼からあふれ出て、流れた。

また、二人ならんで歩きながら、

「しくじった。ほ惚れちやった」

とそのひとは言つて、笑つた。

けれども、私は笑う事が出来なかった。まゆ眉をひそめて、口をすぼめた。

仕方が無い。

言葉で言いあらわすなら、そんな感じのものだった。私は自分が下駄げたを引きずってすさんだ歩き方をしているのに気がついた。

「しくじった」

とその男は、また言った。

「行くところまで行くか」

「キザですわ」

「この野郎」

上原さんは私の肩をとんとこぶしで叩たたいて、また大きいくしやみをなさった。

福井さんとかいうお方のお宅では、みなさんがもうおやすみに

なっていていらつしやる様子であつた。

「電報、電報。福井さん、電報ですよ」

と大声で言つて、上原さんは玄関の戸をたたいた。

「上原か？」

と家の中で男のひとの声がした。

「そのとおり。プリンスとプリンセスと一夜の宿をたのみに来たのだ。どうもこう寒いと、くしやみばかり出て、せつかくの恋の道行みちゆきもコメデイになつてしまふ」

玄関の戸が内からひらかれた。もうかなりの、五十歳を越したくらいの、頭の禿はげた小柄こがらなおじさんが、派手なパジャマを着て、へんな、はにかむような笑顔で私たちを迎えた。

「たのむ」

と上原さんは一こと言つて、マントも脱がずにさっさと家の中へはいつて、

「アトリエは、寒くていけねえ。二階を借りるぜ。おいで」

私の手をとつて、廊下をとおり突き当りの階段をのぼつて、暗いお座敷にはいり、部屋の隅すみのスイッチをパチとひねつた。

「お料理屋のお部屋みたいね」

「うん、成金趣味さ。でも、あんなへボ画えかきにはもつたいたない。悪運が強くりさいて罹災りさいも、しやがらねえ。利用せざるべからずさ。さあ、寝よう、寝よう」

ご自分のお家みたいに、勝手に押入れをあけてお蒲団ふとんを出して

敷いて、

「ここへ寝給え。ねたま。僕は帰る。あしたの朝、迎えに来ます。便所は、階段を降りて、すぐ右だ」

だだだだと階段からころげ落ちるように騒々しく下へ降りて行って、それつきり、しんとなった。

私はまたスイッチをひねって、電燈を消し、お父上の外国土産の生地で作ったビロードのコートを脱ぎ、帯だけほどこいて着物のままでお床へはいった。疲れている上に、お酒を飲んだせいからだがだるく、すぐにうとうととまどろんだ。

いつのまにか、あのひとが私の傍に寝ていらして、……私は一時間ちかく、必死の無言の抵抗をした。

ふと可哀そうになって、放棄した。

「こうしなければ、ご安心が出来ないのでしょう?」

「まあ、そんなところだ」

「あなた、おからだを悪くしていらっしやるんじゃない?

喀かっけ

血っなさったでしょう」

「どうしてわかるの? 実はこないだ、かなりひどいのをやったのだけど、誰にも知らせていないんだ」

「お母さまのお亡くなりになる前と、おんなじ匂においがするんですもの」

「死ぬ気で飲んでいるんだ。生きているのが、悲しくて仕様が無いんだよ。わびしさだの、淋しさだの、そんなゆとりのあるもの

でなくて、悲しいんだ。陰気くさい、嘆きの溜息ためいきが四方の壁から聞えている時、自分たちだけの幸福なんてある筈はずは無いじゃないか。自分の幸福も光栄も、生きているうちには決して無いとわかった時、ひとは、どんな気持になるものかね。努力。そんなものは、ただ、飢餓の野獣の餌食えじきになるだけだ。みじめな人が多すぎるよ。キザかね」

「いいえ」

「恋だけだね。おめえの手紙のお説のとおりだよ」

「そう」

私のその恋は、消えていた。

夜が明けた。

部屋が薄明るくなつて、私は、傍で眠っているそのひとの寝顔をつくづく眺めた。^{なが}ちかく死ぬひとのような顔をしていた。疲れはてているお顔だった。

犠牲者の顔。貴い犠牲者。

私のひと。私の虹。^{にじ}マイ、チャイルド。にくいひと。ずるいひと。

この世にまたと無いくらいに、とても、とても美しい顔のように思われ、恋があらたによみがえつて来たようで胸がときめき、そのひとの髪を撫でながら、私のほうからキスをした。

かなしい、かなしい恋の成就。^{じょうじゆ}

上原さんは、眼をつぶりながら私をお抱きになつて、

「ひがんでいたのさ。僕は百姓の子だから」

もうこのひとから離れまい。

「私、いま幸福よ。四方の壁から嘆きの声が聞えて来ても、私のいまの幸福感は、飽和点よ。くしゃみが出るくらい幸福だわ」

上原さんは、ふふ、とお笑いになって、

「でも、もう、おそいなあ。黄昏だ」

「朝ですわ」

弟の直治は、その朝に自殺していた。

七

直治の遺書。

姉さん。

だめだ。さきに行くよ。

僕は自分^{ほく}がなぜ生きていなければならないのか、それが全然わからないのです。

生きていたい人だけは、生きるがよい。

人間には生きる権利があると同様に、死ぬる権利もある筈です。僕のこんな考え方は、少しも新しいものでも何でも無く、こんな当り前の、それこそプリミチヴな事を、ひとはへんにこわがって、あからさまに口に出して言わないだけなんです。

生きて行きたいひとは、どんな事をして、必ず強く生き抜くべきであり、それは見事で、人間の栄冠とでもいうものも、きつとその辺にあるのでしようが、しかし、死ぬことだって、罪では無いと思うんです。

僕は、僕という草は、この世の空気と陽ひの中に、生きにくいんです。生きて行くのに、どこか一つ欠けているんです。足りないんです。いままで、生きて来たのも、これでも、精一ぱいだったのです。

僕は高等学校へは行って、僕の育つて来た階級と全くちがう階級に育つて来た強くたくましい草の友人と、はじめて附つき合い、その勢いに押され、負けまいとして、麻薬を用い、半狂乱になっ

て抵抗しました。それから兵隊になつて、やはりそこでも、生きる最後の手段として阿片アヘンを用いました。姉さんには僕のこんな氣持、わからねえだろうな。

僕は下品になりたかつた。強く、いや強暴になりたかつた。そうして、それが、所謂いわゆる民衆の友になり得る唯一ゆいいつの道だと思つたのです。お酒くらいでは、とても駄目だつたんです。いつも、くらくら目まいをしていなければならなかつたんです。そのためには、麻薬以外になかつたのです。僕は、家を忘れなければならぬ。父の血に反抗しなければならぬ。母の優しさを、拒否しなければならぬ。姉に冷たくしなければならぬ。そうでなければ、あの民衆の部屋にはいる入場券が得られないと思つていた

んです。

僕は下品になりました。下品な言葉づかいをするようになりました。けれども、それは半分は、いや、六十パーセントは、哀れな付け焼刃でした。へたな小細工でした。民衆にとって、僕はやはり、キザつたらしく乙おっにすました気づまりの男でした。彼等は僕と、しんから打ち解けて遊んでくれはしないのです。しかし、また、いまさら捨てたサロンに帰ることも出来ません。いまでは僕の下品は、たとい六十パーセントは人工の付け焼刃でも、しかし、あとの四十パーセントは、ほんもの下品になっているのです。僕はあの、所謂上流サロンの鼻持ちならないお上品さには、ゲロが出そうで、一刻も我慢できなくなっていますし、また、あ

のおえらがたとか、お歴々とか称せられている人たちも、僕のお行儀の悪さに呆あきれてすぐさま放逐するでしょう。捨てた世界に帰ることも出来ず、民衆からは悪意に満ちたクソていねいの傍聴席を与えられているだけなんです。

いつの世でも、僕のような謂いわば生活力が弱くて、欠陥のある草は、思想もクソも無いただおのずから消滅するだけの運命のものなのかも知れませんが、しかし、僕にも、少しは言いぶんがあるのです。とても僕には生きにくい、事情を感じているんです。

人間は、みな、同じものだ。

これは、いつたい、思想でしようか。僕はこの不思議な言葉を発明したひとは、宗教家でも哲学者でも芸術家でも無いように思

います。民衆の酒場からわいて出た言葉です。蛆うじがわくように、いつのまにやら、誰が言い出したともなく、もくもく湧わいて出て、全世界を覆おおい、世界を気まずいものにしました。

この不思議な言葉は、民主々義とも、またマルキシズムとも、全然無関係のものなのです。それは、かならず、酒場に於おいて醜ぶ男おとこが美男子に向つて投げつけた言葉です。ただの、イライラです。嫉妬しつとです。思想でも何でも、ありやしないんです。

けれども、その酒場のやきもちの怒声が、へんに思想めいた顔つきをして民衆のあいだを練り歩き、民主々義ともマルキシズムとも全然、無関係の言葉の筈なのに、いつのまにやら、その政治思想や経済思想にからみつき、奇妙に下劣なあんばいにしてしま

ったのです。メフィストだって、こんな無茶な放言を、思想とすりかえるなんて芸当は、さすがに良心に恥じて、
躊躇ちゆうちよしたかも知れませんか。

人間は、みな、同じものだ。

なんという卑屈な言葉であろう。人をいやしめると同時に、みずからをもちやしめ、何のプライドも無く、あらゆる努力を放棄せしめるような言葉。マルキシズムは、働く者の優位を主張する。同じものだ、などとは言わぬ。民主々義は、個人の尊厳を主張する。同じものだ、などとは言わぬ。ただ、牛太郎だけがそれを言う。「へへ、いくら気取ったって、同じ人間じゃねえか」

なぜ、同じだと言うのか。優すぐれている、と言えないのか。奴隷どれい

根性の復讐ふくしゅう。

けれども、この言葉は、実に猥わいせつで、不気味で、ひとは互いにおびえ、あらゆる思想が姦かんせられ、努力は嘲ちようしやう笑せられ、幸福は否定せられ、美貌びぼうはけがされ、栄光は引きずりおろされ、所謂「世紀の不安」は、この不思議な一語からはっしていると思つてゐるんです。

イヤな言葉だと思ひながら、僕もやはりこの言葉に脅迫せられ、おびえて震えて、何を仕様としてもてれくさく、絶えず不安で、ドキドキして身の置きどころが無く、いっそ酒や麻薬の目まいに依よつて、つかのまの落ちつきを得たくて、そうして、めちやくちやになりました。

弱いのでしよう。どこか一つ重大な欠陥のある草なのでしよう。また、何かとそんな小理窟こりくつを並べたつて、なあに、もともと遊びが好きなのさ、なまけ者の、助平の、身勝手な快樂児なのさ、とれいの牛太郎がせせら笑つて言うかも知れません。そうして、僕はそう言われても、いままでは、ただで来て、あいまいに首肯していましたが、しかし、僕も死ぬに当つて、一言、抗議めいた事を言つて置きたい。

姉さん。

信じて下さい。

僕は、遊んでも少しも楽しくなかつたのです。快樂のイムポテンツなのかも知れません。僕はただ、貴族という自身の影法師か

ら離れたくて、狂い、遊び、荒^{すさ}んでいました。

姉さん。

いったい、僕たちに罪があるのでしようか。貴族に生れたのは、僕たちの罪でしようか。ただ、その家に生れただけに、僕たちは、永遠に、たとえばユダの身内の者みたいに、恐縮し、謝罪し、はにかんで生きていなければならない。

僕は、もっと早く死ぬべきだった。しかし、たった一つ、ママの愛情。それを思うと、死ねなかった。人間は、自由に生きる権利を持っていると同時に、いつでも勝手に死ねる権利も持っているのだけれども、しかし、「母」の生きているあいだは、その死の権利は留保されなければならぬと僕は考えているんです。そ

れは同時に、「母」をも殺してしまう事になるのですから。

いまはもう、僕が死んでも、からだを悪くするほど悲しむひともいないし、いいえ、姉さん、僕は知っているんです、僕を失ったあなたたちの悲しみはどの程度のものだか、いいえ、虚飾の感傷はよしませう、あなたたちは、僕の死を知ったら、きつとお泣きになるでしょうが、しかし、僕の生きている苦しみと、そうしてそのイヤな生ヴイから完全に解放される僕よろこびを思ってみて下さったら、あなたたちのその悲しみは、次第に打ち消されて行く事と存じます。

僕の自殺を非難し、あくまでも生き伸びるべきであった、と僕になんの助力も与えず口先だけで、したり顔に批判するひとは、

陛下に菓物屋くだものやをおひらきなさるよう平気でおすすめ出来るほどの大偉人にちがいございません。

姉さん。

僕は、死んだほうがいいんです。僕には、所謂、生活能力が無いんです。お金の事で、人と争う力が無いんです。僕は、人にたかる事さえ出来ないんです。上原さんと遊んでも、僕のぶんのお勘定は、いつも僕が払って来ました。上原さんは、それを貴族のケチくさいプライドだと言って、とてもいやがっていました、しかし、僕は、プライドで支払うのではなくて、上原さんのお仕事で得たお金で、僕がつまらなく飲み食いして、女を抱くなど、おそろしくて、とても出来ないのです。上原さんのお仕事を尊敬

しているから、と簡単に言い切ってしまったも、ウソで、僕にも本当は、はつきりわかっていないんです。ただ、ひとのごちそうになるのが、そらおそろしいんです。殊ことにも、そのひとご自身の腕一本で得たお金で、ごちそうになるのは、つらくて、心苦しくて、たまらないんです。

そうしてただもう、自分の家からお金や品物を持ち出して、ママやあなたを悲しませ、僕自身も、少しも楽しくなく、出版業など計画したのも、ただ、てれかくしのお体裁で、実はちっとも本気で無かったのです。本気でやってみたところで、ひとのごちそうにさえなれないような男が、金もうけなんて、とてもとても出来やしないのは、いくら僕が愚かでも、それくらいの事には気附

いています。

姉さん。

僕たちは、貧乏になってしまいました。生きて在るうちは、ひとにごちそうしたいと思つていたのに、もう、ひとのごちそうにならなければ生きて行けなくなりました。

姉さん。

この上、僕は、なぜ生きていなければならねえのかね？　もう、だめなんだ。僕は、死にます。らくに死ぬる薬があるんです。兵隊の時に、手にいれて置いたのです。

姉さんは美しく、（僕は美しい母と姉を誇りにしていました）

そうして、賢明だから、僕は姉さんの事に就いては、なんにも心

配していませぬ。心配などする資格さえ僕には有りません。どろぼうが被害者の身の上を思いやるみたいなもの、赤面するばかりです。きっと姉さんは、結婚なさって、子供が出来て、夫にたよって生き抜いて行くのではないかと僕は、思っているんです。

姉さん。

僕に、一つ、秘密があるんです。

永いこと、秘めに秘めて、戦地にいても、そのひとの事を思いつめて、そのひとの夢を見て、目がさめて、泣きべそをかけた事も幾度あつたか知れませぬ。

そのひとの名は、とても誰にも、口がくさつても言われないんです。僕は、いま死ぬのだから、せめて、姉さんにだけでも、は

つきり言つて置こうか、と思いましたが、やっぱり、どうにもおそろしくて、その名を言うことが出来ません。

でも、僕は、その秘密を、絶対秘密のまま、とうとうこの世で誰にも打ち明けず、胸の奥に蔵して死んだならば、僕のからだは火葬にされても、胸の裏だけが生臭く焼け残るような気がして、不安でたまらないので、姉さんにだけ、遠まわしに、ぼんやり、フィクションみたいにして教えて置きます。フィクション、といっても、しかし、姉さんは、きっとすぐその相手のひとは誰だかお気付きになる筈です。フィクションというよりは、ただ、仮名を用いる程度のごまかしなのですから。

姉さんは、ご存じかな？

姉さんはそのひとをご存じの筈ですが、しかし、おそらく、逢った事は無いでしょう。そのひとは、姉さんよりも、少し年上です。一重ひとえまぶた瞼で、目尻めじりが吊つり上つて、髪にパーマネントなどかけた事が無く、いつも強く、ひつつめ髪、とでもいうのかしら、そんな地味な髪形で、そうして、とても貧しい服装で、けれどもだらしないかつこう恰好ではなくて、いつもきちんと着付けて、清潔です。そのひとは、戦後あたらしいタッチの画をつぎつぎと発表して急に有名になった或る中年の洋画家の奥さんで、その洋画家の行いは、たいへん乱暴ですさんだものなのに、その奥さんは平氣を装つて、いつも優しくほほえ微笑んで暮しているのです。

僕は立ち上つて、

「それでは、おいとま致します」

そのひとも立ち上つて、何の警戒も無く、僕の傍に歩み寄つて、僕の顔を見上げ、

「なぜ？」

と普通の音声で言い、本当に不審のように少し小首をかしげて、しばらく僕の眼を見つづけていました。そうして、そのひとの眼に、何の邪心も虚飾も無く、僕は女のひとと視線が合えば、うろたえて視線をはずしてしまふたちなのですが、その時だけは、みじんも含羞はにかみを感じないで、二人の顔が一尺くらいの間隔で、六十秒もそれ以上もとてもいい気持で、そのひとの瞳ひとみを見つめて、それからつい微笑んでしまつて、

「でも、……」

「すぐ帰りますわよ」

と、やはり、まじめな顔をして言います。

正直、とは、こんな感じの表情を言うのではないかしら、とふ
と思いました。それは修身教科書くさい、いかめしい徳ではなく
て、正直という言葉で表現せられた本来の徳は、こんな可愛らし
いものではなかったのかしら、と考えました。

「またまいります」

「そう」

はじめから終りまで、すべてみな何でもない会話です。僕が、
或る夏の日の午後、その洋画家のアパートをたずねて行って、洋

画家は不在で、けれどもすぐ帰る筈ですから、おあがりになつてお待ちになつたら？　という奥さんの言葉に従つて、部屋にあがつて、三十分ばかり雑誌など読んで、帰つて来そうも無かつたら、立ち上つて、おいとました、それだけの事だったので、僕は、その日のその時の、そのひとの瞳に、くるしい恋をしちやつたのです。

高貴、とでも言つたらいいのかしら。僕の周囲の貴族の中には、ママはとにかく、あんな無警戒な「正直」な眼の表情の出来る人は、ひとりもいなかつた事だけは断言できます。

それから僕は、或る冬の夕方、そのひとのプロファイルに打たれた事があります。やはり、その洋画家のアップで、洋画家の相

手をさせられて、炬燵こたつにはいつて朝から酒を飲み、洋画家と共に、日本の所いわゆる謂文化人たちをクソミソに言い合つて笑いころげ、やがて洋画家は倒れて大おお 軒いびきをかいて眠り、僕も横になつてうとうとしていたら、ふわと毛布がかかり、僕は薄目をあけて見たら、東京の冬の夕空は水色に澄んで、奥さんはお嬢さんを抱いてアパートの窓縁に、何事も無さそうにして腰をかけ、奥さんの端正なプロフィールが、水色の遠い夕空をバックにして、あのルネッサンスの頃のプロフィールの画のようにあざやかに輪郭が区切られ浮んで、僕にそつと毛布をかけて下さった親切は、それは何の色気でも無く、慾よくでも無く、ああ、ヒユウマニテイという言葉はこんな時にこそ使用されて蘇生そせいする言葉なのではなからうか、ひとの当

然の侘^わびしい思いやりとして、ほとんど無意識みたいになされたもののように、絵とそっくりの静かな気配で、遠くを眺^{なが}めていらつしやつた。

僕は眼をつぶつて、こいしく、こがれて狂うような気持ちになり、^{まぶた}瞼の裏から涙があふれ出て、毛布を頭から引かぶつてしまいました。

姉さん。

僕がその洋画家のところ遊びに行つたのは、それは、さいしよはその洋画家の作品の特異なタッチと、その底に秘められた熱狂的なパッションに、酔わされたせいでありましたが、しかし、^{でたらめ}付き合ひの深くなるにつれて、そのひとの無教養、出鱈目、きた

ならしさに興覚めて、そうして、それと反比例して、そのひとの奥さんの心情の美しさにひかれ、いいえ、正しい愛情のひとがこいしくて、したわしくて、奥さんの姿を一目見たくて、あの洋画家の家へ遊びに行くようになりました。

あの洋画家の作品に、多少でも、芸術の高貴なおい、とでもいったようなものが現れているとすれば、それは、奥さんの優しい心の反映ではなからうかとさえ、僕はいまでは考えているんです。

その洋画家は、僕はいまこそ、感じたままをはつきり言いますが、ただ大酒飲みで遊び好きの、巧妙な商人なのです。遊ぶ金がほしさに、ただ出鱈目にカンヴァスに絵具をぬたくって、流行の

勢いに乗り、もったい振ぶって高く売っているのです。あのひとの持っているのは、田舎者の凶ずうずう々しき、馬鹿ばかな自信、ずるい商才、それだけなんです。

おそらくあのひとは、他のひとの絵は、外国人の絵でも日本人の絵でも、なんにもわかっていないでしょう。おまけに、自分の画えいている絵も、何の事やらご自身わかっていないでしょう。ただ遊興のための金がほしさに、無我夢中で絵具をカンヴァスにぬたくっているだけなんです。

そうして、さらに驚くべき事は、あのひとはご自身のそんな出鱈目に、何の疑いも、羞恥しゆうちも、恐怖も、お持ちになっていないらしいという事です。

ただもう、お得意なんです。何せ、自分で画いた絵が自分だからぬというひとなのですから、他人の仕事のよさなどわかる筈が無く、いやもう、けなす事、けなす事。

つまり、あのひとのデカダン生活は、口では何のかのと苦しうな事を言っていますけれども、その実は、馬鹿な田舎者が、かねてあこがれの都に出て、かれ自身にも意外なくらいの成功をしたので有頂天になって遊びまわっているだけなんです。

いつか僕が、

「友人がみな怠けて遊んでいる時、自分ひとりだけ勉強するのは、てれくさくて、おそろしくて、とてもだめだから、ちつとも遊びたくなくても、自分も仲間入りして遊ぶ」

と言つたら、その中年の洋画家は、

「へえ？　それが貴族氣質かたぎというものかね、いやらしい。僕は、ひとが遊んでいるのを見ると、自分も遊ばなければ、損だ、と思つて大いに遊ぶね」

と答えて平然たるものでしたが、僕はその時、その洋画家を、しんから軽蔑けいべつしました。このひとの放埒ほうらつには苦惱が無い。むしろ、馬鹿遊びを自慢にしている。ほんものの阿呆あほうの快樂児。

けれども、この洋画家の悪口を、この上さまさまに述べ立てても、姉さんには関係の無い事ですし、また僕もいま死ぬるに當つて、やはりあのひととの永いつき合いを思い、なつかしく、もう一度逢あつて遊びたい衝動をこそ感じますが、憎い気はちつとも無

いのですし、あのひとだって淋しがりの、とてもいいところをたくさん持っているひとなのですから、もう何も言いません。

ただ、僕は姉さんに、僕がそのひとの奥さんにこがれて、うろうろして、つらかったという事だけを知っていたいただいたらいいのです。だから、姉さんはそれを知っても、別段、誰かにその事を訴え、弟の生前の思いをとげさせてやるとか何とか、そんなキザなおせっかいなどなさる必要は絶対に無いのですし、姉さんおひとりだけが知って、そうして、こっそり、ああ、そうか、と思つて下さったらそれでいいんです。なおまた慾を言えば、こんな僕の恥ずかしい告白に依よつて、せめて姉さんだけでも、僕のこれまでの生命いのちの苦しさを、さらに深くわかつて下さったら、とても僕

は、うれしく思います。

僕はいつか、奥さんと、手を握り合つた夢を見ました。そうして奥さんも、やはりずっと以前から僕を好きだったのだという事を知り、夢から醒^さめても、僕の手ひらに奥さんの指のあたたかさが残っていて、僕はもう、これだけで満足して、あきらめなければなるまいと思ひました。道德がおそろしかつたのではなく、僕にはあの半氣違ひの、いや、ほとんど狂人と言つてもいいあの洋画家が、おそろしくてならないのでした。あきらめようと思ひ、胸の火をほかへ向けようとして、手当り次第、さすがのあの洋画家も或^ある夜しかめつらをしたくらいひどく、滅^め茶^ち苦^く茶^ちにいろんな女と遊び狂いました。何とかして、奥さんの幻から離れ、忘れ、

なんでもなくなりたかつたんです。けれども、だめ。僕は、結局、ひとりの女にしか、恋の出来ないたちの男なんです。僕は、はっきり言えます。僕は、奥さんの他の^{ほか}の女友達を、いちどでも、美しいとか、いじらしいとか感じた事が無いんです。

姉さん。

死ぬ前に、たった一度だけ書かせて下さい。

……スガちゃん。

その奥さんの名前です。

僕がきのう、ちつとも好きでもないダンサア（この女には、本質的な馬鹿なところがあります）それを連れて、山荘へ来たのは、けれども、まさかけさ死のうと思って、やって来たのではなかつ

たのです。いつか、近いうちに必ず死ぬ気でいたのですが、でも、きのう、女を連れて山荘へ来たのは、女に旅行をせがまれ、僕も東京で遊ぶのに疲れて、この馬鹿な女と二、三日、山荘で休むのもわるくないと考え、姉さんには少し工合ぐあいが悪かったけど、とにかくここへ一緒にやって来てみたら、姉さんは東京のお友達のところへ出掛け、その時ふと、僕は死ぬなら今だ、と思ったのです。

僕は昔から、西片町のあの家の奥の座敷で死にたいと思っていました。街路や原っぱで死んで、弥次馬やじうまたちに死骸しかいをいじくり廻されるのは、何としても、いやだったんです。けれども、西片町のあの家は人手に渡り、いまではやはりこの山荘で死ぬよりほか

は無かろうと思つていたのですが、でも、僕の自殺をさいしよに
発見するのは姉さんで、そうして姉さんは、その時どんなに驚きよう
愕がくし恐怖するだろうと思えば、姉さんと二人きりの夜に自殺す
るのは気が重くて、とても出来そうも無かつたのです。

それが、まあ、何というチャンス。姉さんがいなくて、そのか
わり、頗る鈍物すこぶのダンサアが、僕の自殺の発見者になつてくれる。
昨夜、ふたりでお酒を飲み、女のひとを二階の洋間に寝かせ、
僕ひとりママの亡くなった下のお座敷に蒲団ふとんをひいて、そうして、
このみじめな手記にとりかかりました。

姉さん。

僕には、希望の地盤が無いんです。さようなら。

結局、僕の死は、自然死です。人は、思想だけでは、死ねるものではないんですから。

それから、一つ、とともてれくさいお願いがあります。ママのかたみの麻の着物。あれを姉さんが、直治が来年の夏に着るようにと縫い直して下さったでしょう。あの着物を、僕の棺に入れて下さい。僕、着たかったんです。

夜が明けて来ました。永いこと苦労をおかけしました。さようなら。

ゆうべのお酒の酔いは、すっかり醒めています。僕は、素面しらふで死ぬんです。

もういちど、さようなら。

姉さん。

僕は、貴族です。

八

ゆめ。

皆が、私から離れて行く。

直治の死のあと始末をして、それから一箇月間、私は冬の山荘にひとり住んでいた。

そうして私は、あのひとに、おそらくはこれが最後の手紙を、水のような気持で、書いて差し上げた。

どうやら、あなたも、私をお捨てになつたようでございます。いいえ、だんだんお忘れになるらしゅうございます。

けれども、私は、幸福なんですの。私の望みどおりに、赤ちやんが出来たようでございますの。私は、いま、いつさいを失つたような気がしていますけど、でも、おなかの小さい生命が、私の孤独の微笑のたねになっています。

けがらわしい失策などとは、どうしても私には思われません。この世の中に、戦争だの平和だの貿易だの組合だの政治だのがあるのは、なんのためだか、このごろ私にもわかつて来ました。あなたは、ご存じないでしょう。だから、いつまでも不幸なのです

わ。それはね、教えてあげますわ、女がよい子を生むためです。

私には、はじめからあなたの人格とか責任とかをあてにする気持はありませんでした。私のひとすじの恋の冒険の成じょうじゆ就じゆだけが問題でした。そうして、私のその思いが完成せられて、もういまでは私の胸のうちは、森の中の沼のように静かでございます。

私は、勝ったと思っています。

マリヤが、たとい夫の子でない子を生んでも、マリヤに輝く誇りがあったら、それは聖母子になるのでございます。

私には、古い道徳を平気で無視して、よい子を得たという満足があるのです。

あなたは、その後もやはり、ギロチンギロチンと言って、紳士

やお嬢さんたちとお酒を飲んで、デカダン生活とやらをお続けになつていらつしやるのでしよう。でも、私は、それをやめよ、とは申しませぬ。それもまた、あなたの最後の鬭争の形式なのでしようから。

お酒をやめて、ご病気をなおして、永生きをなさつて立派なお仕事を、などそんな白々しいおざなりみたいなことは、もう私は言いたくないのでございます。「立派なお仕事」などよりも、いのちを捨てる気で、所謂悪徳生活をしとおす事のほうが、のちの世の人たちからかえつて御礼を言われるようになるかも知れませぬ。

犠牲者。道德の過渡期かときの犠牲者。あなたも、私も、きつとそれ

なのでございましょう。

革命は、いつたい、どこで行われているのでしょうか。すくなくとも、私たちの身のまわりに於おいては、古い道徳はやっぱりそのまま、みじんも変わらず、私たちの行く手をさえぎっています。海の表面の波は何やら騒いでいても、その底の海水は、革命どころか、みじろぎもせず、狸たぬきねい寝入りで寝そべっているんですもの。

けれども私は、これまでの第一回戦では、古い道徳をわずかながら押しつけ得たと思っています。そうして、こんどは、生れる子と共に、第二回戦、第三回戦をたたかうつもりでいるのです。

こいしいひとの子を生み、育てる事が、私の道徳革命の完成なのでございます。

あなたが私をお忘れになっても、また、あなたが、お酒でいのちをお無くしになっても、私は私の革命の完成のために、丈夫で生きて行けそうです。

あなたの人格のくだらなさを、私はこないだも或るひとから、さまざま承りましたが、でも、私にこんな強さを与えて下さったのは、あなたです。私の胸に、革命の虹にじをかけて下さったのはあなたです。生きる目標を与えて下さったのは、あなたです。

私はあなたを誇りにしていますし、また、生れる子供にも、あなたを誇りにさせようと思っています。

私生児と、その母。

けれども私たちは、古い道徳とどこまでも争い、太陽のように

生きるつもりです。

どうか、あなたも、あなたの闘いをたたかい続けて下さいまし。革命は、まだ、ちつとも、何も、行われていないんです。もつと、もつと、いくつもの惜しい貴い犠牲が必要のようでございます。

いまの世の中で、一ばん美しいのは犠牲者です。

小さい犠牲者が、もうひとりいました。

上原さん。

私はもうあなたに、何もおたのみする気はございませんが、けれども、その小さい犠牲者のために、一つだけ、おゆるしをお願いしたい事があるのです。

それは、私の生れた子を、たったいちどでよろしゅうございませから、あなたの奥さまに抱かせていただきたいのです。そうして、その時、私にこう言わせていただきます。

「これは、直治が、或る女のひとに内緒に生ませた子ですの」
なぜ、そうするのか、それだけはどなたにも申し上げられません。いいえ、私自身にも、なぜそうさせていたきたいのか、よくわかっていないのです。でも、私は、どうしても、そうさせていただかなければならないのです。直治というあの小さい犠牲者のために、どうしても、そうさせていただかなければならないのです。

ご不快でしょうか。ご不快でも、しのんでいただきます。これ

が捨てられ、忘れかけられた女の唯一ゆいいつの幽かすかないやがらせと思お
召ほしめし、ぜひお聞きいれのほど願います。

M・C　マイ、コメデアン。

昭和二十二年二月七日。

青空文庫情報

底本：「斜陽」新潮文庫、新潮社

1950（昭和25）年11月20日発行

1987（昭和62）年5月25日82刷改版

1994（平成6）年6月5日93刷

初出：「新潮 第四十四卷第七号〜第十号」

1947（昭和22）年7月1日〜1947（昭和22）年10月1日

※底本巻末の渡部芳紀氏による注解は省略しました。

入力：SAME SIDE

校正：細渕紀子

2003年1月23日作成

2015年9月30日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

斜陽

太宰治

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>